

---

# スクール・ギャング×シューティング・ガール

大東時雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スクール・ギャング×シューティング・ガール

### 【Nコード】

N1968G

### 【作者名】

大東時雄

### 【あらすじ】

全体のあらすじ 近未来。貧富の格差は極限に達し、犯罪が激増。日本は、アメリカ以上の銃社会となっていた。流れ者の女子高生美鈴は、二丁拳銃の使い手。都立古宿高校に転校した初日に、銃撃戦に巻き込まれる。とっさに、風紀委員の眼鏡っ娘、里沙を助け、女子高生ギャング数名を倒す。里沙が、中国系女子高生ギャング団のリーダー、李秀英を追っていることを知った美鈴は、成功報酬五〇〇万円の約束で、助太刀をすることにした。李秀英が深夜の古宿高校で麻薬取引をしようとするとの情報を得た美鈴達は、女子高生モデルで

生徒会長の百合花、元柔道部で「都立高生最強の女」隆子、学年一の美少年サトルらを仲間に加え、逮捕に向かうが……

## 序章「OK高校の血闘!？」

序章「OK高校の血闘!？」

近未来の日本。貧富の格差は極限に達し、犯罪が激増。政府は、自己防衛を求める富裕層からの要求に応じ、自己責任の名の下に、民間人による拳銃所持を、全面的に自由化した。

それから、五年の月日が流れた。日本は、アメリカ以上の銃社会になっていった……

\* \* \*

「アンタ、みすず、だろ？」

呼び止められた黒いセーラー服の少女は、ゆっくりと振り返った。一陣の強い風が、校庭を吹き抜けた。

長い黒髪が、風に舞った。

三月の風は、まだ、冷たかった。

加藤美鈴は、左手で、顔にまとわりついた髪を、かき上げた。色白の、面長の顔が、露あわになった。

彼女は静かに、右足を半歩ほど後ろに引いた。スカートから伸びた白く細い足は、膝下まである黒い武骨ぶこつなブーツに、包まれていた。

「先に名のるのが、礼儀だよ」

切れ長の目で、にらみつけた。

十五メートルほど先に、背の低い女子高生が、立っていた。制服は、茶色のブレザー型。

他校の少女だ。

チェックのミニスカートは、パンツが見えそうなくらいに、短かった。右の太ももには、細いガンベルトが巻かれている。ももの外側にあるホルスターは、既に、留め金が外されていた。

背の低い少女は、ウェーブのかかった茶色い髪を、左手でかき上げた。わざと、左耳を見せるように。

「アタシの名は、アッコ」

ニヤリと、口元を歪めた。

左の耳たぶは、上半分しか、残っていないかった。耳たぶの下部は、醜い残骸だけが、わずかに残っているだけだ。

美鈴は内心、舌打ちをした。

片耳のアッコ。東武線方面では、名の知られた早撃ちだ。

噂によると、拳銃のタイムン勝負を初めてしたのは、十三歳の時。相手は、中学のスケバン。場所は、体育館の裏。

二人は、ほぼ同時に引き金を引いた。スケバンの放った弾丸は、アッコの左耳を吹き飛ばした。一方、アッコの放った弾丸は、スケバンの腹部に命中した。しかも、続けざまに二発目を胸部に、三発目を頭部に撃ち込んだ。拳銃を抜いてから、三発目を撃つまでにかかった時間は、わずか一秒。

それ以来、片耳のアッコは、一〇人を超える拳銃使いの女子中高生と、早撃ちタイムン勝負を行い、全てに勝利してきた。初めての時を除いて、ただの一度も、相手の銃弾が、アッコの体をかすめることは、なかった。アッコの拳銃を抜く早さは、決闘を重ねることに、早くなっているようだ。

「で、美鈴って女に、拳銃使いが、何の用なの？」

言葉を選びながら、美鈴は、ゆっくりと尋ねた。

同時に、よく見えるように目を細め、アッコの右の太ももを注視した。

ホルスターから露出している拳銃の銃把は、小さかった。おそらく、二十二口径の小型拳銃。他の早撃ち達が使うのと同様の、銃身が強化プラスチック製の、軽量拳銃だろう。

「アンタ、ひよつとして、まだ知らないの？」

アッコは、さらに口元を歪めた。だが、その目は、笑っていないかった。

「アンタの首に、懸賞金がかかったんだよ。三〇〇万円も」

美鈴の表情が、わずかに険しくなった。

「美鈴って女は、いったい何をしたの？」

「とぼけんなよ。アンタ、先月、浦和で風紀委員を殺しただろ。」

風紀委員を殺しちまったら、県の教育委員会が、懸賞金をかけるのは、当然だろ」

風紀委員は、各都道府県教育委員会の直属機関である風紀取締局が任命し、各高校に派遣している高校生だ。

「正当防衛よ。それに、あいつは、汚い女よ」

美鈴が、憎々しげに吐き捨てた。色白の美しい顔が、憎悪でわずかに歪んだ。

ククツと、アッコが声を押し殺して笑った。

「汚いからって、いちいち殺していたら、この国から、女子高生がいなくなっちゃうかもよ」

その時、別の女の声が飛んだ。

「早くやりなさいよ！」

甲高い、耳障りな声だ。

美鈴はアッコに顔を向けたまま、声がした方角を、横目でチラリと見た。

ショートヘアの黒髪に、銀縁の細い眼鏡の女子高生。セーラー服の胸には、銀色の桜のバッジを付けている。

椎名<sup>しんない</sup>政美。この高校、県立奥川口高校の風紀委員だ。

政美は校舎から出ると、ツカツカと近寄ってきた。だが、美鈴から三〇メートルほどの距離に來ると、用心のためか、ピタリと立ち止まった。彼女の背後には、四人の少女がつき従っていた。いずれも、政美に任命された風紀委員の助手だ。

政美達五人は、全員セーラー服姿で、腰にガンベルトを巻いていた。

「アッコ！ あなたに払った前金の一〇〇万円は、私の自腹なのよ。ここでやらないんなら、前金を返してもらおうわよ」

アッコも、横目でチラリと政美を見た。

「分かってるって。手柄は全部アンタのものだ。アタシは、金だけもらえれば、それでいい」

視線を美鈴に戻したアッコの口元からは、既に、笑みが消えていた。

「美鈴！ 先に抜きな！」

美鈴は、少しあごを引いてアッコを見つめ、静かに口を開いた。

「たいそうな自信ね」

「ああ。アタシは県内で一番早いからね。それに引き替え、二丁拳銃の美鈴は、大宮の三十六人殺しで名は知れてるが、早撃ちだつて話は聞いたことがねえ」

「噂には、勝手に尾ひれがつく。実際には、八人よ」

「そう……、まあ、噂つてのは、そんなものかもね」

「アッコ！」

政美が、再び口を挟んだ。だが、アッコはそれを無視し、言葉を続けた。

「オイ。噂の二丁拳銃は、ひよつとして、背中にしょつてるスポーツバツクの中にあるのか？ だったら、出すまで待つててやつてもいいよ」

アッコは、美鈴のつま先から頭のてっぺんまでを、素速く見た。

美鈴は、ホルスターを身に付けているようには、見えなかった。スカートのは、膝上十五センチほどだ。だが、美鈴は背が高く、その分、足も長い。だから、スカート丈は、それほど短いわけではない。小型拳銃を納めたホルスターなら、充分に隠すことができる。だが、スカートの下の拳銃は、素速く抜くことができない。

また、美鈴のブーツは、彼女の細い足には、太すぎるようにも見えた。ブーツの中に拳銃を隠すことも、十分に可能だ。だがその場合でも、素速く抜くことはできない。

「さつさと殺しなさいよ！」

政美がまた、口を挟んだ。

アッコは美鈴から視線を逸らさずに、怒鳴った。

「アンタは黙ってな！ 万が一にでも、丸腰の女を撃ちまったら、アタシの名に傷がつく。アンタみたいなお嬢には分からねえだろうが、拳銃使いにとって、名誉は、命よりも重いんだ！」

早撃ちの拳銃使いにとって、いったん「汚い奴」とのレッテルが貼られてしまうと、もう終わりだ。早撃ちのタイマン勝負は、二度と受けてもらえなくなる。早撃ちで、懸賞金を稼ぐこともできなくなる。

美鈴は、背負っていた黒いスポーツバックを、ゆっくりと肩から外し、足下の地面に静かに下ろした。

バックのジッパーを開けないまま、美鈴は上体を起こし、アッコを見据えた。

「バックの中じゃ、ないのか」

アッコのその言葉に、美鈴は、黙ってうなずいた。

両肩の力を抜き、左足を半歩前に出した姿勢で、アッコを見つめた。

「準備は、いいよ。先に、抜きなよ」

美鈴が、静かに言った。

アッコは、あごを少し引き、上体をわずかに前傾させた。右の脇を少し開き、右手は、腰から拳二つ分ほど離れた位置で静止させた。

「アタシは、早いよ」

「分かってる」

美鈴が、答えた。

二人の少女は、静止したまま、微塵も動かなかった。

そのまま、時間が流れた。

三秒、四秒、五秒……

ピクリと、アッコの右手人差し指が、動いた。

次の瞬間、美鈴が、右方向に跳躍した。左足で大地を蹴った彼女は、空中で、右膝を胸に引きつけるように勢いよく蹴り上げた。

その瞬間、右のブーツの中から、銀色に光るものが飛び出した。

三十八口径の回転式拳銃だ。

アッコは、右手で拳銃を引き抜いた。体を低く沈み込ませながら。美鈴は、リボルバーを右手でつかむと同時に、体をひねって銃口をアッコに向けた。

銃声が、轟いた。

美鈴の細い体は重力によって落下し、右肩と右腰が、同時に地面に激突した。

アッコの体が、しゃがみ込んだような姿勢のまま、後方に倒れた。そのまま、数秒が、流れた。

政美の助手の一人が、口を開いた。

「あ、相撃ち……？」

だが、その言葉が終わらないうちに、美鈴が、上体を起こした。

ゆっくりと立ち上がった美鈴は、左手で、胸の赤いスカーフに触れた。

スカーフの先に、穴が空いていた。その穴の周囲は、焼けこげていた。

アッコの放った二十二口径の弾丸が、貫通していたのだ。

美鈴は、ゆっくりと歩いた。アッコから五メートルほどの距離で、立ち止まった。

倒れたアッコの顔面は、美鈴の三十八口径の弾丸で、打ち抜かれていた。

美鈴の表情が、歪んだ。ほんのわずかであったが。

静かに、つぶやいた。

「片耳のアッコ。アンタ、ホントに早かったよ」

確かに、アッコは早かった。その上、射撃の腕も、一流だった。なぜなら、回避行動をとる美鈴の動きに合わせて、銃撃したのだから。だがアッコは、重力の影響まで計算する余裕は、なかった。それが、アッコの敗因だった。

突然、美鈴が、振り返った。政美達を、にらみつけた。風下にいた美鈴の耳に、ほんの微かではあったが、金属音が、風上から流れ

てきたからだ。

政美と四人の助手は、全員、凍りついた。金属音は、彼女達の、ホルスターの留め金を外す音だった。

助手の一人が、口を開いた。

「椎名さん、やりましょう」

政美は、強張った表情のまま、首を横に振った。

別の助手が、ささやいた。

「こっちは、五人です。同時に拳銃を抜けば……」

「ダメよ！ あの女は、私達とは育った世界が違う。淑女が猛獣と戦っても、勝ち目はない……」

政美は、途中で言葉を飲み込んだ。

なぜなら、美鈴が急ぎ足で、近寄ってきたからだ。

向かい風を受け、宙に躍る美鈴の長い黒髪は、まるで、彼女が発する怒りのオーラのようだった。

「椎名さん！ やらなきゃこっちがやられる！」

助手の一人が、恐怖のあまり裏返った声で叫びながら、拳銃を抜いた。

その瞬間、美鈴の右手の拳銃が、火を噴いた。

助手の少女は、眉間を撃ち抜かれた。まだ、二〇メートル以上の距離が、あつたにもかかわらず。

美鈴の射撃は、非情なほどに正確だった。

助手の少女達が、一斉に悲鳴を上げた。恐怖で表情を引きつらせながら、全員ほぼ同時に拳銃を抜いた。

美鈴は、右足で踏み込み、前方へ飛んだ。まるで、地面にダイビングするかのように。同時に、左膝を、胸に引きつけるように蹴り出した。

銀色のリボルバーが、左のブーツから飛び出した。

左手でリボルバーをつかむと同時に、二つの拳銃の引き金を絞った。

美鈴は、まるでバレーボールの選手が床に飛び込んでレシーブを

する時のように、両腕を前に伸ばして胸から着地した。

三人の少女が、地面に崩れ落ちた。

少女達は、誰も引き金を引くことなく、絶命した。

美鈴が、立ち上がった。二丁の拳銃を、政美に向けたまま。

政美は、ガタガタと震えていた。

「なぜ、アンタは抜かないの？」

政美は、恐怖で歯がガチガチと鳴るのを堪え、言葉を絞り出した。

「風紀委員を、殺したら、大変なことになるわよ」

「もう、一人殺してるよ」

美鈴の声は、氷のように冷たかった。

政美は、背中の毛が総毛立つのを感じた。

「で、でも、私は、自分の拳銃に全く手を触れてないわ。その私を殺したら、正当防衛は、成立しないわよ」

美鈴は、政美をにらみつけたまま、首を微かに振りながら、吐き捨てた。

「アンタは、まるで分かっちゃいない。自然界の鉄の法則を」

政美が口を開きかけたが、美鈴はそれを無視し、言葉を続けた。

「生きるためには、喰わなきゃならない。喰うためには、殺さなきゃならない。だから、殺しそこなつた者は、死ななきゃならない。獲物を仕留めそこなつた狼は、空きつ腹を抱えて餓死さだめするのが運命だ。アンタは、アタシを殺そうとした。そして、それに失敗した。だからアンタは、死ぬべきだ。それが、自然界の鉄の法則」

美鈴が口を閉じた瞬間に、政美がすかさず、言葉を挟んだ。

「ここは、自然界じゃない。学校よ」

「どちらも同じだよ。ヒトが生きる学校も、ケモノが生きる大自然の荒野も」

「全然違うわよ。なぜなら、人間の世界には、正義がある……」

「正義だって？」

美鈴が、鼻で笑った。

「ええ、そうよ。だから、正当防衛以外で人を殺したら、殺人犯

として、警察庁があなたを、日本全国に指名手配することになる。証人だって、ほら、後ろの校舎で、たくさん生徒達が窓から私達を見ているわ。彼らの多くは、正義を求めて、真実を証言するはずよ。今までは、県の教育委員会からの、県内の学校だけの指名手配だったけど、警察庁が指名手配して懸賞金をかけたら、あなたは日本全国どこに逃げてても、賞金稼ぎに命を狙われることになるわ」

美鈴は、政美の背後の校舎に、チラリと視線を向けた。

心の中で、美鈴は思った。今、この女を殺さなければ、後々面倒なことになる。相手を殺しそこなえば、自分が殺される。それが、自然界の鉄の法則。だがこの場には、多くの目撃者がいる。そのうちの何名かは、政美の言うとおり、法律上の正義を求めて、真実を証言するだろう。

美鈴は、口元を憎悪で少し歪め、言葉を吐き出した。

「腰抜け女め！」

いきなり、右手に持った拳銃の銃把で、政美の顔面を殴りつけた。グシャリと、政美の鼻がひしゃげた。

ダラリと、真っ赤な血が流れた。

「どう？ これでもまだ抜かないの？」

政美は、ガタガタと震えながらも、黙って首を左右に振った。

美鈴は、心の中で、舌打ちをした。

だが、仕方がない。多くの目撃者のいる中で、正当防衛以外で、人を殺すわけにはいかない。たとえ、自分の命を狙った者であっても。

美鈴は、侮蔑の表情をわざと浮かべて、吐き捨てた。

「銃を抜く度胸がないなら、人の命など、狙うな。腰抜けは、さっさと消えな」

ゴクリと唾を飲み込んでから、政美は、美鈴に背を向けた。校舎のほうに向かって、歩き出した。

数歩も進まないうちに、恐怖に突き動かされた政美は、走り出した。校舎に飛び込んだ後、振り返って美鈴のいた方角を見た。

美鈴は、既に、校門から出るころだった。

政美は、折れた鼻に右手を当てながら、大声で叫んだ。激しい憤怒と憎悪の感情に突き動かされて。

「美鈴！ よくもアタシの美しい鼻をへし折ってくれたわね！それに、風紀委員の助手を四人も殺して、ただじゃすまないわよ！県教育委員会の懸賞金は、六〇〇万、いえ、一〇〇〇万円までいくわ！ そうなったら、埼玉中の賞金稼ぎが、あなたの首を狙いに来るわよ！ 片耳のアッコより腕のいい早撃ちは、県内にはまだまだいるわ！ それに、寝首をかくような汚い拳銃使いも。近いうちに、アッコよりも腕が良くて、その上もつと利口な拳銃使いを雇って、あなたを殺してやる！ 首を洗って、待ってなさい！」

美鈴は、黙ったまま、振り返らずに校門を出た。

政美を殺しそなったことに対する悔恨の念を感じつつ、心の中で、自分で自分に言い聞かせた。

「ちようどいい。もうそろそろ、埼玉から卒業する時期だと、感じていたところだよ」

美鈴は、その日の内に、埼玉県を出た。十四歳の時から無宿人<sup>むしゆくにん</sup>だった美鈴にとって、財産と呼べるものは、背中に背負ったスポーツバックと、二丁の拳銃、それに、母の形見の黒革のブーツだけだった。

美鈴は、生まれて初めて、生まれ育った県を離れた。

そして、東京へと向かった。

## 序章・終

## 第一章「転入初日に銃撃戦!？」

### 第一章「転入初日に銃撃戦!？」

美鈴は、コンクリート塀の前に立っていた。塀の高さは、三メートル半はある。しかも塀の上には、有刺鉄線が幾本も張られている。これではまるで、刑務所の塀のようだ。だがこの塀は、脱出防止用ではない。侵入防止用だ。

この塀に周囲をぐるりと囲まれているのは、都立古宿高校。戦前から続く伝統校だが、最近では、他の公立高校と同様、酷く荒んでいらい荒んでいたほうが、流れ者にとっては、潜り込みやすい。

塀の外側には、コンクリート製の小さな地蔵が並んでいた。地蔵の前には、枯れた花束が供えられている。乱射事件で死んだ生徒へ、手向けたものだろうか。

美鈴は、スポーツバックを背負ったまま、手を合わせずに黙禱した。

三〇秒ほどで目を開けると、正門の前へと、歩を進めた。大きな鉄製の扉は、固く閉ざされていた。

一瞬、美鈴は思った。まるで、自分を拒んでいるようだ、と。だが、すぐに思い直した。閉ざしているのは、防犯のためだ。

腕時計を見ると、時刻は、既に一〇時を過ぎていた。

美鈴は、真新しいカード式の学生証を、金属製の門柱のパネルに当てた。正門の脇にある、通用門のドアが、自動的に開いた。中に、入った。

正門のすぐ前に、四階建ての校舎があった。その玄関の曇りガラス製扉は、中央にある一つだけが、開いていた。

玄関の前で、立ち止まった。

一陣の強い風が、美鈴の左から右へと、吹き抜けた。

東京の四月の風は、妙に生暖かく、肌にまとわりつくようだった。美鈴は、内心想った。静かすぎる。

生徒達のざわめきも、授業を行う教師の声も、聞こえない。イヤな予感がした。

美鈴は、おそろおそろ、中をのぞいた。

玄関の中には、生徒用の下駄箱が、ずらりと並んでいた。金属製の扉付きで、高さはメートル二〇センチくらいか。開いていたガラス扉の前だけ、幅七、八メートル、奥行き五、六メートルほどのスペースが空いている。そのスペースの奥には、左右に伸びた廊下があった。

静かに、ゆつくりと、中に入った。

玄関の中ほどまで来たところで、美鈴は、歩を止めた。

殺気を、感じたのだ。

それに、微かな硝煙かすの匂いにお。一〇分以内、いや、五分以内に、ここで銃撃戦があったに違いない。

その場で腰を屈め、右足のブーツの中から、拳銃を静かに取り出した。

続いて、左足のブーツからも、拳銃を取り出した。

二丁の拳銃を前方に向けて構えたまま、美鈴は、左側の下駄箱に、音を立てずに近づいた。

身を乗り出して、下駄箱の裏をのぞいた。

少女がいた。セーラー服で、三つ編みのおさげ髪。腰を屈め、息を殺している。

その少女が、顔を上げた。

黒縁の眼鏡を、かけていた。

美鈴に目を向けると、左手の人差し指を立てて、くちびるに当たった。

その少女は、右手に、拳銃を持っていた。銃身がプラスチック製の二十二口径自動式拳銃。

少女は、左胸のポケットから、左手で、生徒手帳を取り出した。片手で器用に開くと、銀色の桜の紋章が現れた。

風紀委員だ。

「危ないから、さがってなさい」

三つ編み眼鏡少女が、小声でささやいた。

「相手は、誰？」

美鈴も、ささやくような小声で、尋ねた。

「李三姉妹のグループよ」

聞いたことがあった。池袋から渋谷辺りにかけてを縄張りとし、

麻薬密売を主な収入源としている女子高生ギャング団だ。

「加勢するよ。何人いるの？」

小声でささやきながら、美鈴は、左手を下駄箱の上に挙げ、拳銃を見せた。

少女は黙ってうなずき、生徒手帳を胸ポケットに戻してから、左手の指全部を伸ばして開き、拳銃の銃身を立てて添えた。

六人だ。

その時、美鈴から見て右手側の下駄箱裏から、少女達の声が聞こえた。

「イー、アル……」

瞬間的に、美鈴は床に片膝を付き、姿勢を低くした。同時に、両腕を真つ直ぐに伸ばし、二丁の拳銃を右方向へ向けた。

その直後、三つ編み少女が上体を起こし、下駄箱の上に両肘をついて拳銃を構えた。

「サン！」

その怒声と共に、下駄箱の裏から、赤いセーラー服の少女達の上半身が、現れた。

その瞬間、耳をつんざく銃撃音に、包まれた。

合計八人の少女達が、一斉に発砲したのだ。

だが、わずか一秒足らずで、赤セーラーの少女達の姿は、全員、視界から消えた。

「アイヤー！」

下駄箱の裏から、赤セーラー少女の叫び声が、聞こえた。

「何人やった？」

三つ編み少女は拳銃を構えたまま、叫ぶように美鈴に尋ねた。

「四人。アタシはね」

その直後、一人の赤セーラー少女が、突然、廊下へ飛び出した。短い金髪のその少女は、後ろを振り返ることなく、脱兎のごとく、右方向へ走り去った。

一瞬遅れて、三つ編み少女が、廊下へ飛び出した。一発、発砲した。

「しまった！ 教室に逃げ込まれたわ！」

三つ編み少女が、叫んだ。

彼女は廊下を走って教室の近くまで進むと、ドア脇の壁に、背中をつけた。

立ち上がった美鈴は拳銃を構えたまま、赤セーラー少女達が隠れていた下駄箱の裏を、用心深くのぞいた。

五人の少女が、床に崩れるように倒れていた。

そのうち四人は、頭部を撃たれて、即死している。美鈴が撃った少女達だ。

残り一人は、二十二口径の弾丸を二発も喰らって、虫の息だった。負傷力所は、左肩と左胸。心臓は、外れているようだ。

三つ編み少女が、拳銃を構えて、教室の中に飛び込んだ。

「チクシヨウ！ 窓から逃げられたわ！」

そう吐き捨てた後、三つ編み少女は、美鈴のところへ戻ってきた。頭部に三十八口径の弾丸を喰らった四つの死体を、冷やかに見下ろしながら、口を開いた。

「あなた、良い腕してるわね。名前は？」

「先に名のるのが、礼儀だよ」

美鈴は、重傷少女から視線を引き剥がし、三つ編み少女に目を向けた。

「わたしは、藤崎里沙。秘密捜査中の風紀委員よ。もつとも、一人取り逃がしたから、もうばれちゃったわね。これでもう、秘密捜査はできないわ。で、あなたは？ 凄腕の拳銃使いさん」

「アタシの名は、美鈴。加藤美鈴」

「そう……。で、転校生なの？」

「そうだよ。ところで、李三姉妹は、この中にいるの？」

美鈴は、四つの死体を、あごで指して尋ねた。

「一番派手な髪型のコが、李三姉妹の末妹、李美姫よ。美少女で有名だったけど、三十八口径を顔面に喰らっちゃ、無惨なものね」  
ククツと、里沙が笑った。

「で、懸賞金は、いくらかかってんの？」

里沙の屈折した笑顔から視線を逸らし、美鈴が尋ねた。

「懸賞金？ そんなもの、かかってないわ」

さも当然であるかのように、里沙が答えた。

それに対し美鈴は、不機嫌そうに、問い質した。

「そんな馬鹿な話、ないよ。李三姉妹は、この辺じゃ有名な悪党でしょ。だったら、懸賞金がかかるのは、当然じゃない？」

「あなた、知らないの？ このコ達、私達とは国籍が違うのよ。外国人に懸賞金なんてかけたら、大使館から東京都の教育委員会へクレームが来ちゃうわ。特に、特定アジアの大使は、うるさいからね」

美鈴は、軽く左右に首を振った。

「なるほどね。だけど、風紀委員には、特別ボーナスが出るでしょ。手柄はアンタにあげるから、アンタが射殺したことにして、力ネだけアタシによこしなよ」

里沙は、一瞬口ごもった後、言葉を選ぶかのように、慎重に答えた。

「風紀委員に対して出る、金銭的な報奨金のことね。この件に関しては、李グループを壊滅させて、グループのリーダー、李三姉妹の長姉、李秀英を、逮捕するか殺害しなければ、出ないわ」

「いくら？」

「一〇〇〇万円よ」

美鈴は、一瞬息を飲んだ。

「大きな額だね」

里沙は、まるで値踏みするかののように、美鈴のつま先から頭のとつぺんまでを、なめるように見た。

「ええ。秘密捜査は、もうできなくなったことだし……。あなたみたいな、凄腕の拳銃使いとだったら、手を組んでも良いわよ。ファイティー・ファイティーで」

「普通は、全額だよ。カネは、助太刀の拳銃使い。手柄は、風紀委員。そもそも、風紀委員には、カネ以外の褒美もあるでしょ。一流大学への推薦入学や奨学金とか……」

里沙が、すかさず口を挟んだ。

「だけど、李グループを壊滅させるには、頭を使う必要があるわ。第一、李秀英は、私達日本人の前には、姿を現さない。彼女の居所だって分からないし、顔を見た者すら、日本人の中にはいない。だから、拳銃の腕だけじゃ、あの女を殺すことはできないわ」

不満げににらみつける美鈴を正面から見据えて、里沙が言葉を続けた。

「それに、このままじゃ、あなたの今日の大活躍は、ただ働きになっちゃうわよ。私のオファーを拒否して何も手に入れないか、それともオファーを受け入れて五〇〇万円を手に入れるか……。五〇〇万円は、節約家なら、三年ほど暮らせる大金よ」

「分かった。それで手を打つよ」

美鈴は、あっさりと引き下がった。もともと、この手の交渉が、苦手なのだ。

「で、李秀英を仕留める計画は、あるの？」

「ないわ。今はね。これから、考えるわ」

そう言いながら里沙は、自分のスカートを無造作にまくり上げた。右の太ももの付け根に、ホルスターの付いたガンベルトを巻いてい

た。彼女は拳銃をホルスターに納めると、きつちりとホルスターのフタを閉め、カチリと音を立ててボタンを留めた。

「それじゃあ、早撃ちはできないね。スカートも長すぎるし」  
美鈴がそう指摘すると、里沙は平然と答えた。

「わたしは決闘なんてしないから、早撃ちする必要なんてないわ」  
その時、里沙は、美鈴が手ぶらであるのに気づいた。

「あれっ？ あなた、さっきの銀色の二丁拳銃は？」

美鈴は黙ったまま、自分のスカートの両裾を、両手で五センチほど持ち上げた。

両ももの外側に、黒色のホルスターの下部が、現れた。

ほんの一瞬見せただけで、スカートをすぐに戻した。

「あなたも早撃ちは苦手そうね。スカートが長すぎるもの。早撃ちをするコはみんな、パンツが見えそうなくらいに、スカートを短くするわ。拳銃を抜く時に、スカートの裾が、邪魔にならないようにね」

里沙のその言葉を聞き流し、美鈴は話を戻した。

「良い計画を一つ、思いついた。妹を使って、姉をおびき出す」

「李美姫は、もう、死んでるわよ」

里沙が即答した。つまらなそうな顔で。

「だけど、美姫が死んだことを知っているのは、アタシ達二人だけだよ」

「一人逃げたじゃない。あの女が、李秀英に報告するわ」

「あの女は、李美姫の死を、きちんと確認してないよ。銃撃戦の最中だったからね。ひよっとして、こっちのほうと、誤認したかもよ」

そう言っつて美鈴は、重傷で虫の息の少女を、ブーツの先でつついた。

「それって、希望的観測でしょ？」

「希望を持つのは、李秀英も同じだよ。家族の死は、受け入れがたいものだからね。死体を隠して、重傷だけとまだ生きてる、って

いう噂を流せば、向こうから、アタシ達に接触してくるよ」

里沙は、腰に左手首を当て、暫し考えた。しばらくの沈黙の後、口を開いた。

「面白そうね。やってみる価値はあるわ。で、具体的な計画は？」

美鈴が、ニヤリと笑った。

「まずは、保健室に行く。重傷者と、美姫の死体と一緒にね」

里沙は、眉間にしわを寄せた。

「保健室は……、良いアイディアじゃないわ」

「どうして？」

「行ってみれば、分かるわよ」

## 第一章・終

## 第二章「保健室は野戦病院!？」

第二章「保健室は野戦病院!？」

美鈴は、二つの死体から赤いセーラー服を脱がし、それを、重傷少女と、死んだ李美姫の顔に被せた。

「他の生徒に、顔を見られないようにしないとね」

美鈴のその言葉に、里沙が答えた。

「他の生徒なんて、一階にはいないわ。一階では、よく銃撃戦が起きるからね。まあ、二階には、生徒が少しいるけど……」

「で、保健室は、どこ?」

「東校舎の一階よ。この校舎は、南校舎」

美鈴は、李美姫の死体の両脇をつかんで、引きずり出した。土足のまま、廊下上がった。

「階段よ」

里沙が、呼びかけた。重傷少女の体を引っ張りながら。

「南校舎から東校舎へ行くには、二階にある連絡通路を通る以外ないわ」

「一階から東校舎へは入れないの?」

「入り口は、東校舎の教職員用玄関だけ。そこは、防弾服と拳銃で完全武装した職員が固めていて、生徒は入れないわ」

「厳重な警備だね」

「東校舎の四階には、校長室と教職員室があるからよ。二階の連絡通路も、自動ロック式の防弾ドアがあつて、普通の生徒は、勝手には入れないわ。わたしは秘密捜査中だから、ほとんど全てのドアの合い鍵になるカードキーを持っているけどね。まあ、東校舎四階のドアは、開けられないけど」

美鈴と里沙は、死体と重傷者を、苦勞しながら二階まで運んだ。

二階の教室の内外には、十数名の生徒がたむろしていた。赤いセ

ーラー服の少女達を引きずる美鈴達を見ると、全員の顔色が変わった。

女生徒の一人が、美鈴達に声をかけてきた。

「李グループのメンバーをやっっちゃうなんて、アンタ達、ひよつとして、新しい風紀委員？ それとも……、ただの馬鹿？」

里沙が、口元をニヤつかせて、答えた。

「馬鹿じゃないわ。アタシは、風紀委員よ。李美姫は重傷で、死にかけてるの。悪いけど、保健室に運ぶの、手伝ってくれる？」

その女生徒は、途端に顔面を引きつらせて、慌てて教室の中に逃げ込んだ。

李美姫という言葉聞いた瞬間に、生徒達は一斉に教室の中に逃げ込んだ。全ての教室内が、騒然となった。

「李美姫を、風紀委員が拘束したって！」

「李美姫が重傷だって！」

「また風紀委員のせいで、血の雨が降る！」  
各教室から、そうした生徒達の声が聞こえてきた。

「風紀委員は、みんなから好かれているね」

美鈴が、思わずイヤミを口にした。

それに対し、里沙は平然と答えた。

「去年の乱射事件は、私には関係ないわ。前任の風紀委員が、単細胞だっただけよ」

二人は重い死体に苦労しながらも、連絡通路にたどり着いた。

里沙がカードキーをパネルに当てると、分厚い金属製のドアが開いた。

連絡通路を、渡った。

東校舎の二階には、音楽室や視聴覚室があった。

二人は階段を下り、一階の奥にある保健室の前に、たどり着いた。美鈴が、保健室のドアを開けた。

鼻をつく臭いが、襲ってきた。消毒薬と汚物と血の臭い。それに、何かが腐りかけたような臭いもする。

「うわっ！　まるで野戦病院だね」

美鈴が思わず、そう吐き捨てた。

保健室には、二段ベットが、ずらりと並んでいた。数えてみると、全部で一〇もある。その全部に、生徒達が横たわっていた。全員、重傷患者のようだ。

「だから言ったでしょ。保健室に行くのは、良くないアイディアだつて」

「去年あつたつていう乱射事件は、相当酷いものだったようだね」

「そうでもないわ。昨年十二月の乱射事件の被害者は、半分くらいよ。四分の一は、その前から入院していて、残りの四分の一は、今年になってからの入院よ。他にも、ベットが空くまで待っている寝たきりの生徒が何人もいるわ。なにせ、この学校の生徒の大半は、国民健康保険に入っていないからね。その点、学校の保健室なら、無保険者でも、生徒である限り、無料で入院できるから」

美鈴は、美姫の死体や重傷少女を、保健室の中に運ぶのを諦めた。重傷少女の怪我の手当は、廊下で行うことにした。

保健室の薬品棚には、消毒薬と包帯しかなかった。

美鈴が、里沙に尋ねた。

「止血剤はないの？」

「そこになければ、奥の部屋よ。モルヒネやなんかと一緒にあるんじゃない？」

「ドアに鍵がかかっている。合鍵貸してよ」

「無理よ。そのドアは、保健の先生しか、開けられない」

「じゃあ、保健教師は、どこにいるの？」

「奥の部屋よ。きっと今頃、あの女は、モルヒネ打って夢見心地よ」

「酷い保健教師だね」

「いまだき都立高校で、保健の先生なんて、まともな神経じゃやっつてられないわ」

「だけど、保健教師がヤク中で、朝からモルヒネやってるんなら、

患者の面倒は誰が看てるの？」

「保健委員よ。各クラスの保健委員が、毎日、昼休みと午後に来て面倒みるのよ」

「へへえ。えらいもんだね」

「そうでもないわよ。だって、保健の先生からモルヒネを分けてもらってるんだから。彼らはそれを、クラスメイトに販売して小遣い稼ぎしてるってわけ」

その里沙の答えを聞いた美鈴は、思わず絶句した。

「それもまた……、酷い話だね。保健教師と保健委員が、グルになつて麻薬販売なんて……」

「そお？ だけど、そうでもしなきゃ、このコ達の面倒、誰が看るの？ 保健の先生一人じゃ、これだけの人数面倒みきれないし、ただ働きなら、誰も介護の仕事なんてするわけないわ」

その時、少女の声があった。

「ねえ。のどが渴いたの。お水ちょうだい」

美鈴は、すぐにその少女を見つけた。入り口近くのベットの一段目に寝ていた。大きな瞳が印象的な、黒髪の少女だった。

里沙が、代わりに答えた。

「うるさいわね。私達は、保険委員じゃないの。彼らが来るまで待ちなさい」

「だってアタシ、昨日から何も飲んでないのよ」

「それがどうしたって言うの？ 寝たきりなんでしょ。飲み過ぎると、お小水が、尿瓶しびんから溢れちゃうわよ」

「お水飲みたい！」

少女が、甲高い声で叫んだ。

里沙が何か言おうと口を開きかけたが、その前に、美鈴が口を開いた。

「いいじゃない。少しくらいなら」

そう言つて、美鈴は紙コップを手に取り、保健室の壁際にある洗面台の蛇口から、水道水を少し汲んだ。少女のところまで、そのコ

ツプを運んだ。

「どう、持てる？」

美鈴は、コップを差し出した。

少女は、悲しげな目で答えた。

「アタシ、全身不随で、首から下は、ほんのちよっとも、動かさないの。お姉さん、飲ませてくださる？」

美鈴は紙コップを、少女の口に静かに当て、水をゆっくりと流し込んだ。

「ありがとう。優しい親切なお姉さんに出会えて、カオリ、感動しちゃった」

「カオリっていうんだ」

「そう。田中カオリ。お姉さんの名前は？」

「アタシは、加藤美鈴」

「美しい鈴、って書くの？ 綺麗なお姉さんにピッタリの美しい名前ね。その名前、お母さんが付けたんでしょ？」

美鈴は思わず、押し黙った。母親のことは、美鈴にとって、他人には、触れられたくないことだったからだ。だが、すぐに考え直した。名前を誰が付けたかなど、一般的には、たいしてプライベートな質問ではないはずだからだ。

「そうだよ」

「そうよね。女の子の名前って、母親が付けることが多いのよね。アタシの名前も、そう。良い香りを織る、って書くの」

「香織か……」

「名前を付ける時だけは、どんな母親も、自分の娘を愛するのよね。自分よりも、幸せになってもらいたい。そんな希望を込めてね。しばらく経つと、娘なんて、どうでも良くなっちゃう親もいるけど……。お姉さんは、ずうつと、お母さんに愛されているんでしょ？」

香織の質問は、美鈴の心を、グサリと突き刺した。

「アタシの母は……、死んだよ。アタシが、十四歳の時にね」

一瞬、香織は言葉を飲み込み、押し黙った。だがすぐに、口を開

いた。

「そう……。善人は、早死にするものだからね。アタシの母は、アタシが十五歳の時に、家を出て行ったわ。家賃を何ヶ月分も滞納したままね。おかげでアタシは、すぐに大家から追い出されて、十二月の寒空の下、一人で凍える羽目になったわ。あの女、酷い女だから、今でもたぶん、どこかで生きてるよ。シャブを打ちながらね」

「アタシの母も……」

そこまで言つて、美鈴は口を閉じた。

「何？」

香織が、促した。

美鈴は、言うか言うまいか数秒迷つたが、思い切つて、口を開いた。

「アタシの母さんも、シャブ中だったよ……。親がシャブ中だと、子供は地獄を見るけど、それでも、生きてた方が、良いよね」

「そうかもね……。お姉さんのような優しくて美しい女性を育てたんだから、お姉さんのお母さんは、素晴らしい人だったんでしょうね」

「シャブを始めるまでは……。そうだったかもね」

里沙が、廊下から声をかけてきた。

「美鈴！ ちょっとくらい手伝いなさいよ！ 全然、血が止まらないわ！」

「分かつたよ！」

少しいらだつた声で、美鈴は答えた。

「じゃあね」

香織には、優しく声をかけた。

「お姉さんに、また、会いたいわ。今度は、いつ来てくださる？」  
香織は瞳を潤ませ、すがるような目で美鈴を見た。

「来ても、アタシじゃ、何もしちゃあげられないよ」

「構わないわ。お姉さんのような素敵な女性とは、話をするだけで、まだ生きてて良かった、と思えるもの」

「じゃあ、機会があつたら、また来るよ」

美鈴は、指先で、香織の髪を軽く撫でてから、廊下へ出た。

美鈴を見るなり、里沙がぼやいた。

「全然血が止まらないわ。この女、もうダメね」

「包帯の巻き方が緩いんだよ。止血剤がない時は、圧迫止血で血を止めるしかない。アタシにまかせな」

美鈴は、重傷少女の傷口に、幾重にも重ねたガーゼを当て、きつく包帯を巻いた。

「あなた、うまいじゃない。どこで習ったの？」

「母親。若い時、看護婦だったらしい」

ぶつきらぼうに、答えた。

里沙は、わざと大きな声で話し始めた。

「李美姫も、悪運の強い女ね。アタシの撃った弾丸を二発も喰らったのに、美鈴のおかげで、命拾いしたわね」

すると、保健室の中から、少年の声が聞こえた。

「李美姫だつて？ そんな女、すぐにどこかへ連れてってくれ！ 保健室に置いておかれたら、奴らが大挙してここへ押しかけて来る！」

「あゝら、植物人間じゃないコが、他にもまだいたようね。安心

しなさい。この女は大切な人質だから、安全な秘密の場所にすぐに移すわ。ねっ、美鈴」

里沙が大声で、美鈴に同意を求めた。

「ああ」

美鈴は答えながら、保健室のドアに手をかけた。

香織が、声をかけてきた。

「美鈴お姉さん、気をつけてね」

「ありがとう」

美鈴は答え、ドアを閉めた。

### 第三章「体育館倉庫は秘密の場所!？」

第三章「体育館倉庫は秘密の場所!？」

「本当に安全で、誰も来ない秘密の場所、どこかに心当たり、ある?」

美鈴が尋ねると、里沙が即答した。

「あるわよ。一カ所だけね」

里沙は、李美姫の死体を、廊下の奥の方へと引きずり始めた。

「そつちは、行き止まりじゃない?」

「非常口から、外に出られるわよ」

そう言いながら里沙は、廊下の突き当たりにある非常口のドアを開けた。

美鈴が、不満げな口調で言った。

「そこが開くんなら、わざわざ階段を昇り降りする必要なかったじゃん」

「非常口は、内側からは誰でも開けられるけど、外側からは開けられないのよ。外側から開ける鍵は、カードキーじゃないから、私のキーじゃ開けられないし」

二人は、死体と重傷少女を、校舎の外に出した。

「で、秘密の場所って、どこ?」

美鈴の問いに、里沙は、あごで正面を指した。

「そこ。体育館の第三倉庫よ」

東校舎の非常口を出ると、その正面に体育館の裏口があった。リサがカードキーを使い、ドアを開けた。

中に入ると、ステージの裏側の倉庫だった。多くの折り畳み式の椅子や机が、雑然と置かれていた。

「ここが、第二倉庫。第三倉庫は、そこにある階段を昇ったところよ。ちなみに、体育用具が保管されている第一倉庫は、体育館の

逆側よ」

階段を昇ると、狭い倉庫があった。折り畳んだ紅白の垂れ幕と、スポットライトが二台あるだけだった。

「ここなら、人はあまり来なそうだね」

「あまりじゃないわ。めったに、よ。ここに倉庫があることすら知らない生徒が、大部分よ」

その時美鈴は、倉庫の壁際の奥に、ドアがあるのに気づいた。

「そのドアの向こうは？」

「空中回廊よ」

「空中回廊？ 何それ？」

「体育館の内側の周囲に、通路が設置されているの。高さは、二メートル半くらいかしらね。ちなみに、南側と北側の、空中回廊の中央付近には、スポットライトを設置するスペースがあるのよ」

「へえ〜」

里沙と話しながら、美鈴は、重傷少女を、紅白の垂れ幕の上に寝かせた。

彼女から離れようとしたその瞬間、美鈴の腕を、その少女がつかんだ。

「待てよ。こんな場所においてくな。病院へ連れてけよ」

声自体は弱々しく、かすれていた。

「里沙！ この女、意識が戻ったよ。病院へ連れてけ、ってさ」

里沙が、思わず目を剥いた。

「病院？ 意識が戻っても、頭は朦朧もつろうとしているようね。国民健

康保険に入っていない者が、病院で治療してもらえるはずないでしょ」

「金ならある」

「はした金じゃ、行っても追いつ返されるだけよ」

里沙が、冷ややかに突き放した。

すると、重傷少女は、かすれた声を振り絞るように叫んだ。

「五〇〇〇万円だ！」

その言葉を耳にした瞬間、里沙も美鈴も、息を飲んだ。

しばらくの沈黙の後、里沙が口を開いた。

「相変わらず、あなた達は白髪三千丈ね。あなたのようなザコが、そんな大金持つてるわけない。日本人を、よっぽど馬鹿だと思ってるようなね」

「仕入れ金だ。毎月、李秀英はヤクを仕入れる。その金額が五〇〇万円だ」

里沙が思わず、勢い込んで、尋ねた。

「取引の日時と場所は？」

「ファイフティファイティだ」

「何それ。情報提供だけで、半分寄せさせての？ 九対一ならいいわ」

「四、六だ」

「八、二。これ以上は譲れないわ。第一、一〇〇〇万円もあれば、治療費を払ってもお釣りが来るわよ。それに、ここでゴネてると、病院へ行くのが遅れるし、手術が手遅れになるわよ」

「わかった。八、二でいい。早く病院へ連れて行ってくれ」

「取引の日時と場所は？」

「病院に着いて、手術費用の請求書に、アンタがサインしたら話す」

里沙が、また目を剥いた。

「何ですって！ アタシに手術費用を払えって言うの？ 冗談じゃないわ！」

美鈴が、口を挟んだ。

「里沙、まあ、そう言うなよ。風紀委員の協力者に対しては、風紀委員の健康保険が使えるんだろ？」

「あれは私の保険じゃなくて、風紀取締局の健康保険よ。しかも、風紀委員一人当たりの年間上限予算が決まっているの。まだ四月なのに、こんな女のために使いたくないわ」

「あとで、こいつの一〇〇〇万円の中から、引けばいいじゃん」  
重傷少女が、すかさず口を挟んだ。

「アンタ、話分かる女だな。名前は？」

「先に名のるのが、礼儀だよ」

「張紫明」

里沙と張紫明との間で、交渉が成立した。

李美姫の死体は、紅白の垂れ幕で覆って隠した。その際、李美姫の学生証と、張紫明の学生証を交換しておいた。こうすれば、病院が張紫明を李美姫として扱うため、書類上は、李美姫は生存し続けることになる。

李美姫は、ピンク色の携帯電話を持っていた。電源を切ってから、里沙が、自分のウエストポーチの中にしまった。

里沙が、自分の携帯電話でタクシーを呼び、二人は、張紫明を都立病院へと運んだ。

\* \* \*

都立病院で手術の手続きをしたあと、張紫明から全ての情報を聞き出した。

麻薬取引の場所は、古宿高校。今月の取引日は、何と、今夜だった。

校内を麻薬取引の場所に行っているのは、確かに、合理的な選択だ。なぜなら、教育委員会に風紀取締局が設置されて以来、警察は、校内での捜査権を、事実上失った。刑事も警察官も、校内には、風紀取締局の許可なく立ち入ることができない。その許可を、風紀取締局が出すことは、ほとんどない。ところが、風紀取締局の捜査能力は、個々の風紀委員の能力に大きく左右されるため、概して、警察よりもだいたい落ちる。そのため、全国の公立学校は、無法者の安住の地と化しつつあるのが現状だ。

二人は、高校へ帰るタクシーの中で、話し合った。

「美鈴、私達は、ファイファイファイよ」

「二〇〇〇万円ずつか」

「ええ」

「うまくいけば、今夜、李秀英も、仕留めることができるわね。美鈴、あなたの作戦は、第二作戦として、今夜の作戦がうまくいかなかった時に実行しましょう」

美鈴は、しばらく黙ったまま考えた。張紫明の情報によると、李秀英は麻薬取引の際には、李三姉妹の部下全員を集めるといふ。今朝、李美姫とその部下三名を射殺したが、李グループのメンバーはまだ二〇名以上いるそうだ。自分と里沙の二名では、どう考えても、あたまかす頭数が足りない。

張紫明によると、麻薬取引は、毎月、次のように行われる。取引時間は、深夜零時。取引場所は、南校舎の最上階である四階の教室。南校舎には、一階当たり六つの教室がある。取引場所は、両端を除いた、四つのうちのどれか。つまり、三年二組から五組までのどれかだ。見張り兼警備役の李グループのメンバーが、取引場所となった教室のドアの外側に立つ。人数は、前後のドアとも二名ずつ。さらに、四階と三階の間の階段の踊り場付近には、四名が警備に当たり、四階の非常口の内側にも、二名が警備として張り付く。つまり、四階の廊下と階段には、合計一〇名の武装した女子高生ギャングが、警備に付くわけだ。他に、一階の玄関の内側にも、警備が二名立つ。残りのメンバーは、全員、教室の中で、現金の警備と李秀英の護衛にあたる。

取引時間は深夜零時だが、李グループの先遣隊として、普段は、李大栄りたいえいや李美姫が、自分の部下を引き連れ、十一時少し前に、学校に来る。そして三〇分ほどかけて、不審者がいないかどうか、南校舎の全ての教室と便所をチェックする。そうして安全を確保した上で、携帯電話で李秀英を呼ぶ。彼女が部下を引き連れて校舎に入るの、たいてい十一時半頃だ。

取引相手のチャイニーズ・マフィアのほうも、毎回、二〇名ほどの護衛を連れて来るらしい。五〇〇〇万円分の麻薬を運ぶのだから、そのくらい護衛がいても、当然だろう。

したがって、襲撃するなら、李秀英が、取引場所の教室に到着してから、取引相手のグループが来るまでの間、すなわち、十一時三〇分から零時までの間しかない。しかしそれでも、二〇名を超える大軍と戦わなければならない。

作戦の実行時間は、わずか三〇分。いや、前後一〇分ずつ余裕を持たせるとすると、時間はわずか一〇分間だ。その一〇分間で、李秀英を射殺し、五〇〇〇万円の現金を奪わなければならない。

美鈴は、口を開いた。

「里沙、やっぱり今夜の作戦には、何人か仲間が必要だよ」

「あなたは十人力でしょ」

「相手は二〇人以上だよ。誰か、知り合いはいない？ 拳銃の扱いに慣れていて、その上度胸のある奴」

里沙は、眉間にしわを寄せながら答えた。

「私は一匹狼だからね。残念だけど、そういった心当たりはないわ」

「じゃあ、この学校で、誰か心当たりは？」

里沙は腕組みをして、しばらく考え込んだ。

「この学校には、私も、今年の一月に転校して来たばかりだからね。心当たりは……、特にはないわ」

「だったら、これから探すしかないね」

美鈴は、腕時計を見た。

「もうそろそろ、お昼の時間だね。この高校も、給食は無料でしょう？ だったら、学校の食堂に行けば、たくさん生徒が集まっているんじゃない？ そこで、仲間を集めようよ」

多くの都道府県の公立学校では、数年前から、給食が無料化していた。貧困層が増大したため、有料だと、食べられない生徒が出てしまうからだ。しかも、貧困家庭の子供の場合、家庭では食事ができない者も少なくなかった。そうした社会情勢を背景に、地方分権化の推進により、予算が充実した首都圏など一部の都道府県では、公立高校の学費無料化や、給食費の無料化などが実現した。地方議

会では、国会とは逆に革新派の勢力が伸長したことも、こうしたバラマキ型・人気取り型の政策を、後押しする結果となっていた。

そのため、荒んだ公立高校の生徒達は、授業には出席しなくても、無料給食を食べるために、高校に通うようになっていた。

### 第三章・終

#### 第四章「食堂ホールで一触即発!？」

##### 第四章「食堂ホールで一触即発!？」

二人が古宿高校の食堂に着いた時には、既に、多くの生徒でこつた返していた。この高校の食堂は、全校生徒約一〇〇〇名が、同時に食事を取ることが出来るほど大きい。食堂ホールと呼ばれており、南校舎の北西にある独立した建物の一階にある。

美鈴と里沙は、無料給食の皿を持ち、席を探した。ホールの一番奥にある壁際のテーブルを、確保した。二人は壁に背を向け、並んで座った。ホールの中は、騒々しかった。その喧噪けんそうに時折目をやりながら、二人は食事を始めた。

里沙が、ポテトサラダを口に運びながら、尋ねた。

「で、何人くらい、必要なの？」

ちぎったコッペパンを口に入れながら、美鈴が答えた。

「多すぎると、それはそれで問題が起きるからね」

「私達の取り分も減るしね」

里沙が、同感の意を示した。

「だけど、拳銃使いは、あと最低二名は必要だね」

「合計四人なら……、一人当たりの取り分は一〇〇〇万円ね。それとも、他の連中は、一人当たり二、三〇〇万円ぐらいで、雇うことにする？」

里沙の問いかけに、美鈴は顔をしかめた。

「それはまずいね。そんなことをしたら、現金を手に入れた後で、仲間割れが起きるよ。拳銃使いは、全員平等に分配しなきゃ。リスクの少ない見張り役は別だけどね」

「見張り役まで必要なの？」

「やつぱり、李秀英が校舎に入るのを確認する人間が、必要だからね」

「私達は？」

「他の場所で待機」

「美鈴の具体的な計画、聞かせてよ」

美鈴は、里沙に顔を寄せ、小声で話し始めた。

「私達は、東校舎のどこかに隠れて待機する。李グループがチエツクするのは南校舎だからね。で、李秀英が校舎に入ったことを確認した見張り役の仲間が、アタシ達に携帯電話で連絡してきた後、アタシ達は二階の連絡通路を通り、一気に四階を襲撃する」

「一階の玄関にいる二名は？」

「だから、アタシ達の背後を固める拳銃使いの仲間が、一名必要なわけ。他に、李秀英が四階の非常口から脱出する可能性もあるから、校舎の外に、非常口を開けた途端に銃撃できる位置に、拳銃使いを一名配置しておく必要がある」

里沙は、紙パック牛乳のストローから口を離し、眉間にしわを寄せた。

「ということは、四階の廊下から階段にかけて、一〇名の女子高生ギャングがいるわけだけど、それを私達二人で倒すわけ？」

「他に、拳銃使いがもう一人くらい、いても良いけどね。だけど、廊下も階段も狭いからね。それ以上多いと、かえって邪魔になるよ」  
ククツと、里沙が笑った。

「邪魔、ですって？　すごい自信ね。まあ、今朝のあなたは、確かにすごかったからね。一瞬のうちに、四名を射殺しちゃうんですもの。期待してるわよ。二丁拳銃サン」

その時、テーブルを挟んだ向かい側の席に、ボーイッシュなセーラー服の美人が現れた。背が高く、身長は美鈴くらい。体型はスリムで、髪は短く、明るい茶色。色白の整った顔立ちで、きつめのアイシャドーと薄めのルージュを引いている。

その美人が、ニッコリと笑いながら、声をかけてきた。

「君、転校生？」

その声は、男のように低かった。

「えっ？」

驚いた美鈴は、その美人の顔を、マジマジと見つめた。

「君、三年生でしょ。ボクもそうだよ」

美鈴は驚いた顔で、里沙を見た。だが里沙は、平然とした顔をしていた。

「で、君って、どこから来たの？ 立川よりも奥のほう？」

美鈴が、驚愕の声を上げた。

「アンタ、男？」

「そうだよ。見れば分かるじゃん」

彼は、平然と言った。

「だ、だけど……、セーラー服を着てる……」

「だって、これがうちの高校の制服だもん」

「だけど、男がスカートをはくなんて……」

里沙が冷ややかに、口を挟んだ。

「美鈴、あなた、いったいどの田舎から出て来たの？」

美鈴は、口を何度かパクパクと開いたが、驚きすぎて、言葉を出せなかった。

「君の名前、美鈴っていうんだ。ボクはサトル。岸川サトル。サトルっていう字はね、愛を悟る、っていう字の悟」

「東京の高校じゃ、男はみんな、スカートをはくの？」

美鈴は、あわてて周りを見回した。食堂ホールにいる生徒は皆、セーラー服だった。よく見ると、どう見ても男に見える生徒まで、スカートをはいている。

「みんなじゃないわ。二十三区内の都立校は、三分の二くらいかしら……」

「そっかあ。君は他県から来たんだ」

里沙の言葉を途中で遮り、サトルは美鈴のほうへ、テーブル越しに身を乗り出しながら、尋ねた。

「どこの県？」

「埼玉」

「ええっ？ そんな遠くから来たの？」

驚いた里沙が、思わず大きな声を出した。

「遠くないよ。電車で一時間ほどだよ」

美鈴の言葉を見無視し、里沙が首を横に振った。

「埼玉なんて……。確か特産品は、お茶とサツマイモだけ？」

サトルがうなずきながら口を挟んだ。

「そうそう、確か中学の地理の時間で習った」

「南部は都会だよ」

美鈴はむくれた顔をしながら反論した。

「で、なんで東京の高校の三分の二は、男もスカートはくんだよ。それって、おかしくない？」

里沙が、すぐさま答えた。

「ジェンダーフリー政策よ」

「えっ？」

「ジェンダーフリー政策っていうのはね、男女を全部平等にしよ  
う、という政策なの。女と男が、違う制服着ていたら、それって差  
別になるでしょ」

里沙の説明の仕方は、まるで、物わがりの悪い生徒に、教師が解  
説する時のような口調だった。

「でも……。男がスカートをはくなんて……」

「埼玉って、田舎ねえ」

里沙のイヤミな口調に、美鈴は、ますますむくれた表情になった。  
すると、サトルがすぐにフォロワーを始めた。

「確かに、美鈴の意見も、もっともだよねえ。うちの学校でも、  
四年前にジェンダーフリー政策を導入した時には、一部の男子生徒  
が反対したんだって。だけど、うちの女校長は強硬な人でね。セー  
ラー服を着て来ない男子生徒を、学校に入れずに欠席扱いにしたん  
だってさ」

「そんなに制服の規制が厳しいんなら、赤いセーラー服の連中は、  
なぜ校内に入れるの？」

その美鈴の疑問に対しては、里沙が答えた。

「それはね、生徒の自主性を尊重する、ってことで、セーラー服なら、何色でも構わないのよ。この女校長に言わせると、それが、秩序と多様性の両立、なんだってさ」

美鈴は、首を左右に振りながら、小声でつぶやいた。

「東京ってのは、分からない街だね」

サトルが、さらに美鈴のほうへと上体を近づけてきた。

「だけど、東京は楽しい街だよ。素晴らしい出会いもあるよ。今日の、君とボクの出会いのように……」

サトルが、甘い声でささやいた。

それに対し、里沙が声を荒げた。

「私達、いろいろと忙しいの。あなた邪魔だから、どっか行ってよ」

「ひど〜い。そんな言い方しなくても良いじゃん」

サトルが、わざと悲しそうに顔をした。

「そうだよ。そこまで言うこと、ないだろ」

美鈴も思わず、里沙を非難した。

すると、むくれた里沙は押し黙り、明後日の方向を向いて、牛乳を飲み始めた。

サトルが、優しい声で話し始めた。

「でね、なにも心配はないからね。ボクはどこにも障害はないし、親戚の中にも、障害者もガン患者もいない。ボクの成績はね、とても優秀なんだよ」

そう言いながら、サトルは鞆から通知表を取り出し、開いて見せた。

二年の三学期の成績だった。

「ほら、成績は全部四か五。平均で四・二。特にスゴイのは、ほら、数学が五なんだよ」

美鈴は顔を少ししかめ、冷ややかに尋ねた。

「で、アンタの成績が、どうしたっての？」

「だって、優秀な遺伝子の方が良いじゃん」

美鈴が、鼻で笑った。

「まるで、アタシとアンタとが結婚でもするかのような口調ね」  
「結婚はしなくていいよ。それに、子供の養育権は全部君が持つていいよ」

「なにそれ？」

「その代わり、お金は半々ね」

「はっ？ 何言ってるの？」

話が噛み合っていないのを見かねた里沙が、口を挟んできた。

「少子化対策費よ」

「それが、どうしたって言うの？」

すかさず、サトルが言葉を続けた。

「半々だから、二五〇万円ずつだよ」

「二五〇万円！」

思わず美鈴が、驚きの声を上げた。

「ひよっとして、埼玉は東京と違うのかな？ じゃあ、念のために説明しておくけど、君も知ってるの通り、子供を一人産むごとに、中央政府から、育児奨励金の一〇〇万円が出る。で、東京都から、他に四〇〇万円が出る」

「四〇〇万円！」

美鈴が、また驚愕の声を上げた。だがサトルはそれを無視し、説明を続けた。

「妊娠四ヶ月目に、おめでたお祝い金が一〇〇万円、妊娠七ヶ月目に、出産準備金が一〇〇万円、出産直後に、出産お祝い金一〇〇万円、で、出産六ヶ月目に、育児奨励金一〇〇万円が出る。」

「東京って、スゴイところだね。子供を一人産むだけで、そんなにお金をもらえるなんて……」

「えっ？ 君だって、そのために東京に来たんでしょ？」

サトルのその言葉に美鈴は口ごもり、彼の問いには答えなかった。  
「でね、念のために説明しとくけど、東京ではね、十八歳以上の

未婚の女性はね、妊娠四ヶ月目以降になると、生活保護を申請すると、すぐに通るから。それから、都営住宅も、優先的に入居できるよ。そうした手続きに関しては、ボクが代わりにやっつてあげてもいいよ。手数料は、生活保護は支給額の二割を毎月だよ。都営住宅は、入居できたら、その時点で五〇万円ね」

「アタシは……、まだ十七歳だよ……」

「でも、今から準備しておかないとね。三年生の一年間は、あつという間だから。卒業しちゃったら、無料の給食はもう食べられないよ。今のうちから、計画的に……」

そこで、再び里沙が口を挟んだ。

「もういいでしょ。売春夫はあっちへ行きなさい。美鈴も、こんな性悪男に構わないほうが良いわよ」

「売春夫だなんて……、酷いよ。そんな言い方……」

その時、サトルの隣の席に、大柄な女が腰を下ろした。身長は一八〇センチ近くあり、体重は、一〇〇キロに達していそうな筋肉質の大女だ。

「お前が岸川悟か？」

サトルが、その大女に視線を向けた。

「そうだよ。学年で人気ナンバーワンのね」

「確かに、美少年だな」

大女の顔が、ニヤけた。

「アタシのこと、知ってるかい？」

「まっながたかこ松永隆子でしょ。元柔道部の」

「そう。都立校生最強の女」

サトルは無表情のまま、伸ばしてきた隆子の手を払った。

「ボクは、高いよ」

ニヤついていた隆子の表情が、わずかに険しくなった。

「いくらだよ？」

「一回一〇万円。妊娠してもしなくても」

「じゅ、一〇万円……」

隆子の表情が、怒りでみるみる険しくなった。

「ふざけんな！ 犯すぞ、こら！」

怒鳴ると同時に、隆子がサトルを押し倒した。

思わず、美鈴が立ち上がった。止めに入ろうと、反射的に思ったのだ。

だが隆子は、上体をゆつくりと起こし始めた。それに伴い、サトルもゆつくりと上体を起こした。サトルの右手には、小型拳銃が握られていた。その銃口は、隆子ののど元に突きつけられていた。

「よせよ。犯すなんて、冗談だよ」

「この拳銃は、冗談でもないし、オモチャでもないよ。ちつちやいし、プラスチック製だけど、二十二口径の弾丸が五発装填できるオートマチック。最近、テレビCMでやっている国産の最新型だよ」

「きちんと金は払うよ。妊娠したらな」

「先払いだよ」

「今は、金はない」

「へえ〜。君は、さんざん企業から栄養費をもらってたんじゃないの？」

隆子の表情が、わずかに歪ゆがんだ。

「栄養費は、ほんとに栄養費として、もう全部使っちゃまった」

里沙が、突然口を挟んだ。

「哀れねえ。怪我けがで再起不能になった運動部の元エースは」

「なんだ、お前は！」

隆子は、怒気を含んだ目で、里沙をにらみつけた。

「だけど、都大会三位の実績があるあなたなら、実業団は無理になっても、体育大学へ推薦入学できるんじゃないの？ なにも、未婚の母になって、生活保護で暮らすことないじゃない」

隆子の表情が、さらに歪んだ。

「推薦入学の話は、確かに来てるけどよ……、奨学金の話は、まだ一校も来てない」

里沙が、平然と言った。

「じゃあ、自分で払えば？ 選手としては再起不能でお金を稼げなくても、体育教師に成れば、入学金と授業料を四年間払っても、すぐに元は取れるわよ」

隆子の表情が、さらに大きく歪んだ。悲しげな表情だった。

「うちは母子家庭なんだ。母一人子一人の。うちには、そんな大金ない……」

隆子がうつむきながら口を閉ざすと、暫しの沈黙が流れた。

ボソリと、美鈴が言った。

「アタシも、母子家庭だったよ。母一人子一人の」

里沙が美鈴に目を向け、尋ねた。

「だった？ 過去形なんだ。で、現在は？」

「今は、天涯孤独てんがいこどくの無宿人むしゅくにんさ」

また、しばらくの沈黙が流れたあと、隆子が口を開いた。

「ムシユクニンって……、なに？」

里沙が即答した。

「要するに、ホームレスってことよ」

美鈴が顔をしかめた。

「やめるよ、そんな言い方。ホームレスなんて、まるでアタシが、生きる気力を失ったダメ人間みたいじゃない」

その時だった。一人の女の怒声が聞こえたのは。

「誰だ！ アタシのかわいい妹を殺やった奴は？」

その瞬間、数百人の生徒がこつた返す食堂ホールは、凍りついたように静まりかえった。

立ったままの美鈴は、怒声がしたホールの入り口付近に目を向けた。

赤いセーラー服の一人がいた。人数は、七人。先頭に立つ少女は、背が高く、体格も良かった。

里沙が小声で、美鈴にささやいた。

「あの大女が、李三姉妹ししの次姉りた、李大栄たいえいよ。噂ししじゃ、かなりの拳銃使用らしいわ」

短い髪を金色に染めた赤セーラー少女が、背の高い美鈴に気がつき、指差した。

「大姐タアチエ、あの女です！」

今朝の、生き残りだ。

「てめえらか！」

そう怒鳴ると、李大栄は、美鈴達のテーブルに向かって走り出した。他の赤セーラー達も、慌てて彼女の後を追いかけるように走り出した。

サトルが慌てて、拳銃をスカートの下にしまった。椅子に腰を下ろしたまま、椅子を持ち上げて隣のテーブルに移動しようとしたが、半メートル横へ移動しただけで、李大栄とその部下達に、テーブルごと包囲されてしまった。

「アタシの妹を殺したのは、てめえらか！」

李大栄が、大声で吠えるように怒鳴った。

「ボクは関係ありません」

すぐさまサトルが、今にも消え入りそうな小声で、答えた。

「アタシも関係ないぜ」

冷静さを装いつつも、隆子のその言葉には、緊張と恐怖の色が滲にじんでいた。

「黙れ！ てめえら四人全員、皆殺しだ！」

再び、李大栄が吠えた。

「まだ生きてるよ。アンタの妹」

美鈴が、静かに言った。少しばかりあごを引き、李大栄を正面から見据えながら。

金髪の赤セーラーが、美鈴を指差した。

「この女です。こいつが突然現れて……」

だが、李大栄がその言葉を途中で遮った。

「生きてるのか？」

「ああ。重傷だけど、まだ生きてるよ」

「どこにいる？」

里沙が、口を挟んだ。

「秘密の場所よ」

ジロリと、李大栄は里沙を見た。  
金髪赤セーラーが、口を開いた。

「この眼鏡女が、風紀委員です」

「アタシの妹を返せ」

唸るように、言葉を絞り出した。

「条件が合えばね」

平然と、美鈴が答えた。

「条件？　なら、さつさと条件を言え！」

冷やかに、里沙が答えた。

「交渉は、李秀英としかしないわ。あとで、このケータイに連絡しなさい」

里沙が、左腰のウエストポーチから、ピンク色の携帯電話を取り出した。

それを見た途端、李大栄の顔色が変わった。

「このケータイの電話番号、知ってるでしょ？」

「妹のだ」

里沙が、素っ気なく答えた。

「ええ。でも今は、私が預かってるの」

李大栄が、低く唸った。まるで獣のように。

「もし妹が死んだら、てめえら四人とも皆殺しだ」

凄みを利かせて、李大栄が、脅し文句を吐き出した。

フンツと、美鈴が鼻で笑った。

「生きていても、アタシ達を殺すつもりなんだろ」

ジロリと、李大栄は美鈴をにらんだ。

「てめえが、風紀委員の助太刀すけだちの拳銃使いか。だいぶ、腕が立つらしいじゃねえか」

「まあね。アンタよりは上だろうね」

李大栄は、ギシギシと音が聞こえるほど歯ぎしりしてから、言葉

を吐き出した。

「てめえ、この場で死にてえのか？」

フツと、美鈴が笑った。口元だけで。だがその目は、冷静に相手を見据えていた。

「死ぬのは、アンタのほうだよ」

「このアマ……」

その時、鋭い女の声が飛んだ。

「李大栄！」

赤セーラーの少女達が、背後を振り返った。

「タ、タアーチエ！」

赤セーラーの一人が、李大栄にすぐるように呼びかけた。

彼女達七人は、ガンベルトを腰に巻いた高校生達に、包囲されていた。彼らの人数は、二〇名はくだらない。

彼らの中央にいる少女が、再び口を開いた。

「李大栄！ あなた達、食堂ホールでいったい何をしてるの？」

日本食は、口に合わなかったんじゃないの？」

その少女は、背の高い美少女だった。ウェーブのかかった長い亜麻色の髪が、彼女の艶やかな美しさを、さらに引き立てていた。

「上村、百合花……」

サトルが、小さな声でつぶやいた。

里沙が、美鈴に小声で教えた。

「あの女が、この学校の生徒会長。で、周りにいるのが、学級委員よ」

ゆっくりと振り返った李大栄は、二〇名を超える少年少女達をにらみつけた。

学級委員達の多くは、緊張と恐怖で、表情を強張らせていた。脂汗を流している者や、ガタガタと震えている者もいた。だが、腰のホルスターの留め金は、全員、外していた。その上、全員が、いつでも拳銃を抜けるように、銃把の五センチほど上の位置で、指を開いた手を静止させていた。

赤セーラーの少女達も、全員、恐怖で表情を強張らせていた。それも当然だ。この近距離で銃撃戦になれば、誰も無傷ではすまない。

百合花は、両腕の手首を腰より少し上の両脇腹に当てたまま、鋭い目つきで真つ直ぐに、李大栄をにらみつけた。

「あなた達不良生徒は、食堂ホールには立ち入り禁止よ。去年、あれほど酷い乱射事件を、ここで引き起こしたんだからね」

「あれは正当防衛さ。風紀委員のほうか、先に拳銃を抜いたんだぜ。証人の証言を聞かなかったのかい？」

「どうせ、銃で脅したり、金で買収した証人でしょ」

「買収は、アンタの得意技だろ」

ククツと、李大栄が笑った。

一瞬、百合花の表情が、変わった。怒りの琴線に触れたのだ。だが、すぐに気を取り直し、冷静さを装いながら口を開いた。

「この食事は、口に合わないんでしょ。だったら、さっさと帰りなさいよ」

「ああ、小日本のメシは、まずくて食べねえ」

李大栄は、視線を美鈴に戻し、にらみつけた。

「てめえ、今回のところは、命拾いしたな。だが、絶対に、殺してやる。それも、近いうちにな」

そう捨てゼリフを残すと、李大栄は部下を引き連れ、去っていった。

李大栄のグループが食堂ホールを出て行き、姿が見えなくなつてから数十秒ほどして、ようやく、ホールは先ほどの喧噪を取り戻した。学級委員達の表情にも、安堵の色が浮かんだ。

百合花が、里沙をにらみつけた。

「あなたが、秘密捜査中の風紀委員ね」

「そうよ。もう正体がばれちゃったから、秘密捜査はできないけどね」

里沙は生徒手帳を取り出すと、片手でサツと開き、銀色の桜のバ

ツジを見せた。

百合花は、まるで汚いものでも見るかのような視線を、そのバツジに向けた。

「ここは、私達の学校よ。よそから来た風紀委員に拳銃を振り回されたら、いい迷惑だわ」

里沙は、ニヤリと意地悪く微笑んだ。

「あーら、そう言えば、あなたもこの学校に転校してきた、よそ者だったんじゃないかしら」

一瞬、百合花が気色きしよくばんだ。

「わ、私は、一年生の時に転校して来たんだから、よそ者とは、言わないわよ……」

里沙が、さらに追い打ちをかけた。

「前の高校は、どちらでしたっけ？ 確か、都立の中では最底辺高校で有名な……」

「あなたには関係ないでしょ！」

半ばヒステリックに百合花が叫び、里沙の言葉を途中で遮った。

里沙はさらに口を開こうとしたが、それよりも早く、百合花は大きな声で、学級委員達に呼びかけた。

「さあ！ 校内の見回りをするわよ！」

百合花は、大勢の学級委員達を引き連れ、去っていった。

満面の笑みを浮かべたサトルが、里沙に声をかけた。

「君、なかなかやるじゃん。あの高慢ちき女に、ガツンとやるなんてさ」

美鈴が、不思議そうに尋ねた。

「あの女、いったい何を焦ってたの？ 転校が、何か問題でもあるの？」

サトルが、楽しそうに解説を始めた。

「あの女、頭がかなり悪いんだよ。一般受験だと、この学校には入学できない。最近の公立高校は皆落ちぶれているけど、それでもうちは元名門校だからね。だけど、あの女は、どうしてもうちに入

りたかった。なぜなら、うちには、一流私大の推薦枠がいくつもあるからね。とりわけ、あの女が目指している三田塾大学の推薦枠がある高校は、うちを含めて、ほんの数校しかない。そこであるの女は、制度の抜け道を使って、この生徒になった。都立校は公立学校だから、全ての転入希望者に転入試験を課して、必ず転入の機会を与えなければならぬ。通常の転入試験は、全ての都立校が合同で行う正規の試験だから、あの女がこの学校に受かるのは、不可能。だけど、学期の途中で転入届を出せば、各高校の教師が個別に作成した試験を課すことになる。あの女は、一年生の五月に、都立の最底辺アホバカ高校から、うちへ転入してきたのさ」

美鈴が、不思議そうに尋ねた。

「個別に作成した試験だと、少しは問題が易しくなるの？」

「少しなんてものじゃないわよ」

里沙が口を挟んだ。

サトルが、解説を続けた。

「噂じゃ、あの女、校長に二〇〇〇万円も裏金を渡したんだってさ。それで、事前に試験の答えを全部教えてもらってたんだよ」

「二〇〇〇万円！」

美鈴が、思わず唖った。

「アタシは、一億円使ったって、噂で聞いたよ」

隆子が、口を挟んだ。

「い、一億円……」

美鈴は、絶句した。あまりにも大きな金額に。

サトルはうなずきながら答えた。

「五〇〇〇万円で新規の奨学金を設立したし、図書室の修繕費も、上村財団が出したって話だから、全部で一億円は軽く超えてるだろうね」

「上村財団？ 何それ？」

美鈴の質問に、サトルが不思議そうな顔をした。

「知らないの？ あの女の父親は、有名なIT企業のオーナー社

長だよ。ほら、あのアップパービレッジ・グループ」

「ええっ！？ そんなお嬢が、なんで公立校にいるの？ 金持ちはみんな名門私立じゃないの？」

驚く美鈴に対し、サトルは、諭すように説明をした。

「名門私立の中にも、バカ高校と秀才高校があるわけ。で、名門の秀才私立高校には、どんなに金を積んでも、金の力では入学できない。なぜなら、生徒はみんな金持ちの子女だからね。しかし一流私大に入学するためには、難しい一般入試を突破するか、名門秀才高校に入学して推薦枠をもらうかの、二者択一しかない」

そこで、隆子がまた口を挟んだ。

「あるいは、スポーツ推薦か、一芸推薦をもらうか」

その言葉に、サトルが声を出して笑った。

「あの女には、一芸推薦は無理だよ。あの女、自分は女子高生モデルだつて言つて自慢してるけど、芸能人の多い三田塾大学に一芸推薦で入学するには、歌手の場合は、日本レコード大賞の新人賞以上、女優の場合は、日本アカデミー賞の新人賞以上を取らなきゃならない。売れない三流モデルのあの女には、一〇〇パーセント不可能だ。だから、あの女は、金の力で校長を容易に買収できる、貧乏な都立の名門校、すなわち、ここ、古宿高校に転入してきたってわけさ」

美鈴は、首を左右に振った。

「なるほどね。やっぱ、資本主義社会だから、金さえあれば、何でも思い通りになるんだね」

美鈴の言葉を無視して、サトルは言葉を続けた。

「あの女が生徒会長を務めてるのだから、三田塾大学の推薦枠を入手するためさ。三田塾大学は、内申書の平均が四・三以上ないと推薦をもらえない。あの女は頭が本当に悪いから、どんなに勉強しても、一流の家庭教師を毎日付けても、うちの学校の中間試験や期末試験では、平均点すら取ることができない。だけど、生徒会の役員を務めれば、試験の成績が悪くても、四以上を付けてもらえる。」

生徒会の役員は、勉強に影響が出るくらい、負担が大きいからね」  
サトルの言葉の端々（はしばし）には、百合花に対する憎悪がこもっていた。

美鈴は、冷やかにサトルを見つめ、尋ねた。

「話はよく分かったけどさ。アンタ、あの女に何か恨みでもあるの？ 振られたとか？」

サトルは、美鈴を見つめた。暫しの沈黙の後、答えた。

「恨みがあるのは、あの女じゃない。あの女の父親さ」

美鈴から視線を逸らし、サトルは言葉を続けた。

「ボクの父は、三年前まで、一流企業の正社員だった。だから、七歳年上の兄貴は、私立大学を卒業することができた。だけど三年前、あの女の父親が、ボクの父が働いている会社を、買収した。敵対的買収、ってやつでね。で、あの女の父親は、社員の半分をリストラした。ボクの父は、それで失業した。そのあと、うちは大変だったよ。父は再就職がなかなかできなくてさ。結局、低賃金の非正規社員の仕事しかなくて、ワーキング・プアに転落。専業主婦しかしたことなかった母は、毎日毎日父をなじってさ。それで、毎晩大げんか。結局、リストラされてから一年ほどで、ボクの両親は離婚。最初に父が家を出て行き、その後、母も、仕事を探すって言うて家を出て、それっきり。今連絡が付く家族は、横浜に住んでる兄貴だけ。で、あの女の父親は、買収した会社の社員の首を切りまくって無理矢理黒字をひねり出し、そのあと、会社をバラバラにして転売して、大金を稼いだ。あの女が女子高生モデルになるために使った金も、この学校に転入するために使った金も、元をたどれば、多くの社員とその家族を不幸のどん底に突き落として得た金さ」

サトルが語り終わった後、重苦しい沈黙が流れた。  
しばらくして、美鈴が口を開いた。

「今の世の中、誰もが、なにがしかの不幸を背負ってるものさ」  
ポツリと、里沙がつぶやいた。

「今の世の中、やっぱり、お金なのね。お金があれば勝ち組。な

ければ負け組……」

顔をしかめながら、美鈴がうなずいた。

「まあ、それが、資本主義社会つてものだよ」

サトルが、口を挟んだ。

「二〇世紀の日本は、資本主義社会だったけど、今よりもっと良い時代だったらしいよ。みんなが豊かで、その上、学校で乱射事件が起きることもない」

「だけど今は、二十一世紀よ」

里沙が、冷たく言い放った。

うなずきながら、美鈴が呼びかけた。

「そうだよ。だからアタシ達は、金を稼がなくちゃ、生きられない。で、アンタ達、今夜、一〇〇〇万円稼いでみる気、ない？」

「美鈴！ こんな連中じゃ役不足よ」

里沙が、美鈴に抗議した。

「一〇〇〇万円！ アタシは引き受けた！ で、どんな仕事だい？」

隆子が、表情を輝かせた。

それに対してサトルは、不安気な顔を見せた。

「なんか、やばそうな話だね。銃撃戦になりそうなら、遠慮しとくよ。一〇〇〇万円は大金だけど、貧乏な女子高生を四人口説き落として妊娠させれば、その金額になる」

美鈴は、サトルに目を向けた。

「安全な仕事もあるよ。見張りをするだけで、一〇〇万円」

サトルは、あごに左手を当てて微かに唸ってから、口を開いた。

「すぐに手に入るんなら……、悪くない額だね。ちよつど貯金の残高も心細くなってきたところだから……」

サトルの言葉を途中で遮り、隆子が目を輝かせながら尋ねた。

「で、どんな仕事だい？ 早く話せよ」

話しかけた美鈴の袖を引いて、里沙が制止した。

「ここは人目が多いわ。具体的な話は、場所を変えましょ」

「どこか、良い場所はある？」

「あるわ。絶対に音が外に漏れない部屋が」

「それって、どこ？」

「音楽室よ」

そう言いながら、里沙が立ち上がった。続いて、隆子とサトルも、立ち上がった。

美鈴とその仲間達は、食堂ホールを出た。

#### 第四章・終

## 第五章 「音楽室で作戦会議!？」

第五章 「音楽室で作戦会議!？」

音楽室は、東校舎の二階にある。美鈴は里沙に頼み、先に、古宿高校の校内を案内してもらった。三〇分ほどして、音楽室の前まで来た時に、里沙のウエストポーチの中から、携帯電話が鳴る音が聞こえた。

里沙が取り出した電話は、ピンク色のものだった。

その場にいた四人に、緊張が走った。

里沙が、電話に出た。美鈴はすぐさま、里沙に頬を寄せ、聞き耳を立てた。

「アタシのかわいい妹は、どこにいるの？」

その女の声は低く、微かにかすれていた。

里沙が尋ねた。

「李秀英ね」

「アンタの名前は？」

「里沙よ」

「それで、アタシの妹は、どこにいるの？」

「秘密の場所よ」

「解放の条件は？」

「身代金を払うんなら、返してあげてもいいわよ」と、数秒間の沈黙が生じた。

「風紀委員が、金を要求するわけ？」

里沙が、平然と答えた。

「ええ。それが何か？」

再び、数秒間の沈黙が流れた。

「いくら？」

美鈴が声を出さずに口を動かして、里沙の顔の前で、自分の右手を

開き、指を全部伸ばした。

「五〇〇〇万円よ」

里沙が答えた。

みたび、数秒間の沈黙が流れた。

「随分と大きな額ね」

「かわいい妹なんですよ」

「大金をつくるには、時間がかかる。五〇〇万円なら、明日払えるよ」

美鈴が、大きく首を振って見せた。それを見た里沙は、美鈴に対して素速く頷きながら、李秀英に答えた。

「ダメよ。五〇〇〇万円よ」

「五〇〇〇万円用意するには、時間がかかるよ。分割払いなら…」

美鈴が、慌てて大きく首を振った。

里沙は美鈴にうなずきながら、冷たく言い放った。

「二日待つてあげる。今日と明日の二日間。その間に、お金をかき集めなさい」

また、沈黙が生じた。今度は、十数秒も続いた。

しびれを切らした里沙が、問いかけた。

「もしもし？ 聞こえてる？」

「聞こえてるよ」

「また明日、お金をかき集めてから、電話しなさい」  
リベンゲイブス  
「日本鬼子！」

そう吐き捨て、李秀英のほうから電話を切った。

日本鬼子とは、英語のジャップにあたる差別用語だ。

里沙がピンク色の携帯電話をしまつと、隆子が口を開いた。

「今夜じゃないのか？」

「今夜だよ」

美鈴が代わりに答えた。

「詳しい話は、中ではましょ」

里沙がそう言い、カードキーで音楽室のドアを開けた。

四人は中に入ると、室内の電気を点け、窓のカーテンを全て閉めた。椅子に座ってから、美鈴と里沙が、今夜の計画のあらましについて、隆子とサトルに説明した。

「で、ボクはどこで見張るの？」

サトルの質問に、美鈴が答えた。

「南校舎の玄関が見える位置がいい。さっき見たところでは、高校の正門の近くに、ちょうど、道路を挟んだ斜め向かい側に、五階建てのペンシルビルが建ってた。あのビルの屋上からなら、うまく監視できるんじゃないかな？」

美鈴は、同意を求めるように、里沙を見た。

里沙は軽くうなずきつつ、隆子やサトルに対して尋ねた。

「あの雑居ビル、お店はどんなの入ってるの？」

「飲み屋ばかりだよ」

隆子が、答えた。

「他に、中華料理店も。地下にね」

サトルが、さらに補足を続けた。

「あと、ボーイズバーね。その店は去年潰れたけど。ボクも、一年生の時に、バイトしてた。屋上に出るドアは、鍵がかかってないから、誰でも屋上に行けるよ。だけど、よく、喫煙者の従業員が、タバコ休憩してる」

「他の人に見られたら、タバコを吸ってる振りをすればいい」

美鈴が、即答した。

「それで……、あなたは、拳銃を使えるの？」

里沙が、隆子に尋ねた。

「ああ」

隆子の答え方は、自信がありそうには、見えなかった。

「じゃあ、あなたの拳銃を、見せてちょうだい」

里沙のその要求に、一瞬口ごもってから、隆子が答えた。

「持ってない。貸してくれよ」

「持つてないですって？」

里沙は眉先を釣り上げ、普段より一オクターブも高い声を出した。

「美鈴！ やっぱこの女、使えないわ」

だが美鈴は、平然と里沙に答えた。

「アタシのを貸すよ」

「あなたのを？」

「ああ。ちょうどいいのがある」

そう答えつつ、美鈴は、背中に背負っていたスポーツバックを床に下ろした。ジッパーを開き、中から、紺色のスポーツタオルの包みを取り出し、机に置いた。

ゆっくりと、そのタオルの包みを開いた。

大型回転式拳銃が、現れた。銃身も、かなりの長さだ。素材は金属製で重量感があり、表面は黒光りしていた。

その拳銃を見た瞬間、里沙は、思わず息を飲んだ。

「凄そうな拳銃だな」

隆子が、感嘆の声を漏らした。

得意げに、美鈴が答えた。

「これが、世界最強の拳銃だよ」

「世界最強？」

隆子が、目を丸くして聞き返した。

「フョーティーフョー四四マグナム。スミス・アンド・ウエッソンのね」

美鈴の口ぶりは、いささか自慢げだった。

「本物は、初めて見たわ。だけど、最強だったのは、だいぶ昔の話でしょ。今はもっと威力のある拳銃があるからね」

その里沙の口調には、わずかではあったが、トゲが含まれていた。

「そう？」

途端に、美鈴の顔には、不満の色が現れた。

だが里沙は、それに構わず言葉を続けた。

「そんな大きな拳銃、反動が強すぎて、女じゃ撃てないでしょ」  
「すぐさま美鈴が、反論した。」

「撃てるさ。アタシも、試し撃ちしたよ。一発だけど」

「何で一発だけなの？」

「弾たまがないから」

「買えばいいじゃない」

「買ってても、四四マグナム弾だんなんて、使う機会がないから」

「じゃあ、何でこの拳銃を買ったの？」

「買ったんじゃないよ。戦利品だよ」

そこで、隆子が口を挟んだ。

「戦利品って……？」

里沙が、冷ややかに答えた。

「決闘で殺した相手から奪ったってことでしょ」

「決闘じゃないよ。相手は何人もいたからね」

そこで、会話が途切れた。美鈴は、四四マグナムの銃身を持ち、

銃把を隆子に向けて渡した。拳銃を受け取った隆子が、口を開いた。

「重いな」

「だけど、アンタなら撃てるよ。きちんと両手で構えればね」

「試し撃ちは、できるか？」

その隆子の問いに、美鈴は首を振った。

「それは無理。弾があと五発しかないから」

美鈴は、四四マグナム弾が五発入ったビニールパックを渡した。

里沙が、隆子に尋ねた。

「ところで、あなたは、射撃練習はどのくらいしたことあるの？」

隆子は、里沙から視線を逸らし、消え入りそうな小声で答えた。

「二回……」

「たった二回！ 美鈴、やっぱりこの女じゃ……」

その里沙の言葉を、美鈴が途中で遮った。

「待ち伏せ役なら、十分できるよ」

「待ち伏せ役って？」

隆子のその質問に対し、美鈴が説明をした。非常口の外で、李秀英の逃走を阻止する役が一名必要なことを。

「というわけで、待ち伏せ役は、相手に銃弾を命中させることができなくても、別に構わない。逃走を阻止できれば、それでいい。非常口のドアが開いたら、すぐに撃て。普通の女なら、四四マグナム弾が自分の近くに飛んできただけで、その轟音と衝撃波にビビッて足がすくむよ」

「で、アタシはどこで待ち伏せするの？」

「食堂ホールの建物の陰に隠れて、待機してよ。あそこなら、四階の非常口がよく見えるでしょ」

里沙が、口を開いた。

「私達が校舎内で李秀英を仕留めれば、待ち伏せ役は、一発も撃たなくてすむわけよね。それなのに、私達と同じ取り分なんて、納得いかないわ。それに、隆子は素人なわけだし」

その抗議に、隆子は無言で美鈴を見た。

美鈴は、隆子の顔と里沙の顔を交互に見比べてから、口を開いた。

「それじゃあ、隆子の取り分は、三割カットで七〇〇万円だ。それで良いだろ」

隆子が、充分満足そうな顔で、答えた。

「それでいいぜ。それだけあれば、体育大学の入学金と四年分の学費を払っても、お釣りが出る」

里沙は、まだ不服そうな顔だったが、渋々承知した。

「さて、と。あとは、もう一人の拳銃使いを、どうやって見つめるかだね」

その美鈴の言葉に、里沙も同意の意を示した。

「そうよね。考えてみたら、美鈴のリボルバー、六発しか弾が入らないでしょ。二丁でも十二発。だけど、相手は、四階の廊下から階段にかけて一〇名。さらに、教室の中には、一〇名以上もいるかも知れない」

「拳銃に関しては、今夜の作戦では、別のを使おうと思ってる」

そう言いながら、美鈴はスポーツバックの中から、別のタオルの包みを二つ取り出した。

その包みを解くと、銃身の長い銀色のリボルバーが現れた。

「その拳銃も大きいな」

隆子のその言葉に、美鈴が答えた。

「拳銃自体は大きいけど、弾は二十二口径だよ。その代わり、装弾数は多くて、一〇連発だけだね」

「ああ、射撃場でよく使う競技用タイプのものね」

里沙の言葉に、美鈴は頷いた。

「そう。威力はないけど、銃身が長い分、命中精度は高い。装弾数も多いから、多人数を相手にする時には、これは使える。腕のいい拳銃使いならね」

里沙が、少し不思議そうな顔をして、尋ねた。

「なぜあなたは、リボルバーばかり使うの？ オートマチックなら、もっと装弾数が多いのもあるでしょ」

「オートマチックは、故障しやすいからね。リボルバーなら頑丈で故障しにくいし、弾詰まりもない。それに、不発弾があつた場合も、次の弾をすぐに撃てる」

「なるほどね。じゃあ、金属製の拳銃ばかり使うのも、頑丈さが理由なわけね」

「そうだよ。プラスチック製は、軽くて抜きやすいっていうけど、ちよつとした衝撃で、すぐに壊れちゃう。特に、国産のものはね。それに、プラスチック製国産軽量拳銃は、軽い分、発射時の反動が大きく、銃口がぶれやすい。近距離なら問題ないけど、三〇メートルも離れると、標的に当たりにくい」

話しながら、美鈴は、さらにスポーツバックの中から、腰に巻くタイプのガンベルトを取り出した。そのガンベルトには、両脇に、底部のないホルスターが、一つずつ付いていた。そのガンベルトを腰に巻き、二丁の一〇連発リボルバーをホルスターに入れた。銃身の大部分が、ホルスターの底部から、露出した。その上、ホルスターの上部からは、銃把だけではなく、引き金の辺りまで、露出していた。

「銃身が長すぎるから、早撃ちには向きそうもないわね」

その里沙の言葉に、美鈴は軽くうなずきながら答えた。

「撃つ時は、あらかじめ抜いておくんだよ。決闘じゃないんだからね」

「その二丁拳銃があれば、他の拳銃使いは、もういらないわね」

その里沙の言葉に、美鈴がすぐさま反論した。

「だから、アタシ達の背後を固める役に、もう一名いるんだって。それに、アタシとアンタの二人だけで二〇名以上を相手にするのは、やっぱりかなり骨が折れる。アンタにもがんばってもらおうよ」

「分かってるわ。わたしのオートマチックは、装弾数が十五発もあるのよ」

美鈴は、隆子とサトルに視線を向け、尋ねた。

「で、アンタらの知り合いで、度胸があつて、そこそこの腕前の拳銃使いつて、いない？」

隆子が、すこし首をかしげながら答えた。

「射撃場によく行く奴なら、同じクラスにも何人かいるけど……、度胸の据わってる奴となると……、心当たりはないな」

「サトルは？」

「いないね。第一、射撃場での練習と、実戦とでは、かなり違うでしょ？」

「そう。だから、度胸がないと、実戦では練習通りに戦えない」

「いないようね。だったら、私が美鈴の背後を固めるわ」

里沙のその言葉に、思わず美鈴は、彼女の顔をマジマジと見つめた。

「おいおい、アタシをなんだと思ってる？ アンタはアタシと肩を並べて戦うんだよ」

里沙は少しばかり肩をすくめ、小さな声で答えた。

「分かってるわよ。試しに言ってみただけよ」

美鈴は、一呼吸置いてから、全員の顔を見回した。

「じゃあ、みんなに心当たりがないんなら、私に提案がある。も

う一人の仲間は、上村百合花なんてどう？」

三人は、一斉に驚いた顔をした。

「あの女!？」

里沙が、目を丸くしながら、叫んだ。

「あの女は、度胸がある。さっきの食堂ホールでは、李大栄と対峙して、微塵みじんもビビルことがなかったからね」

「だけど、あの女は大金持ちのお嬢様だよ。カネでは動かないでしょ」

否定的な口調のサトルに対し、美鈴が尋ねた。

「百合花と一緒にやるのは、イヤかい？」

「君がリーダーだから、文句を言うつもりはないけどさ。だけど、どうやって抱き込むの？」

「カネで動かないんなら、カネ以外のものを提示すればいい」

「例えば？」

「例えば……、正義とか」

サトルが、思わず苦笑した。

「正義なんて、あの女には興味ないでしょ」

「じゃあ、何のためにあの女は、生徒会長として、この高校の生徒達を守ってるの？」

「だから、あの女が生徒会長をしているのは、三田塾大学に推薦入学するためだって」

「そのためなら、さっきのように、スクール・ギャングと撃ち合っても辞さないわけ？」

「そうだよ、たぶん。三田塾大学に入学するためなら、命だっけかけるんじゃないの。あの女は、有名芸能人が多くてセレブ・イメージのある三田塾大学の学生になれば、自分も有名芸能人になれると思っ込んでいるからね。まあ、あの女の母親も、売れない二流のアイドル歌手だったんだから、どこの大学に入ろうと、たぶん売れないと思うけど……」

サトルの言葉が皆まで終わらぬうちに、美鈴が口を開いた。

「それなら、それを使えばいいじゃん」

「えっ？ 具体的に話してよ」

里沙が、美鈴を促した。

「百合花は、三田塾大学に推薦入学したいんですよ。その推薦枠の人数は？」

「もちろん、一名だけだよ」

サトルが即答した。

「じゃあ、彼女のライバルは？」

「ライバル？ 成績的には、ライバルになる生徒は何十人もいる。けどあの女なら、ライバルには金を握らせて、三田塾大学の推薦枠への応募を、辞退させるだろうね」

「それを拒否する生徒は？」

「いないでしょ。三田塾大学以外の一流大学の推薦枠が他にもあるし、三田塾大学にこだわるのは、あの女だけでしょ。それに、アップラー・ビレッジ・グループのご令嬢に、あえて喧嘩を売って、得することなんて、何もないだろうからね」

「李秀英は？」

「ええっ？」

三人全員が、驚きの声を上げた。

「さつき里沙から聞いたんだけど、李秀英は、妹達とは異なり、通名の日本名で高校に入学したため、彼女の正体は全くの不明。ということは、李秀英が、実は良い成績をおさめていて、一流大学への推薦入学を狙っている可能性もある」

間髪を入れず、里沙が尋ねた。

「大学へ入る理由は？」

「大学生に、麻薬を売るためさ。セレブの多い三田塾大学なら、他の大学より儲かるだろうからね」

「なるほど。筋は通ってるわね」

納得した里沙が、うなずいた。

「李秀英は、三田塾大学へ推薦入学して、セレブ学生相手に、麻

薬を売りまくろうと計画している。だから、その前に逮捕したい。アタシ達に、協力してくれ。そう頼めば、百合花は協力してくれるよ、たぶんね」

美鈴の計画に、里沙が同意した。

「悪くないわ、その話。それでいきましょう。で、誰が彼女に話すの？」

「里沙、アンタだよ。風紀委員なんだから」

里沙は、一瞬嫌な顔をしたが、渋々承知した。

「今、電話する？」

里沙が、美鈴に尋ねた。

「ケータイの電話番号、知ってるの？」

「ええ。風紀委員だから。生徒会長をはじめ、各クラブの部長の電話番号も、学校に提出してある番号なら、全部知ってるわよ」

「じゃあ、今、頼むよ」

美鈴に促された里沙は、ウエスト・ポーチの中から、自分のクリム色の携帯電話を取り出した。

「もしもし、わたし、風紀委員の藤崎里沙だけど、上村百合花さん、今、ちよつと話せるかしら」

美鈴が、里沙に頬を寄せるようにして、聞き耳を立てた。携帯電話から、百合花の声が、漏れてきた。

「何で私のケータイの番号、知ってるの？」

「風紀委員だからよ」

「それで、話って、何？」

百合花の声は、不機嫌そうだった。

「わたし、さっきのこと、謝ろうかと思って。あなたに対して、意地悪なこと言っちゃったかな、って」

数秒間の沈黙のあと、百合花が答えた。

「別に、もういいわよ」

「私、口が悪いから、ついつい酷いこと言っちゃうことがあるの。だけど、本当は悪気はないのよ」

「分かったわよ」

「じゃあ、仲直り、してくれろ？」

また、数秒間、沈黙が流れた。

「そんなに深刻に考えることなんて、ないわよ。私、陰口言われるの慣れてるし、いちいち気にしないことにしてるから……」

突然、里沙が嬉しそうな声を出した。

「ホント？ 百合花って、いい人ね。あつ、百合花って呼んでいい？ 私のことも、里沙って呼んでね」

「うん。分かったよ」

「じゃあさ、仲直りのしるしに、いい情報教えてあげる。電話じや言えないことだから、今、ちょっとこっちに来れない？」

「どこ？」

「音楽室」

「分かったわ」

「じゃあ、待ってるから、すぐに来てね」

「うん」

二人の会話はそこで終わり、電話が切れた。

サトルが、里沙の顔をマジマジと見つめながら、口を開いた。

「君、演技力あるね。かわいらしい声なんか出しちゃって」

里沙は、さも当然であるかのような顔で、答えた。

「潜入捜査は、日々、演技の連続だからね」

\* \* \*

五、六分ほど経って、百合花が音楽室に現れた。里沙だけでは無いのを見ると、少し驚いた顔をしたが、それについては、何も言わなかった。里沙が中心になって、先ほど美鈴が創った李秀英に関するストーリーを説明し、逮捕への協力を依頼した。李秀英が、三田塾大学での麻薬販売を計画中だと話すと、百合花は、美しいまなじりを釣り上げて、怒り出した。

「許せないわ、その女。何としても、すぐに逮捕しなくちゃね」  
「じゃあ、今夜、協力してくれる？」

美鈴が尋ねると、百合花は即答した。

「いいわよ」

しかしその直後、表情を少し曇らせた。

「だけど……私達……五人だけでやるの？ 李グループって、人数多いんでしょ」

「あと、二〇名くらいよ。だけど、心配ないわ。美鈴は、十人力だから」

里沙が、美鈴の肩に手を置きながら、自信たっぷりに答えた。

「そう……。午前中、南校舎の玄関付近で銃撃戦があつて、その後、三体の死体がそこに転がつてたそうね。私は見てないけど、搬送に来た救急隊員が言つてたわ。三人とも、頭部を見事に撃ち抜かれて即死だ、って」

校内で死者が出た場合、たとえ即死の状態でも、救急隊員を呼んで病院に搬送し、死亡診断書を作成してもらうことになっていた。

「そう。その凄腕の拳銃使いが、この美鈴よ。二丁拳銃の美鈴は、左右同時に、別々の標的に命中させることができるのよ。今日だって、凄かつたんだから」

里沙は、美鈴を褒め続けた。百合花が、恐怖や不安で、今夜の作戦への参加を、躊躇ちゆうちゆうするといけなないと、思ったのだから。

「分かつたわ。私、やるわ。それで、私は何をすればいいの？」

美鈴が、すぐさま答えた。

「百合花には、アタシ達の背後を守ってもらいたい。アタシ達が四階にいる李秀英達を攻撃している時に、おそらく、一階にいる李秀英の部下が、拳銃片手に階段を駆け上がってくるはずだから」

「その数は？」

「おそらく、二名」

「そのくらいなら、私一人で、なんとかなるわね。私、忙しい合間を縫つて、週に三回くらい、射撃場で練習してるのよ」

「頼もしいわ」

感心したような顔を装い、里沙が、そう口にした。少し得意げな表情となった百合花は、美鈴に視線を向けた。

「それで、美鈴は、なんで、風紀委員の助太刀をすることにしたの？」

美鈴は、肩を少しすくめて答えた。

「もちろんカネだよ」

百合花は、隆子やサトルにも目を向けた。

「他の二人も？」

二人の代わりに、美鈴が答えた。

「そうさ」

間髪入れずに、百合花が尋ねた。

「いくらなの？」

里沙が文句を言おうと口を開きかけたが、それを遮り、美鈴が答えた。

「アタシと里沙が一〇〇〇万円ずつ。待ち伏せ役の隆子が七〇〇万円で、見張り役のサトルが一〇〇万円」

「私も仲間なんだから、私にも正当な報酬を出してよ」

その百合花の言葉に、里沙が目を剥いた。

「あなたは金持ちなんだから……」

すぐに美鈴が、里沙を遮った。

「分かった。アタシや里沙と同額の一〇〇〇万円。重要な仲間だからね」

百合花が、嬉しそうな笑みを浮かべた。

「私達、仲間ね」

「ああ、そうさ。仲間だよ」

百合花の言葉に、美鈴が答えた。

満面の笑みを浮かべた百合花は、美鈴に尋ねた。

「それで、準備作業とかは？」

「まず、現場の下見をする。明るいうちにね。あと、いくつか準

備しておくものもある。この学校の近くに、一〇〇円ショップとか、ある？」

「あるよ。ボクが案内しようか」  
サトルが答えた。

「じゃあ、頼むよ」

必要な物のリストを作り、それを手分けして入手することにした。美鈴が、全員に仕事を割り振った。

「じゃあ、まず、全員で下見に行こう。そのあと各自別行動で、五時に、ここに集合ね」

一同は、音楽室をあとにし、南校舎へと向かった。

## 第五章・終

## 第六章「得意科目は爆弾作り!？」

第六章「得意科目は爆弾作り!？」

美鈴、里沙、百合花、隆子、サトルの五人は、南校舎の四階にいた。まだ、三年一組と二組は、授業を行っていた。いや、正確には、三組以降も授業中なのだが、教員は来ておらず、自習となっていた。そのため、生徒は四分の一程度しか教室に残っていなかった。

都立古宿高校では、一組と二組に、成績優秀な生徒を集中させていた。教師達も、一組と二組に対しては、熱心に授業を行い、宿題も大量に出し、受験指導にも熱を入れていた。そのおかげで、一組と二組の生徒を中心に、毎年六〇名から七〇名ほどの生徒が、一般入試で、一流大学に合格していた。だから、いまだに古宿高校は、多くの一流大学の推薦枠を、維持することができていたのだった。

「李秀英は、一組や二組にいるのかしら？」

百合花が、ポツリとつぶやいた。

「推薦をもらう気なら、三組以降でしょ。一組や二組で、四を取るのには至難の業だからね。それに引き替え、三組以降なら、四を取るのには、そんなに難しくもない。中間や期末の試験問題だって、レベルがだいぶ違うらしいからね」

サトルが、百合花には視線を向けずに、答えた。

「そうかしら。私は三組だけど、試験は難しいけど……」

百合花の言葉を無視して、サトルが言葉を続けた。

「三組以降の生徒の四分の一は、普段は学校に来ないけど、中間や期末の試験の時だけ来て、試験を受ける。三組以降は出席を取らないから、試験だけ受けてれば、進級もできるし、卒業もできる」

「アタシもそのパターンだったよ。中学の時にね」

美鈴が、口を挟んだ。

「なんで？」

百合花が尋ねた。

「だって、学校が荒れてたから」

肩をすくめながら、美鈴が答えた。

五人は、一組や二組の授業の邪魔をしないように注意しつつ、入念に下見をした。階段は南校舎の東の端にあり、非常口は西側にあった。非常口のドアを開け、隆子が身を潜める場所を、確認した。

美鈴は、里沙や百合花に指示を出し、拳銃を持たずに、何度も戦闘のシュミレーションをした。二階の渡り廊下から、三階と四階の間にある階段の踊り場付近までを、何度も小走りに往復し、時計で時間を計った。

三〇分以上かけて下見をしたあと解散し、別行動をすることにした。

美鈴は、サトルの案内で、近くにある一〇〇円ショップに行き、隆子は薬局へ、里沙と百合花は、タクシーで防犯グッズの専門店へ向かった。

\* \* \*

午後五時に、五人は、音楽室に集合した。美鈴は、各自が購入してきたものを、机の上に全部並べた。

「これで、何をするの？」

百合花が尋ねた。

「爆弾を作るんだよ」

美鈴が、平然と答えた。

「ば、爆弾？」

隆子が、ギョツとした表情で問い返した。

「そっだよ。敵が多すぎた場合、これらを使う」

美鈴は、一〇〇円ショップで購入したプラスチック製の化粧小瓶に、同じく一〇〇円ショップで買った花火をばらし、その導火線を半分くらいの長さまで入れた。続いて、その小瓶に、花火の火薬を

注いだ。小瓶の口に、アルコールをひたしたちり紙を詰め込んで塞ぎ、さらにその上から、ビニールテープで、がっちりと塞いだ。それを、百合花達を買ってきた催涙スプレアの缶に、ビニールテープで巻き付けた。

じつと見ていた里沙が、口を開いた。

「なるほど、催涙ガス爆弾ね。だけど、これが爆発したら、私達まで涙とくしゃみが止まらなくなるわよ」

「だから、これを買ってきてもらった」

美鈴は、隆子が薬局で購入した、花粉症用のゴーグルと、鼻まですっぽりと覆うタイプの花粉症用マスクを指差した。

「このマスクを、水にひたしておけば、催涙ガスはかなり防げるはずだよ」

薬局で購入したアルコールの瓶の一つを手に取りながら、里沙が尋ねた。

「二瓶も買って、もう一瓶は何に使うの？ 怪我をした時の消毒用？」

「いや、火炎瓶を作ろうかと思って」

「それはまずいわね」

「なんで？」

「火災報知器が鳴ると、この学校の場合、防火シャッターが自動的に閉まるわ。そうになると、私達は脱出できなくなる恐れもあるわ」  
美鈴は、爆弾作りの手を休めた。

「それは、確かにまずいわね。じゃあ、火炎瓶は取りやめにするよ。

他に、何か重要なことは？」

里沙は腕組みをし、しばらく考えてから、口を開いた。

「警備員の巡回時間」

「それは重要だね。時間は分かるの？」

「分かるわ。たった二回だけよ。一回目は、午後七時から、一時間ほどかけて校内を見回って、生徒を全員追い出す。で、二回目は、午後九時半から見回って、今度は残業中の教師も含めて、全ての人

を追い出す」

美鈴が、怪訝けげんそうな顔をした。

「それじゃあ、家のない生徒は、どこで寝るの？」

「家のない生徒って？」

百合花が、不思議そうな顔で、尋ねた。

サトルが、顔をしかめて百合花に合図を送ったものの、彼女はその意味に気づかなかった。

しばらく気まずい沈黙が流れたあとで、隆子が口を開いた。

「クラブの部室に泊まる子がいるよ」

サトルが、思い出したように言葉を添えた。

「そうそう。クラブの部室は、生徒のプライバシーに関わる場所だから、警備員は室内をチェックすることができないんだよね」

「で、その部室はどこにあるの？」

「文化系クラブは、食堂ホールの二階」

サトルが言葉を切った瞬間に、百合花が口を挟んだ。

「生徒会室も、そこにあるのよ」

隆子も、口を挟んだ。

「体育会系クラブは、武道場の地下」

「武道場って？」

「プールの奥のほうに、地上三階建ての建物があるだろ。一階がマシントレーニング場で、二階が柔道場。そして三階が剣道場。マシントレーニング場の奥には、シャワールームもあるよ」

「それは助かるね」

美鈴の表情が、わずかではあるが、ほころんだ。

「じゃあ、七時以降は、どこかの部室で待機することにしよう」  
その美鈴の言葉に、サトルが顔をしかめて口を開いた。

「あゝ。それは無理だよ。ボク達、どこのクラブにも所属してないから。部室の鍵は、部員しか持ってないし」

腕組みをしたままの里沙が、口を開いた。

「保健室の中には、警備員は入らないわ。へたに保健室に足を踏

み入れて、死にかけた生徒の面倒を見る羽目になったら大変だからね」

「じゃあ、七時から一〇時半まで、保健室で待機することにしよう」

その美鈴の言葉を耳にした途端に、全員が表情を曇らせた。

十数秒間の沈黙のあと、隆子が、他の三人の気持ちまで代弁するかのように、答えた。

「それは、きついぜ。あんなところに、三時間半もなんて」

「じゃあ、他に良い場所がある？」

「いったん校外に出て、二回目の見回りが終わってから校内に入るのか」

その隆子の提案に対しては、里沙がすぐさま反論した。

「それはまずいわ。李大栄達が、ちょうどその頃やって来て、南校舎のチエックを開始するのよ」

百合花も、口を開いた。

「それに、午後八時を過ぎたら、学生カードで校門を開けることができなくなるのよ。出るのは可能だけど、入れない。一度私、生徒会室での仕事が遅くなって、八時過ぎに校門を出ただけど、忘れ物に気づいて戻ろうとしたら、入れなかったわ」

「じゃあ、李グループは、どうやって校内に入るの？」

その美鈴の質問に、里沙が答えた。

「仲間が何名か校内にいて、中から開けるのよ。卓球部が、あいつらの巣窟そくくつになってるからね」

「なるほどね」

美鈴がそう答えたあと、しばらく沈黙が流れた。

「私のカードなら、九時すぎても、外から開けられるわよ。だから、警備員の二回目の巡回の前、九時頃に戻ってきて校内に入り、一時間半ほど、保健室で待機するのはどう？」

里沙のその提案に、隆子が渋々うなずいた。続いて、百合花とサトルも、浮かぬ顔をしながらも、同意した。

「じゃあ、これで決まりね」

里沙のその言葉に、美鈴もうなずいた。

「ところで……」

美鈴が、里沙に視線を向けて、尋ねた。

「銃撃戦が起きてから、警備員が現場に駆けつけるまでの時間は、どのくらい分かる？」

「銃撃戦が終わってから、三〇分以上経ってからでしょうね」

その里沙の答えに、隆子が不思議そうな顔で尋ねた。

「なんでそんなに遅いんだ？ 警備員室は、東校舎の四階だろ」

「決まってるでしょ。すぐに駆けつけたら、自分が危ないでしょ。だから、銃撃戦の犯人達が、全員逃走し終わる時間を見計らって、現場に向かうのよ」

里沙の解説に納得しつつも、隆子は、不満そうな顔で、つぶやいた。

「ひどい連中だな」

「仕方ないわよ。しよせん年収三〇〇万円の低賃金で、命かけて言うほうが無理な話よ」

その里沙の言葉に、美鈴と百合花が同時に口を開いた。

「年収三〇〇万円……」

「……なら良い仕事だね」

「……なんてひどい仕事ね」

美鈴と百合花が、顔を見合わせた。

少しばかり慌てた様子で、サトルが美鈴に声をかけた。

「ところで、爆弾作りは、あとのくらいかかりそう？」

「もう少し」

美鈴はそう言うと、今度は、自分のスポーツバックから、五〇〇ミリリットルの空のペットボトルを取り出した。その中には、パチンコ玉が半分ほど入っていた。パチンコ玉の大部分を、いったん外に出してから、花火の火薬とパチンコ玉を、交互に入れ始めた。

「それで、今度は何を作るんだ？」

隆子が、尋ねた。

その作業を目にした里沙は、すぐに気づいた様子で、口を開いた。

「分かった。手榴弾でしょ」

「その通り」

美鈴が、即答した。少しばかり、嬉しそうな口ぶりだ。

「それ、いくつ作るの？」

「パチンコ玉がこれしかないから、今回は、これ一個だけ」

「大宮の三十六人殺しの時も、それを使ったの？」

その里沙の言葉を聞いた瞬間、美鈴の作業の手が止まった。

百合花が、里沙に尋ねた。

「なにそれ？ 大宮って、京都の大宮？」

サトルが、口を挟んだ。

「そう言えば、埼玉県にも大宮って駅があつたね」

作業を再び始めた美鈴は、手を動かしながら、答えた。

「噂には尾ひれがつく。実際には、八人よ」

里沙は、美鈴の様子を見て、それ以上何も質問をしなかった。

ペットボトルに花火の導火線を入れ、火薬をさらに少し詰めてから、アルコールを染み込ませたちり紙で、ペットボトル内の空いた空間を塞いだ。ペットボトルのふたにナイフの刃先で穴を開け、その穴から導火線の先を外に出し、ふたを閉めた。手製手榴弾が、完成した。

「それじゃあ、外に出ましようか」

里沙のその言葉に、百合花が同意した。

「そうね。今日は早めにお夕飯を食べたほうが良いしね」

美鈴を除いて、全員が、椅子から立ち上がった。

しかし、美鈴は立たなかった。

「アタシは、いいよ」

「なんで？」

百合花の質問に、美鈴は素っ気なく答えた。

「アタシは、ちょっと寝たいから」

「お夕飯は？」

「買ってあるから」

そっけなく、美鈴が答えた。

「どんなの？」

屈託なく、百合花が尋ねた。

一瞬、美鈴の顔が曇った。だが、自分のスポーツバックの中から、黙って取り出した。ビニール袋に入った、潰れた食パンを。

その袋から、食パンを一枚だけ取り出した。

「サンドイッチを作るの？」

百合花のその声は、全くと言っていいほど、屈託くつたくがなかった。

慌あわてたサトルが顔をしかめて合図を送ったが、百合花の視界には、サトルは全く入っていないかった。

「まあ、そんなものかもね」

暗い声で答えた美鈴は、一〇〇円シヨップで購入したビタミン剤を何粒か取り出し、それを食パンに挟むと、おもむろに、それをムシヤムシヤと食べ始めた。同じく、スポーツバックの中からペットボトルを取り出し、その中の水を飲み始めた。そのペットボトルは、紅茶の入れ物だった。

あつという間に、一枚の食パンを水で胃袋に流し込んだ美鈴は、口を開いた。

「終わったよ。アタシの夕飯は」

不思議そうな顔をして美鈴のその様子を見ていた百合花が、口を開いて何かを言おうとしたが、その直前に、サトルが百合花の腕を強く引き、それを遮った。

隆子が、美鈴に声をかけた。

「それじゃあ、アタシら九時ぐらいにまた戻ってくるから、それまで、ゆっくり休んでてくれよ」

「それじゃあ、そうさせてもらっよ」

美鈴は、椅子をいくつか並べ、自分のスポーツバックを枕にして、横になった。



## 第七章「十四歳の誕生日は拳銃の日!？」

第七章「十四歳の誕生日は拳銃の日!？」

白いスーツを着たヤクザが、やせ細った女を殴った。畳の上に倒れたその女を、ヤクザは、さらに足蹴にした。そのやせ細った女は、美鈴の母だった。幼い美鈴は、声も出せずに、部屋の隅にうずくまっていた。

「このアマ！ さつさとカネ払え！」

ヤクザが、美鈴の母を踏みつけた。

「堪忍、堪忍して下さい！」

美鈴の母は、骨と皮だけのやせ細った両腕で、ヤクザの足にしがみついた。ヤクザは、彼女の頭を上から殴りつけた。

力が抜けた母の両腕から足を抜き取ったヤクザは、彼女の頭に唾を吐きかけ、ののしった。

「このチョッパリめ！」

チョッパリとは、豚の足という意味の、日本人に対する罵倒の言葉だ。英語のジャップに相当する。

美鈴の母は、畳の上でうずくまり、激しく嗚咽おえつしながら、言葉を絞り出した。

「アタシの体で、利子を払うから……」

「バカヤロー！ てめえのようなババアに、金を払う男が何人いる？」

「美鈴だって、がんばって働いてるし、上客さえつけば……」

「バカヤロー！」

ヤクザは、また彼女の頭を殴った。

「大人になっちまったら、上客なんてつくわけねえだろ！」

美鈴の母は、弱々しい声で、つぶやいた。

「美鈴は、まだ十三歳だよ……」

美鈴は、部屋の隅で両膝を抱えながら、心の中でつぶやいた。

「アタシ、今日、十四歳になったんだよ……」

両膝に顔を埋めながら、考えた。母が、自分の誕生日を覚えていたのは、何歳の時までだったろうかと。確か、一〇歳の時までだった。その日、小学校から帰宅した美鈴に、母は言った。

「もう、アンタも一〇歳なんだから、自分の食い扶持ぶちは、自分で稼かせぎなさい」

そして美鈴は、初めて、客を取らされた。

それ以来、美鈴は、学校に行かなくなった。小学校の卒業式の日も、自宅のボロアパートの一室で、ロリコン中年オヤジの相手をしていた。四年生の時の友達は、卒業式に出ているんだろうな、と思いつながら、友達の顔は、誰一人として思い出すことができなかった。

中学の入学式は、セーラー服を着て、参加した。母が、撮影年月日の入るカメラを押しつけてきた。中学の正門の前で、中学名の看板が入るように、自分で自分の記念撮影をしてくるように、と命じて。もちろんその理由は、中学生であることを証明するためだ。その日以来、中学校には、登校していなかった。

「バカヤロー！」

ヤクザが、美鈴の母を怒鳴りつけた。

「あんなに身長が伸びちまったら、もうガキには見えねえだろ！」

「だけど、美鈴は、まだ顔は子供っぽいし……」

「さつさとカネ払え！」

ヤクザが、また、殴りつけた。

「カネを払えねえんなら、前にも言ったとおり、てめえのガキは連れて行く。そしてバラバラにして、内蔵も心臓も、それに目玉も、全部売り飛ばす」

「堪忍、堪忍、それだけは堪忍して下さい。アタシの内蔵は売り飛ばしていいから、美鈴のだけは堪忍して下さい……」

「バカヤロー！ てめえみたいなシャブ中の内蔵なんて、売れる

わけねえだろ！ 売れるのは、せいぜい目玉くらいだ」

「じゃあ、じゃあ、アタシの目玉一個売るから、それで堪忍して下さい」

ヤクザは、また、彼女を殴りつけた。

「てめえの目玉なんか、何個売っても、借金は返せねえ！ ところが、てめえのガキの内臓は、今が売り時だ。中坊の内臓は、品不足だから、大人よりも高値で売れるからな」

「どうか、どうか、それだけは、堪忍して……」

美鈴の母は、再びヤクザの足にしがみつこうとしたが、ヤクザはそれよりも一瞬早く、彼女を足蹴にした。

「娘の内臓を売りたいくねえんなら、てめえが自殺するしかねえな。てめえが自殺すれば、生命保険が支払われて、それで、てめえの借金は、チャラだ」

美鈴の母は、畳に額を押しつけて嗚咽おえつした。

「どうする？ てめえが自殺するか、てめえのガキをバラバラにして内臓を売り飛ばすか」

ヤクザは、薄気味悪い笑みを浮かべながら、悪魔の選択を、彼女に迫った。

「ア、アタシが自殺したら、美鈴は……」

「ああ。借金はチャラだからな。てめえのガキにとっても、そのほうが良いんじゃないかねえのか」

美鈴の母は、畳に額を押しつけたまま、何も答えなかった。

すると、ヤクザは台所へ行き、包丁を一本手に取り戻ってきた。

その包丁を、彼女の顔のすぐ脇の畳に、ズブリと刺した。

「三〇分待つてやる。オレが三〇分後に戻ってきた時に、まだ自殺していなければ、てめえのガキを連れて行くからな」

そう言つて、ヤクザはボロアパートから出て行った。

美鈴の母は、しばらくの間、そのままうずくまって嗚咽し続けた。十数分後、彼女は、包丁を畳から抜き取った。

「美鈴……」

母が、美鈴を呼んだ。だが美鈴は、動かなかった。母は上体を起こし、畳の上に横座りをした。長い髪を、かき上げた。

「美鈴、母さんのところへ、来なさい」

美鈴は無言のまま母の前へ行き、畳の上に座った。

母は、美鈴の両手を、自分の両手で包み込んだ。

「美鈴、ごめんね……」

母は、ぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「バカな母さんでごめんね。頭の悪い母さんでごめんね。母さんがバカだったから、悪い男に騙されて、シャブ中になっちまって……」

そこで、母は号泣した。美鈴は無表情のまま、無言で、号泣する母を見つめた。

やがて母は、泣きながら、話し始めた。

「アタシがバカなのは、家が貧乏で、塾に行けなかったからだよ。塾に通って勉強をいっぱいして、大学へ行って、さらに勉強をいっぱいして、賢い女になっていれば、アタシの大切な娘を、こんな目に遭わせなくてすんだのにね……。だからアンタは、母さんが死んだら、母さんの角膜を売ってお金を作りなさい。角膜ってのは、目の一部のことだよ。母さんの死体を市立病院に運んで、角膜を売りなさい。そのお金で、アンタは塾へ行きなさい。塾に行って勉強をしっかりして、大学へ行きなさい。そして、アタシよりも賢い女になって、自分の娘を、幸せにしなさい」

しばらく泣いてから、母は美鈴に、すこし下がってなさい、と言った。美鈴が部屋の隅へ行くと、母は美鈴に背を向けた。そして、横座りのまま、自分の頸動脈に、包丁の刃先を当てた。

母は、一気に、包丁を引いた。

鮮血が、ほとばしった。

薄汚れた部屋の壁が、赤く染まった。

母の体は、畳の上に、うつぶせに崩れ落ちた。

美鈴は、部屋の隅で、両膝を抱えた。額を、膝に押しつけた。涙は、一滴も出なかった。

心の片隅で、思った。これで、地獄のような毎日が終わった、と。唯一の肉親である母が死んだにも関わらず、その時は、不思議と、悲しみは感じなかった。

しばらくして、ヤクザが戻ってきた。死んだ美鈴の母を見て、吐き捨てた。

「チョッパリが、手こずらせやがって」

ヤクザは美鈴の髪をつかむと、奥の寝室へ引きずっていき、美鈴を犯した。美鈴は無言のまま、抵抗を一切しなかった。心のどこかで思った。この男に犯されるのも、これが最後なんだ、と。

ヤクザは満足すると、立ち上がって服を着始めた。ヨレヨレの白いスラックスをはき、ベルトを締め、黒い拳銃を、ベルトの前の部分に刺した。薄汚れた白いジャケットを羽織りながら、振り返った。

美鈴はまだ、布団の上で、潰れたカエルのような格好をしていた。「オイ、さつさと服を着ろ。これからは、別の場所で働いてもらう。てめえには、まだまだ働いてもらって、てめえのお袋の残した借金を返してもらわねえとな」

そう言っ、ヤクザは、嫌な音を口から漏らした。その音は、笑い声だった。

美鈴は上体を起こし、ヤクザをにらみつけた。そして、口を開いた。

「借金は、チャラなんでしょ」

ヤクザは目を丸くして、美鈴を見つめた。

「お前、しゃべれるんだ。てつきり、口のきけない奴なんだと思つてたぜ」

ヤクザは、嫌な声で笑った。

「さつさと立って、服を着ろ！」

そう言っ、ヤクザは、裸のままの美鈴の腕をつかみ、引き起こそうとした。だが、美鈴は抵抗した。立ち上がるのを、拒否した。

「このアマ！」

ヤクザが、美鈴の頭を殴った。

美鈴の目に、星が飛んだ。

布団の上に倒れた美鈴が、叫んだ。

「約束が違う！」

ヤクザも怒鳴り返した。

「バカヤロー！ 騙されるほうが悪いんだ！ このチョッパリめ！」

ヤクザが美鈴の左腕をつかみ、強引に引きずり起こそうとした。

美鈴は右手で布団をつかみ、抵抗した。ヤクザが、さらに力をこめた。美鈴は、布団ごと勢いよく引き寄せられた。美鈴の顔面が、ヤクザの腰骨に激突した。ヤクザが、上から、美鈴の頭を殴りつけた。

「さっさと立て、このアマ！」

そう言つてヤクザは、美鈴の左腕を上へ引いた。

その瞬間、美鈴は、勢いよく立ち上がった。立ち上がりながら、右手で、ヤクザの拳銃をつかんだ。

銃口を、ヤクザの腹に、突きつけた。

その瞬間、轟音が轟いた。

ヤクザは、全身の力が抜けたように、畳の上へへたり込んだ。

へたり込んだヤクザの頭は、ちょうど、立ち上がった美鈴の胸の高さにあつた。

ヤクザが、苦悶の表情を浮かべながら、言葉を吐き出した。

「チョッパリ……」

美鈴は、引き金を引いた。ヤクザの言葉が終わる前に。

ヤクザは顔面を撃ち抜かれ、即死した。

そのあと、しばらくの間、美鈴は呆然と立ちつくした。何も、考えられなかった。頭の中が、真っ白になっていた。その時間が、何分なのか、何十分なのかは、分からない。だが、しばらくすると、ようやく、思考能力が戻ってきた。美鈴は、服を着た。セーラー服だ。なぜなら、それ以外の外出着を、持っていなかったから。

美鈴は、母の遺言を実行しようと思った。寢室のふすまを開け、隣にある居間を見た。母の遺体が見えた。美鈴は、母のそばに立った。死んだ母を見下ろした。そのまま、時間が過ぎた。一時間か、あるいは、二時間か。

やがて、美鈴は、母のそばに座り込んだ。涙が、溢れてきた。その涙は、止まらなかつた。いったん溢れ出した涙は、止めどなく流れ続けた。美鈴は、いつの間にか、嗚咽しながら泣いていた。

美鈴が泣いたのは、実に、四年ぶりのことだった。

一〇歳の誕生日に、客を取らされた時から、母のことを、内心、憎んでいた。死ねばいい、と思つたこともあつた。

だが、今の美鈴には、母に対する憎悪は、もうなかつた。涙と共に、母への怒りも憎悪も、流れ去つた。幼い時の、楽しかつた母との思い出が、甦つた。美鈴が小学校に上がるまでは、母は、優しくあつた。その頃までは、病院で、准看護師じゅんかんしゅとして、働いていた。母一人一人の貧しい家庭だったが、美鈴は、幸せだった。

それが変わったのは、美鈴が小学三年生の頃だった。母が、いつからシャブをやるようになったのかは、分からない。まだ二〇代の女盛りだった母は、日本人の振りをした在日ヤクザの甘い言葉に騙された。すぐに、シャブを勧められた。ダイエツトの薬だと、騙されて。そうして母は、シャブ漬けにされた。やがて本性を現したそのヤクザは、母を殴り足蹴にし、借金で縛つて春を売らせ、そのうえ、小学生の美鈴にも、客を取らせるように強要した。

美鈴は、母の遺体を見つめながら、思つた。悪いのは、母ではない。シャブが、麻薬が、悪いのだ。そして、麻薬を売る連中が、悪いのだ。母は、全く悪くないのだ、と。

美鈴は、母の遺言を実行するために、立ち上がった。母の携帯電話で、市立病院に電話をかけた。救急車を寄こすように頼んだ。だが、住所を言うと、拒否された。治安の悪いスラム街には、公務員は足を踏み入れたがらない。その事実を、その時初めて知つた。

美鈴は、自分で母の遺体を運ぶことにした。ボロアパートの前に

は、死んだヤクザの自動車があった。美鈴は母の遺体を後部座席に乗せ、見よう見まねで、車のエンジンをかけた。

小学四、五年生の頃は、その車に、毎日のように乗せられていた。上客が、たくさん付いていたからだ。ヤクザの運転するその車で、市内の繁華街にあるホテルに運ばれていた。小学六年生頃になるとその回数は減り、自宅のボロアパートで春をひさぐ日が多くなった。中学生になってからは、ホテルで客を取る回数はさらに減り、中学二年生になると、身長が伸びすぎたせいで、上客はほとんど離れてしまい、ボロアパートから一步も出ない毎日が、続くようになっていた。

だが美鈴は、記憶力が良かった。エンジンをかけることに成功し、車を出した。

スラム街の中の道路は、一車線の狭いものだった。既に深夜零時を回っていたせいも、他に走っている車はなく、美鈴はなんとか事故を起こさずに、車を走らせた。

二ブロックほど進むと、小さな病院があった。コンクリート製の三階建てで、けばけばしい赤い色に塗られた建物だった。美鈴は、その病院の脇に、車を停めた。その病院は、中国人の中年女医が経営する非合法の地下病院だった。近辺では評判が極めて悪く、美鈴も、小学生の時に、母に注意されたことがあった。あの病院には、決して近づいてはいけない、と。近所の子供達が何人も、その病院の付近で、行方不明になっていたからだ。近所には、行方不明になった子供を、その女医がお菓子で誘って病院内に連れ込むのを見た、という者もいた。その女医は、多くの子供達を騙して殺し、その内臓を売り飛ばしている、という噂が流れていた。

美鈴は、どうしようかと、躊躇ちゆうちゆうした。しかし、市立病院の場所を知らないことに、気がついた。それに、繁華街の広い車道に出たら自分の運転技術では、すぐに交通事故を起こしてしまうのではないか、とも思った。

美鈴は、決断した。車から降りて、病院の呼び鈴を鳴らした。何

度も鳴らし、玄関ドアを強く叩いた。しばらくそれを続けると、女医が現れた。死んだ母の角膜を売りたい、と告げた。女医は、気味の悪い薄ら笑いを浮かべ、病院の中で話を聞きたい、と言った。だが美鈴は、病院の中に入ることを拒否した。しばらくそこで押し問答を繰り返した後、女医のほうに根負けした。病院の前で、二人は、価格の交渉をした。価格は、すぐに決まった。二〇〇万円だった。美鈴は思った。二〇〇万円という高価格を、すんなりと提示するのは、絶対におかしい。なぜなら、その女医は、とてつもない強欲女だとの噂だったからだ。

だが、美鈴は何も言わず、母の遺体を女医に引き渡した。女医は、遺体を病院の中に運ぶ作業を、手伝ってもらいたい、と頼んできたが、美鈴は拒否した。そこで、さらにしばらく、押し問答となったが、女医は結局、車椅子を病院内から運んできて、一人で遺体を運んだ。

玄関ドアが閉まるとすぐに、美鈴は、病院の周囲を歩き回った。病院の裏には、狭い駐車場があり、その駐車場の奥には、小型の焼却炉があった。美鈴が、焼却炉の冷たい鉄のふたを開けると、中には、注射器などの医療廃棄物の燃えかすが残っていた。

美鈴は、病院の裏口ドアの脇に立ち、しばらく待った。すると、母の遺体を病院内に運んでから三〇分もしないうちに、裏口のドアが開いた。車椅子を押した女医が、現れた。その車椅子には、母の遺体が乗せられていた。

美鈴は、開いたドアの陰となつたため、女医は美鈴に気づかなかった。女医は、母の遺体を、焼却炉に捨てようとした。

美鈴は、女医を呼び止めた。ヤクザから奪った拳銃の銃口を向けながら。

女医は、美鈴の拳銃を見ると、脂汗を流しながら、言い訳を始めた。美鈴はその言い訳を無視して、尋ねた。病院の中に、病院関係者が何人いるかを。女医は、たくさん、と答えた。美鈴は、嘘だと思つた。

そこで美鈴は、引き金を引いた。

射殺した女医の遺体を、焼却炉に入れ、燃やした。それから病院の中に入り、自分が受け取るはずだった二〇〇万円を捜した。病院内は、一階が病院の諸施設で、二階が事務所、三階が女医の自宅になっていた。事務所には、大型の金庫があつた。だが美鈴は、どうせ開けられないと思い、その金庫を無視して家捜しやさかをした。机やタンスの引き出しの中、それに、化粧箱の中や、さらには冷蔵庫の中からも、一万円札の束が出てきた。その合計額は、三〇〇万円ほどだった。美鈴はその現金を持ち、車に戻った。母の遺体を車の後部座席に戻してから、自宅に戻った。

美鈴は、ヤクザの死体を車のトランクに納めてから、再び赤い地下病院へ向かった。焼却炉でヤクザの死体を燃やしてから、美鈴は車を走らせた。スラム街を抜けて、繁華街に出た。広い車道の脇に車を停めてから、目印となる大きなビルを探した。それから、携帯電話で、救急車を呼んだ。今度は、拒否されなかつた。

市立病院は、すぐに、死亡診断書を書いた。その日の午後、美鈴は、市営葬儀場で、母の遺体に別れを告げた。

シャブ漬けだつた母は、骨がもろくなつていたらしく、遺骨は全く残らなかつた。そこで、遺灰のみを骨壺に収めた。

美鈴は骨壺を胸に抱き、夜遅く、ボロアパートに戻った。そのアパートからも、スラム街からも、出るつもりだつた。二度と、戻らないつもりだつた。

美鈴は、中学に入学する時に買った、学校指定のスポーツバックに、衣類を詰めた。ほんのわずかしか、なかつた。他に、何か詰めようと思つたが、何もなかつた。母の遺品を、何か持って行こうと思つたが、何もなかつた。

しばらく考えた末に、美鈴は思い出した。まだ、美鈴が幸せだつた頃に、母が好んで履いていた、お気に入りの黒いブーツを。美鈴も、そのブーツを履いた母に手を引かれ、公園を散歩するのが、好きだつた。

そのブーツを、押し入れの奥から、引っぱり出した。流行遅れの武骨なタイプだったが、本革の丈夫な代物しろもので、ほとんど痛んでいなかった。美鈴の細い足には少し大きすぎる気もしたが、美鈴は、それを履くことにした。

美鈴は、母の形見のブーツを履き、遺灰の入った骨壺を胸に抱き、三〇〇万円の入ったスポーツバックを背負って、アパートを出た。その日の夜は、繁華街のネットカフェで、夜を過ごした。

翌日の早朝、さいたま市のはずれを流れる荒川へ行き、母の遺灰を散骨した。

そのあと、美鈴は一年半ぶりに、中学校に登校した。学校は、荒れていた。二年生の教室の中で、一番静かそうなクラスに入り、空いている席に着いた。席は、半分近くが空いていた。誰も、美鈴に声をかけなかった。生徒達は、数人ずつ固まって、雑談をしていた。一〇時になっても、十一時になっても、教師は教室に現れなかった。やがて、廊下から、バイクの爆音が聞こえてきた。それに、拳銃の発砲音も。

発砲音が聞こえた途端、教室にいた生徒達は、一斉に、床に伏せた。美鈴も、慌てて伏せた。しばらくして、バイクの爆音が遠ざかり、聞こえなくなった。教室内の生徒達は、再び、椅子や机に座って、何事もなかったかのように、雑談を始めた。

美鈴は思った。こんな学校では、勉強はできない。やっぱり、大学に行くためには、塾に行かなくては、と。

翌日、美鈴は、質屋を訪れた。質屋は、母がよく訪れていた。美鈴も、一緒に行ったことが何度もあったため、どんなものか、知っていた。美鈴は、死んだヤクザの黒い自動式拳銃を売り、代わりに銀色の回転式拳銃を買った。その拳銃を右足のブーツの中に隠し、たまたま看板を見つけた塾に、足を運んだ。

塾では、中学校とは異なり、秩序が保たれていた。その塾は、個人指導形式だった。美鈴は、塾に、週三回、通うことにした。夜は、ネットカフェで寝泊まりするようになった。塾の先生の指示を受け、

中間試験や期末試験の前後には、中学校へ行き、試験を必ず受けるようにした。

三年生になつてからは、塾の先生の助言を受け、内申書を少しでもよくするため、クラブ活動を始めることにした。美鈴は、バレーボール部に入った。放課後の校庭では、頻繁に不良生徒がバイクで暴走し、発砲事件も度々あった。それに比べると、体育館の中での練習は、いくらかは安全そうだったからだ。それに美鈴は、以前テレビで、バレーボールの試合を見たことがあった。それ以来、一度やってみたいと思つていたので。

バレーボール部の部員数は、一年生を除くと、五人しかいなかった。そうしたこともあり、背の高い美鈴は、三年生になつてからの入部だったにもかかわらず、他の部員は誰も文句を言わず、むしろ歓迎してくれた。結局、参加した大会は、全て一回戦で敗退したが、練習の成果で、基本は身に付けることができた。

三年生の一年間は、あつという間に過ぎた。美鈴は、県立高校に合格した。最底辺の高校ではあったが、だが、それでも、塾の先生は喜んでくれた。なにせ美鈴は、初めて塾を訪れた段階では、小学四年生の漢字も、満足に書けなかったのである。

美鈴が入学した高校は、ひどく荒れていた。しかし美鈴は、毎日高校に通うようになった。なぜなら、その年から、給食が、無料化したからだ。

その高校には、風紀委員が一名いた。風紀委員は、入学したばかりの一年生に対しても、助手の勧誘をしていた。その説明会に偶然参加した美鈴は、助手は、稼げる仕事だと思つた。懸賞金のかかったスクールギャングを殺せば、数百万円も手に入るのである。既に資金が底をつきかけていた美鈴は、仕事をする必要があつた。だが、売春はもう、するつもりがなかった。それに、たとえ売春しても、高校生では、たいして稼げないことも分かっていた。だから美鈴は、風紀委員の助手になった。

その日から、美鈴は、拳銃使いへの道を、歩き始めた。

第七章・終

## 第八章「理想の世界は八〇年代!？」

第八章「理想の世界は八〇年代!？」

ガラリと、音楽室のドアが、突然開いた。

ハッと目を覚ました美鈴は、そのまま椅子から転がり、床に伏せた。右膝を胸に引きつけ、右のブーツの中から、拳銃を取り出した。

「誰かいるのか!」

ドアを開けた者が、呼びかけた。

その声は、中年の女の声だった。

教師だと思った美鈴は、すぐに返事をした。

「はい、います」

そう言いながら、美鈴は立ち上がった。右手の拳銃を、背中後ろに回して隠しながら。

その中年女は、紺色の制服を着て、分厚い防弾チョッキを着込み、鉄製のヘルメットをかぶっていた。そのヘルメットには、防弾ガラス製のフェイスカバーまで付いていた。

警備員だった。

彼女は、右手を、右腰のホルスターのすぐ上の脇腹に、当てていた。いつでも拳銃を抜けるように。

「早く帰れ! 他を見回ってから、もう一度ここへ来る。その時までには下校してなかつたら、お前の名前を、生徒指導の先生に報告することになる。それが嫌なら、さっさと帰れ!」

「はい」

美鈴がおとなしく返事をする、女警備員は、去っていった。

美鈴は、自分の額に手を当てた。少し、寝汗をかいていた。嫌な夢を見たせいで、気分が悪かった。

美鈴は、机の上のものを片付け、音楽室を出て、保健室へ向かった。

\* \* \*

美鈴は、保健室のドアを静かに開けた。既に消灯後のため、室内は真つ暗だった。暗闇に目が慣れるのを待ってから、音を立てないように気をつけながら、香織のベットのほうへ行き、その脇に立った。ベッドをのぞき込むと、香織が、目を開けた。

「美鈴お姉さん？」

「そうだよ」

美鈴は、口元をほころばせながら、答えた。

「嬉しいわ。また来て下さったのね」

香織の声も、嬉しそうだった。

「起こしちゃったかな？」

「いいえ。まだ七時だから、寝ることなんて、できやしないわ」

「時刻が分かるの？」

「ええ。警備員があちこちのドアを開け閉めする音が聞こえるから。一回目の見回りは七時で、二回目は九時半から。見回りの音が聞こえなくなると、一〇時半を過ぎたということなんだけど、そのあともなかなか寝付けないわ。なにせ、一日中ベッドの上で寝てるから。ところでお姉さんは、まだ下校しないの？」

「うん、まあね」

美鈴は、やや寂しげな口調で答えた。

「お姉さんの自宅は、どこ？ 学校の近く？」

しばらく口ごもったあと、美鈴は答えた。

「アタシの家は……、ないんだ」

一瞬の沈黙のあと、香織が口を開いた。

「アタシもそうよ。中三の冬にポロアパートから追い出されて、そのあとは中学校に寝泊まりしたわ。そして高校生になってからは、この学校で寝泊まりしていたの」

「この学校に、寝泊まりできる良い場所って、あるの？」

「ええ。部室に寝泊まりする子が、結構いるわよ。全部で……、  
四、五〇人くらいかしら」

「香織は、何部だったの？」

「文芸部よ。食堂ホールの二階に、文化系クラブの部室があるの。体育会系クラブの部室よりも狭いけど、文芸部は良いわよ。部員数は少ないし、ほとんど活動らしい活動はやってないから、夜だけじゃなく、昼間も自分だけの部屋のように、自由に使えたわ。お姉さんも、入部なさったら？ アタシが元気だった時に、保健室からパクツた、枕と毛布とシーツが、まだ部室にあると思うから、良ければ、使ってね」

「うん。ありがとう」

少しばかり嬉しそうに、美鈴が答えた。

すると、香織の表情も、暗闇の中ではあつたが、ほころぶのが分かった。

「それでね、部室の本棚にはね、昔の部員が年に一冊のペースで作っていた同人誌が、ずらっと並んでるの。ここ七、八年ほどは、作ってないみたいだけど。それでね、その同人誌の中にはね、とても面白い小説もあるのよ」

「へへえ、そうなんだ。どんな内容？」

「アタシね、たまたま三〇年ほど前の同人誌を、手にとって読んでみたの。どうせ授業には出ないし、かといって図書館で勉強するのも面倒だから、時間でも潰そうと思って。で、その中の一つにね、この学校の生徒達を主人公にした小説が、あつたの。その小説がね、スゴイのよ」

「どんなふうによ？」

「その小説の中に出てくる高校の名前はね、今宿高校っていうの。明らかに、この学校がモデルでしょ。それに、校舎や食堂ホールや体育館の配置が、完全にこの学校と同じなの。それなのにね、その小説の中の世界ではね、麻薬も拳銃も、出てこないの」

「へえ〜!」

思わず感心した美鈴が、真顔で相づちをつつた。

「それでね、さらにスゴイのは、主人公達は二年生の女四人なんだけど、彼女達には全員、帰る家があって、しかも全員、両親がそろってるの。母親と父親の両方よ」

「へへえ。みんなお嬢なんだ」

「そうなのよ。都立校の生徒なのに。しかもスゴイのは、その両親は、みんな、実の親なのよ」

「へえ〜！」

目を丸くした美鈴の声が、半オクターブほど高くなった。

「アタシなんて、実の父親は、三歳の時に出て行っちゃったから、顔すら覚えてないのに。三歳なら、少しくらいは記憶が残ってても良いと思うんだけど、いくら思い出そうと思っても、顔を全く思い出せないの。お姉さんは、実の父親の顔、覚えてる？」

「アタシは、生まれた時から、父親はいないから……。アタシの本当の父は、アタシの母に、アタシを産むなって、言ったんだって。だけど母さんが、どうしても産むって言って、一人で産んだんだって。昔アタシが小さかった時に、母さんが酔っぱらって、そう言ってた。つまりアタシは、父親から望まれずに、この世に生まれてきたってわけ」

「だけとお姉さんは、お母さんに望まれて生まれてきたじゃない」  
その香織の言葉を聞いた美鈴は、一瞬言葉に詰まったあと、答えた。  
「……、そうだね」

美鈴は、指で目頭を軽く押さえた。

「それで、その小説のストーリーって、どんなふうなの？」

「その主人公達はね、恋をするのよ」

「へっ？ 恋？」

香織の答えに拍子抜けした美鈴は、思わず聞き返した。

「そう。恋をするの。彼女達は、恋をして、恋をして、恋をするの」

「一人当たり、何十人くらいと？」

その美鈴の質問に、香織は目を輝かせて答えた。

「それが、スゴイのよ。彼女達は、誰一人として、セックスしないのよ！」

「ええっ？ 何それ？」

美鈴が、思わず大きな声を出した。

「彼女達にとって、恋することと、セックスとは、違うことなの。彼女達は、特定の男の子に恋をして、恋い焦がれて、好きで好きでたまらなくなるのに、その男の子に、好きだって言えないの」

「なんで？」

「分からないわ。だけど、たぶん、好きだって言わないから、ますます恋しさが募<sup>つ</sup>っていくのかもね」

想像を絶する香織の話に、美鈴は軽く左右に首を振った。まるで理解不能だと言わんばかりに。

「だけど、アタシも自分の人生を振り返ってみると、小六の時に似たようなことがあったわ。小六になると、同じクラスの女どもが、次々に経験し始めてね。アタシもヤツちゃおうと思っただけだけど、だけど、初めての時って、チヨ一痛いって言う女も、いるじゃない。同じクラスに、以前から目を付けてた可愛い男の子がいたんだけど、結局痛いのが嫌で、何もしないまま、卒業しちゃったの。そしたらね、中学の入学式のあと、自宅に帰ったらね、継父<sup>ままたち</sup>がね、セーラー服を着たアタシを見て、お前ももう大人だな、って言うの。そしてそのままヤラレちゃってね。チヨ一痛かったわ。そのあと、帰宅した母にヤラれたことを言ったらね、このドロボー猫！ って怒鳴られて、メチャクチャ殴られたわ。自分の男の首に鎖を付けられない女が、人のせいにしてやがってね。頭きちゃうわよね。それで次の日、学校で、気の弱そうな男の子をひと気のない女子便所に連れ込んで、無理矢理パンツ脱がせてヤツちゃったの。その子、半ベそかいて痛がってた。今考えると、悪いことしちゃったかもね。まあ、男の子の痛みなんて、女の痛みには比べると、たいしたことないって言うけ

どね。ところで、お姉さんの初体験は何歳？」

「アタシは、一〇歳」

その美鈴の答えに、香織は、思わず息を飲んだ。

「小四の時、一〇歳の誕生日だったよ」

美鈴がその言葉を続けると、暫しの沈黙のあと、香織が尋ねた。

「継父にヤラレたの？」

「知らないオヤジ。母さんに言われてね。もう一〇歳なんだから、自分の食い扶持は自分で稼げ、ってね。それで、学校から帰宅したあと、ランドセルをしょったまま、車に乗せられ、安ホテルに連れてかれて、知らないオヤジにヤラレた」

香織が、恐る恐る尋ねた。

「チヨー痛かった？」

「さあ、覚えてないね。母さんが言うには、ピーピー泣いて、みっともなかったってさ。だけど、二回目からは泣かなくなったらしいよ。アタシは覚えてないけどね。いつからかは覚えてないけど、アタシ、小学生や中学生の時、幽体離脱ができたんだ」

「あつ、アタシの中学ん時の親友も、それ得意だったよ。幽体離脱ができるって、どんなことされても、痛みを感じないんだってね。あとになってから、痛くなるらしいけど……。で、その親友、痛みを消すためにシャブを始めちゃってさ……。十五歳の春に、死んじやった」

「アタシも……。シャブを打たれたよ。元気が出る薬だって騙されてね。十三歳の時から……」

驚いた香織が、目を大きく見開いた。

「ええっ？ でも、今のお姉さんは、シャブ中のように見えないわ」

「やめたよ。十四歳になった時にね。アタシと母さんをシャブ中にした売人を、殺したんだ」

香織が、歓声をあげた。

「カツコイー！ その売人って、大人の売人？」

「ああ。そうだよ」

「ますますカッコイイわ。やっぱりお姉さんは、強い人ね」

香織は、尊敬のまなざしで、美鈴を見つめた。

「で、その小説って、最後まで、どうなるの？ 麻薬も拳銃もセックスも無しじゃ、大金を手に入れてハッピーエンド、っていう風にはなりそうもないね」

「そうなのよ。その小説の中には、お金の話も出てこないの。卒業後、どうして食べていくかで悩む登場人物は、なんと、一人もいないの。主人公の四人は、全員、大学に行くつもりなのよ」

「へえ〜。四人ともホントのお嬢なんだ」

「それに、その四人が恋をする男の子も、全員、大学に行くつもりなのよ」

「まるで私立校みたいだね。そんなお嬢達なら、悩み事など何もなくて、毎日がハッピーなんだろうね」

「それがね、違うのよ。彼女達は、苦しくて苦しくて、仕方がないの」

「なんで？」

「彼女達は、恋で悩んだり、友情で悩んだりしちゃうの。良美っていう主人公の一人は、チャンスをうまく作って、俊彦っていう片思いの男の子と友達になるんだけど、好きだって言い出せず、悩み苦しむの。で、そんなある日、良美は偶然、親友の絵里が、俊彦と逢い引きしてるところを見ちゃうのよ」

「逢い引きって？」

「女と男が、人目のないところで、隠れて逢うことよ」

俄然興味<sup>がぜん</sup>が湧いてきた美鈴が、身を乗り出した。

「へ〜。なんかバイバイ展開になりそうだね。で、良美は絵里のことう、殺しちゃうの？」

「いいえ。その小説の中では、殺人事件なんて起きないの」

「じゃあ、フクロにして半殺しとか？」

「違うの。その小説の中の世界では、暴力を振るう人は、一人も

いないの」

「ええっ？ そんなバカな！ じゃあ、トラブルは、どうやって解決するの？」

「だから、それが問題なのよ。良美はその日以来、絵里のことを無視するの。ランチを一緒に食べるのも、やめちゃうの」

「それだけ？ そんなんじゃない、復讐にならないじゃん。まあ、良美は俊彦とヤツてないんだから、絵里が俊彦とヤツたからといって復讐する筋合いじゃないだろうけど……」

「それがね、絵里も俊彦とヤツてはしないの」

「ええっ？ 人目のないところで二人つきりだったんでしょ。それなのに、絵里は俊彦のパンツを脱がさなかったの？」

「それがね、実は絵里は、秘密の相談を受けていたの。俊彦の親友の雅彦が、絵里のもう一人の親友の誠子に片思いをしていて、それを内緒で相談していたのよ」

「だったら、絵里は、そのことを良美に言えばいいじゃん」

「だけど絵里は、俊彦との密会を見られたことを知らないの。だから、自分がなぜ突然無視されるようになったのか、全く分からないの。その上、絵里の別の親友の秋菜が雅彦に片思いをしていて、だから絵里は、俊彦からの相談を誰にも相談できなくて、それで悩んでいる時に、良美に無視されちゃったわけ。さらに、良美は、自分が見たことを誠子と秋菜に話したから、その二人も絵里のことを無視するようになるの」

「なんで？」

「その四人の女は仲良しグループだったから、お互いに、好きな男の子が誰かっていうことを知っていて、他の女の片思いの対象には、手を出さないっていう、暗黙の了解があったの。絵里は、それを破ったと思われたわけ」

「へ〜。昔は、いろんなオキテがあったらしいからね。今は、昔の面倒なオキテはみんな、構造改革の自由化で、撤廃されちゃったっていう話だけ」

「で、そのあとも、誤解が誤解を生んで、お互いに誤解し合って、もう、メチャクチャ複雑な状況になっちゃうの」

「それなのに、殺人は起きないの？」

「そうなの」

「じゃあ、その複雑なトラブルは、最後、どうなったわけ？」

「最後はね、ハッピーエンドなの」

「えっ？ ハッピーエンド？ だけどさっき、大金は出てこないって……」

「仲直りするの」

「はっ？」

「良美はある日、俊彦に声をかけられて、人目のないところに連れて行かれて、相談されるの。雅彦の片思いのことを絵里に相談したのに、そのあと、返事が来ない、って。それで良美は、自分が誤解していたことに気づくわけ。それで良美は、絵里に泣いて謝るの。涙をぼろぼろ流してね」

「へえ〜。高校生にもなって、涙を流すんだ」

「そしたら、絵里のほうも涙をぼろぼろ流して、今まで親友に無視されてどんなに辛かったか話すの。すると良美は、もっと涙を流して、何度も謝るの。そしたら絵里は、良美のことを許しちゃうの。それで、二人は手を取り合って涙を流すの。アタシ達は、また今日から親友よ、って言ってさ」

「へえ〜。それで、誠子と秋菜と雅彦の三角関係はどうなったの？」

「実は、誠子は、雅彦に片思いをしていたの。だけど、秋菜に先に、雅彦への片思いを告げられて、それで、片思いの対象がかぶらないように、わざと他の男の子の名前を答えて、嘘をついていたの」

「じゃあ、今度は誠子と秋菜のバトルが起きるんだ」

「それが、起きないの。誠子が本心を打ち明けたら、秋菜は最初はショックを受けるんだけど、親友の誠子と、片思いの相手の雅彦が、二人とも幸せになるんだったら、アタシもそれで幸せよ、って

言って、身を引くの」

「へえ〜」

美鈴の表情は、心底驚いているようだった。

「それで四人の女達は、また以前のように仲良しに戻るの。誠子と雅彦は相思相愛になってキスをするの。良美と俊彦もますます親しくなって、どちらも告白はしないんだけど、手をつないで下校するシーンで、その小説は終わるの」

美鈴は、大きく息を吐いて、溜息をついた。

「へえ〜。大金は出てこないけど、ハッピーエンドのような気がするね」

「ねっ。お姉さんも、そう思うでしょ。その小説の終わり方は、ハッピーエンドだって」

「そうだね」

「その小説の中の世界って、ホント、素敵よね。だって、一度壊れてメチャクチャになった人間関係が、元に戻っちゃうんだから。人間関係が再生するなんて、とても素晴らしいわ」

「そうだねえ。これが現実の世界だったら、絶対に殺し合いになるだろうね。良美が絵里を、秋菜が誠子を、撃ち殺そうとするだろうね」

「そうよね。アタシ考えたんだけど、その女達が殺し合わずにすんだのは、たぶん、麻薬も拳銃もなかったからだと思うの」

「それに、お嬢だから」

美鈴が、言葉を挟んだ。

「そうよね。お嬢だから、卒業後、どうやってご飯を食べていくかの心配をしなくていい。だから、大金をつかむことなんかじゃなくて、友情や恋愛がうまくいくことが、彼女達にとっての幸福になるんでしょね」

「なんかスゴイ世界だね。たとえば、小説の中の架空の世界だとしても。カネよりも、友情や恋愛のほうが大切な世界なんて。だけどよく分からないのは、なんで秋菜は、身を引いて自分の恋を犠牲に

したの？」

その美鈴の質問に、香織は少し眉間にしわを寄せ、数秒ほど思索してから、口を開いた。

「たぶん、それが……、自己犠牲っていうものよ」

「だから、なんで秋菜は、自己犠牲を選んだの？」

「それはたぶん……、秋菜が、いえ、その小説の登場人物全員がそうなんだけど、幸福を、お金じゃなくて、人間関係に求めているからよ。お金が幸福の基準なら、他人からお金を奪っても、自分は幸せになれるわ。だけど、幸福の基準を、良好な人間関係においた場合、他人から何かを奪ったり、他人に酷いことをしたりしたら、その人間関係は壊れちゃうでしょ。だから秋菜は、自分を犠牲にし、それによつて秋菜自身も、幸福になったのよ」

美鈴は、思わず唖った。

「自分を犠牲にすることによつて、自分も幸福になる、つか。奥が深いねえ。それに、なんか哲学的だね」

「そうね」

「よく分からないような気もするけど、何となく分かるような気もする。いずれにしても、その小説は、スゴイ作品だね。その小説、ホントにアタシらの先輩が書いたの？」

「そうよ。だいぶ昔だけど。作者は、もしまだ生きていたら、四〇歳代の半ばくらいかしらね」

「じゃあ、アタシ達の親よりも上の世代だね」

香織が、溜息をついた。

「そうなるわねえ。その作者、なんでプロの作家にならなかったのかしら。もし、こういう素晴らしい人がプロの作家になって、多くの人達に影響を与えていたら……」

美鈴は、眉間にしわを寄せながら口を挟んだ。

「この小説は、出版しても、売れないよ。現実とは、あまりにも大きく、かけ離れすぎているから。アタシも、そんな世界に住んでみたいと思うけどね。麻薬も暴力もない、食べる心配もなくてい

い世界。もしそんな世界が本当にあつたなら……」

「天国かしら？」

唐突に、香織が尋ねた。

「かもね」

「アタシが死んだら、そんな世界へ行けるかしら？」

一瞬、美鈴は言葉に詰まった。

「ごめん。アタシ、死後の世界って、信じてないんだ」

「だけとお姉さん、幽体離脱は、得意なんですよ」

「ガキの頃ね。だけど、その時だって、死後の世界なんてのぞいたことはないよ。いっつも天井につつかえて、上から、ロリコンオヤジに犯されてる自分を見てるだけ」

「アタシの中学ん時の親友も、同じこと言ってた。ある日アタシがさ、幽体離脱できるなんてアンタ良いわね、アタシも幽体離脱して、広い世界を自由に飛んで、この酷い世界から抜け出したいって、そう言ったら、その子、怒り出しちゃったの。天井につつかえて、どこにも飛んで何て行けないよ、って」

「アタシ、高校生になってから図書館で読んだんだけどさ、幽体離脱って、実際には、靈魂とか、関係ないんだってさ。自分の心が破壊されないように、肉体的な感覚を遮断して精神を守る、心の防衛機能なんだってさ。心理学的にはね」

「そうだったんだ……。じゃあ、この世には、天国は、ないんだ……」

香織の口調から、溢れていた力強さが、急速に消えていった。

「がっかりすることはないよ。天国がないってことは、地獄もないってことだから。それに、幽霊もいないから。他人の幽霊に脅えることもないし、自分が幽霊となってこの世をさまよい続けて苦しむこともない」

「じゃあ、人間は死んだら……」

美鈴は、すぐに言葉を継いだ。

「灰になる。そして、海に還るんだよ」

「海に？」

「ああ、そうだよ。アタシの母さんの遺灰は、川に流した。今頃、母さんの遺灰は広い海で、新しい命を育はぐんでいるはずさ。まあ、新しい命なんて言っても、せいぜいプランクトンや、ちっぽけな雑魚ざしだらうけどね」

「それって、カツコイイかも。アタシも死んだら、川に流して欲しいな」

「何言ってるんだよ。まだまだ長生きしなよ。死ぬには若すぎるだろ」

香織は口をつぐみ、何も答えなかった。

二人の間に、沈黙が流れた。

暗闇の中で美鈴は、他の適当な話題を探して思案した。口を開こうとした時に、廊下から、複数の足音が聞こえた。美鈴は急いでブーツから拳銃を抜き、ドア脇に立った。

「美鈴！」

ドアの外から、女が呼びかけた。その女の声は、里沙だった。

「いるよ」

美鈴が答えると、ドアが開いた。里沙、隆子、百合花、サトルの四人が、中に入ってきた。

「早かったね」

美鈴がそう尋ねると、里沙が腕時計を見ながら答えた。

「そうね。少し早かったわね。だけど、もうそろそろ、九時になるわよ」

五人は、警備員の二回目の巡回が始まる九時半まで、保健室の外の廊下で、過ごすことにした。

## 第八章・終

## 第九章「真夜中の学校はキリングフィールド!?」

第九章「真夜中の学校はキリングフィールド!?」

保健室前の廊下で、美鈴は、里沙、隆子、百合花、サトルと打ち合わせをした。サトルは、警備員の見回りが始まる前に、校内から出て、見張りをする予定の雑居ビルへ向かった。四人は、九時半になる少し前に保健室内に入った。そこで一時間ほど待機し、警備員の見回りが終了するのを待って、保健室をあとにした。隆子は東校舎を出て、食堂ホールに向かった。そこで、十一時半頃まで待機する予定だ。残り三人は音楽室で待機し、見張り役のサトルからの連絡を待った。

十一時少し前に、美鈴の携帯電話に、サトルから連絡が入った。李大栄と思われる五、六名が、正門から校内に入ったとのことだった。正門の周囲の外灯は薄暗く、顔までは確認できなかったようだ。十一時半になる少し前に、再びサトルから連絡が入った。美鈴が、電話に出た。

「はい。サトル？ 奴らは来た？」

里沙が、美鈴の携帯電話に、自分の耳を近づけ、聞き耳を立てた。すると、百合花もそのまねをし、美鈴の逆側の頬に自分の頬を寄せ、聞き耳を立てようとした。

「ああ。分かった」

美鈴はそう言い、電話を切った。

里沙は、サトルの言葉が良く聞こえなかったらしく、美鈴に尋ねた。

「李秀英達は、何人だつて？」

「一〇名以上だつてさ」

「正確には？」

「数えるまもなく、正門の中に入って行っただつてさ」

「役に立たない見張りね。一〇〇万円も取るのに」

里沙が、不満の言葉を吐き出した。

美鈴は、自分の腕時計を見ながら、二人に呼びかけた。

「現在、十一時二十八分。ちょうど一〇分後に、この部屋を出る。一〇分で仕事を終え、またこの音楽室に戻って待機する。計画通りにね」

「分かってるわ」

里沙が答えた。

美鈴は、無言のままの百合花を見た。百合花は、緊張した面持ちおもてで、美鈴の顔を見つめ返した。

「百合花、大丈夫？」

「ええ、もちろんよ」

だが、そう答えた百合花の声は、わずかに震えていた。

里沙が、意地悪く百合花を挑発した。

「怖いのか？ まあ、実戦は初めてなんだから……」

「そんなことないわよ」

百合花は、怒気を含んだ声で、里沙の言葉を途中で遮った。

美鈴が、百合花に尋ねた。

「百合花の拳銃って、オートマチック？」

「ええ、そうよ。最新型のベレッタよ」

「じゃあ、今のうちに、安全装置を外しておいたほうがいいよ。

ホルスターの留め金も外しておいて、走る時は、拳銃がホルスターから飛び出さないように、銃把に軽く手を乗せておくといいよ」

美鈴はそう言いながら、自分の両腰のホルスターの留め金を外し、いつでも拳銃を抜けるようにした。

「あ、ありがとう……」

百合花は小声で礼を述べながら、言われたとおりにした。

「美鈴、五分前よ」

里沙の言葉に促され、美鈴は隆子に携帯電話をかけた。食堂ホールの一階で待機していた隆子は、すぐに屋外に出て、配置についた。

三人は、花粉症用ゴーグルとマスクをつけた。手製の催涙ガス爆弾は里沙が手に持ち、手榴弾は百合花が持った。

「ライターは？」

百合花が美鈴に尋ねた。

「里沙に渡してある」

「一個しかないの？」

「その手榴弾を使うのは、里沙かアタシだから。アタシが、手榴弾、って叫んだら、アタシのほうに投げて渡して」

「分かった……」

百合花の返答を途中で遮り、里沙が美鈴に声をかけた。

「時間よ！」

力強い声で、美鈴は二人に呼びかけた。

「行こう！」

三人は、音楽室を出た。

\* \* \*

暗闇の中を、三人は、足音を立てないように、静かに小走りで移動した。先頭に立つ美鈴は、南校舎三階の階段に到着すると、足を止めて、二丁の拳銃をホルスターから抜いた。百合花もそれをまね、拳銃を抜いた。既に拳銃を抜いていた里沙は、下に向けていた銃口を、上に向けた。

美鈴が百合花に左手で合図をすると、百合花は大きくうなずき、階下に銃口を向け、警戒態勢を取った。

美鈴は、里沙の顔を見た。暗闇に加え、ゴーグルとマスクをつけているため、その表情は分からない。だが、美鈴がゆっくりと大きく一回うなずくと、里沙もうなずき返した。

姿勢を低くした美鈴は、階段の内側の壁に背をつけながら、足音を立てずに、ゆっくりと、一段ずつ昇った。

三階と四階の間にある踊り場まで、あと二段という地点まで来る

と、美鈴は、いったん足を止めた。

一度だけ、大きく深呼吸した。

その直後、美鈴は、一気にその三段を上り、踊り場に飛び出した。二十二口径の軽い銃声が、暗闇の中に響いた。

里沙が、美鈴に続いて、踊り場に飛び出した。

だが里沙が目にしたのは、崩れるように倒れて階段の上から滑り落ちてくる、四つの死体だけだった。

美鈴は、一気に階段を昇った。階段の上まで来ると、壁の裏から上半身だけ廊下に露出し、両手の拳銃を撃ちまくった。

続いて、里沙が階段の上方まで駆け昇った。姿勢を低くし、自分の頭部と上半身を、美鈴の腰の後ろから出し、廊下の奥に向かって発砲した。

情報通り、敵の警備役は、教室の前後のドアに二名ずつ立っていた。一秒足らずでその四名を射殺した美鈴は、廊下の突き当たりの非常口ドアの前にいる、二名の警備役に目を向けた。その二名は、里沙が倒す予定だった。だが、距離が遠すぎるせいか、撃たれて床に倒れたのは、一名だけだった。

その倒れた人影が、絶叫した。もう一人が、美鈴達の方に向かって、慌てて乱射を始めた。四組の教室の中で、日本語ではない言葉で、女達がわめく声が聞こえた。

美鈴が、非常口ドアの警備役を、一発で頭部を撃ち抜き、射殺した。

床に倒れて叫んでいる負傷者に対し、里沙が何発か撃ち込み、ようやく仕留めた。

絶叫が、止まった。

廊下は、再び、静寂に包まれた。四組の教室の中の女達は、息を潜めているようだった。

美鈴が、小声でささやいた。

「来るよ。一気に。中の連中が」

「催涙ガス爆弾、使う？」

里沙も、ささやくような小声で、尋ねた。

「用意して」

美鈴がそう答えた直後、教室の二つのドアが、同時に開いた。多数の人影が、一気に廊下に飛び出した。

美鈴から見て手前の一団が、一斉に乱射した。

同時に美鈴も、姿勢を低くしながら、両手の拳銃を連射した。

奥のドアから飛び出した集団は、脇目もふらずに、非常口に向かって走り出した。その先頭にいる女らしき人影は、左手に、アタツシユケースを持っていた。

「李秀英が逃げる！ 撃て！」

美鈴が里沙に叫んだ。

里沙は、導火線に火を点ける寸前だった催涙ガス爆弾とライターを床に放り出し、ホルスターから拳銃を抜いて銃撃を始めた。

手前のドアから飛び出した六人を、瞬く間に射殺した美鈴は、アタツシユケースの女に銃口を向けたが、彼女の背後は複数の護衛役が固めており、狙えなかった。

そこで美鈴と里沙は、その護衛役から倒し始めた。美鈴の放った弾丸は、続けざまに、正確に相手の頭部を撃ち抜いたが、里沙の銃弾の半分は外れ、残り半分も、相手の背中や肩に当たったのみだった。

「弾が切れた！」

美鈴がそう叫んだ直後、里沙も叫んだ。

「わたしもよ！」

里沙は壁の裏側に上半身を引つ込め、空からになった弾倉を外した。アタツシユケースの女が、非常口のドアに右手をかけた。背後を固める護衛役は、残り一名のみ。

両手の拳銃を腰のホルスターに戻した美鈴は、勢いよく廊下に躍り出た。右膝を胸に引きつけるように蹴り上げると、銀色のリボルバーが飛び出した。その拳銃をつかんだ瞬間、護衛役が振り返った。本能的に、美鈴は床に飛び込んだ。

パリパリパリ、という軽い連射音と共に、軽機関銃の無数の銃弾が、美鈴の頭上を通過した。

胸と腹が床に接地するのと同時に顔を上げた美鈴の目に、アタツシユケースの女が、ドアを開けるのが見えた。

三十八口径の銃声が、轟いた。

護衛役の女は頭部を撃ち抜かれ、その場に崩れ落ちた。

アタツシユケースの女は、ドアの向こうへと一歩踏み出した。

再び、三十八口径の銃声が轟いた。

その女は、心臓を背後から撃ち抜かれ、前のめりに倒れた。非常口のドアが閉まり始めたが、その女の上半身を挟んで、ドアは止まった。

「美鈴！」

そう叫びながら、弾倉を換えた里沙が廊下へ踊り出て、乱射した。慌てて美鈴は、額が床につくほど、頭を下げた。

「李秀英は？」

里沙が、叫ぶように尋ねた。

「ドアに挟まってる奴だよ」

美鈴がそう答えると、里沙は一瞬、銃撃をやめたが、すぐに銃撃を再開した。

今度の標的は、廊下でのたうちまわる負傷者達だった。七、八発ほどしつこく銃撃を加え、四人の負傷者全員を、絶命させた。

四階の廊下で、生きている女は、美鈴と里沙の二人だけとなった。

「他に、敵の生存者は？」

里沙のその問いかけに、立ち上がった美鈴は、四組の教室をあとで指しながら、答えた。

「教室内は、まだ確認してないよ」

「じゃあ、確認しましょ。油断して、背中から撃たれたら困るからね」

美鈴と里沙は、一組から順に、教室内を確認した。敵が潜んでいた四組も含めて、六つの教室の中に、人影はなかった。

二人は、廊下に転がる死体に銃口を向けながら、用心深く非常口まで進んだ。

廊下は暗かったが、非常口の周囲は、非常灯と、半開きのドアから差し込む月明かりのおかげで、多少はましだった。

アタツシユケースの女は、うつぶせに倒れており、白いハーフトの背中には、赤黒い染みが広がっていた。

全ての敵の死亡を確認した里沙は、ゴーグルとマスクを外しながら、尋ねた。

「なぜこの女だけ、頭部を撃たなかったの？ あなたの腕なら、充分可能だったでしょ？」

美鈴も、ゴーグルとマスクを外しながら、答えた。

「顔を破壊してしまつと、身元確認ができなくなって、懸賞金をもらい損なうことがあるからね」

「なるほどね。じゃあさっそく、李秀英の顔を、拝見しましょ」

里沙はそう言うつと、死体に銃口を向けたまま、あごで美鈴を促した。

美鈴はその場にしゃがみ込むと、死体の後頭部の短い金髪をつかんで頭部を持ち上げ、顔をのぞき込んだ。

「この女、どうやら、李秀英じゃないよ」

美鈴の三步ほど後ろにいる里沙が、いぶかしげに尋ねた。

「どうしてそんなこと、分かるの？ 李秀英の顔を知らないくせに」

「だってこの女、どう見ても高校生には見えないほど、年喰ってるよ」

「老けてる女子高生だっているわ」

「だけど、どう見ても、三十路みそじに見えるよ」

そう言うつと美鈴は、その死体を廊下に引きづり込み、仰向けにした。非常口のドアが自動的に閉まり、月明かりは差し込まなくなつた。だが、おおよその年齢を確認するには、非常灯の明かりだけで、充分だった。

美鈴は、その死体の体を探り、財布と携帯電話を見つけた。財布を開け、中を確認した。身分証の類は入っていなかったが、一枚の紙製のカードを見つけ、里沙に差し出した。

「何、それ？ 暗くてよく見えないわ」

里沙が、よく見ようと顔を近づけた。

「ハンゲル文字だよ。コリアンの何かの店のメンバーカードじゃないかな」

「ということは……」

そこまで言っつて、里沙は、思わず口をつぐんだ。

「なんか、ヤバイ感じだね」

立ち上がりながら、美鈴が言った。

恐る恐る、里沙が美鈴に尋ねた。

「コリアン・マフィア？」

「そうだろうね」

美鈴は素っ気なく答え、死体の財布を里沙に渡した。

「なんで、コリアン・マフィアが、こんなところにいるのよ」

里沙は、八つ当たり気味に文句を言った。

「アタシ達は、はめられたんだよ。李秀英にね。このコリアン・マフィアもだけどね」

冷静にそう答えながら、美鈴は、自分の携帯電話を取り出し、写真撮影機能で、その死体の顔を撮影した。

「写真なんて撮って、どうするの？」

「あとで、警視庁の懸賞金付き指名手配者データベースを調べれば、名前と所属組織が分かるかもしれない。指名手配になってればの話だけど」

美鈴は、死体の携帯電話を操作し、電話帳機能を開いた。

「何か分かりそう？」

「意味不明のカタカナばかりで、よく分かんないや」

軽く首を左右に振った美鈴は、その携帯電話も里沙に渡した。

美鈴は、護衛役が持っていた軽機関銃を拾った。

「二十二口径の国産軽機。これは弾倉が長いから、九〇発入りかな。現金輸送車の警備員が、よく使っているタイプだね。里沙、これももらっておこうよ」

「それは良くないアイディアね。軽機関銃の所持には免許が必要だし、その免許は、十八歳以上で、しかも大手警備会社の推薦状がないと、取得できないわ。だから、私達高校生が持ったら、法律違反になるわよ」

「だけど、風紀委員が、校内で違法な銃を発見し、風紀取締局に提出するまでの間、保管していた、ってことなら、問題ないはずだよ」

「なるほどね」

美鈴は、予備弾倉と合わせて、軽機関銃を里沙に渡した。

スカートのポケットから、小さく折り畳んだビニール製のゴミ袋を取り出すと、美鈴は、マフィア達が持っていた拳銃を、拾い始めた。

それを目にした里沙が、驚いて尋ねた。

「ひよっとして、全部拾うの？ 戦利品ってことで？」

「全部じゃないよ。金属製のものだけだよ。プラスチック製は強度が弱いし、劣化しやすいから、質屋に持って行っても、安い値段しかつかない。その点、金属製は壊れにくいからね。だいたい年季の入った中古品でも、そこそこの値段がつく」

そう話しながら美鈴は、三丁目の拳銃を拾った。

「あつ！ これって、ニューナンブじゃん！ いまどきめずらしい！」

ニューナンブとは、二〇世紀の後半に、日本の警察官用拳銃として広く普及した、国産の三十八口径五連発回転式拳銃だ。撃鉄を起こしてから撃つシングルアクションの場合の命中精度は悪くないものの、撃鉄を自動的に起こすダブルアクション時の命中精度は、芳しくないと言われていた。

「随分古い拳銃を持つてるわね」

「あつ！ もう一丁あつた。ひよつとしてこのコリアン・マフィア、二〇世紀から続く古い組織かもね」

その時、百合花が階下から、小声で呼ぶ声がした。

「美鈴！」

美鈴は、大きな声で答えた。

「百合花！ もう終わつたから、上がつて来なよ」

四階へと上がった百合花が、思わず叫んだ。

「何これ！ 床が血の海じゃない！」

死体のアタッシュケースを手に取りながら、里沙は百合花に尋ねた。

「一階の敵はどうしたの？」

「来なかつたわ、誰も。だから私、まだ一発も撃ってないわ。それで、李秀英は倒したの？」

美鈴が、間髪入れずに答えた。何かイヤミを言いたそうな里沙が、言葉を発する前に。

「いや、まだだよ。こいつらは、李秀英のグループじゃなかったとりあえず、音楽室へ撤退しよう。なんか、悪い予感がするからね」

その時、美鈴の携帯電話が、振動した。拳銃の入ったビニール袋を床に置き、電話に出た。

隆子だった。

「美鈴、ごめん……」

隆子の声は、蚊の鳴くような、か細いものだった。

「隆子、どうした？」

「撃たれた。いきなり、背後から……。油断してて、ごめん……」

「待つてる！ 今行く！」

美鈴は、里沙と百合花を見た。

「隆子が撃たれた。アンタらはここで待て」

それだけ言うと、美鈴は非常口から飛び出し、非常階段を一気に駆け下りた。

\* \* \*

「隆子ー！」

美鈴が叫んだ。

隆子は、食堂ホールの建物西側の陰に、倒れていた。

駆け寄った美鈴は、仰向けで地面に倒れていた隆子のそばにひざまずき、抱き起こした。

暗がりの中だったため最初は分からなかったが、抱き起こした彼女の右胸からは、大量の血が溢れ出ていた。

「隆子！ しっかりしろ！」

美鈴は、彼女の耳元で怒鳴った。

「み、すず……」

隆子は、弱々しい声で、つぶやいた。

「隆子、傷口を自分の手でしっかりと押さえな」

そう言って美鈴は、隆子の両手をとって、彼女の右胸の傷口に当てた。

「急所は外れてるから、出血さえ止めることができれば、この程度の怪我……」

美鈴の言葉を遮り、隆子がつぶやいた。

「ごめん、美鈴。アンタの四四マグナム、取られちゃった……」

「そんなこと、気にするな」

答えながら美鈴は、暗がりの中で、隆子の背中を右手で探った。

背中からも、大量の血が溢れ出ていた。出血量からすると、三十八口径以上の大口径の拳銃で、至近距離から撃たれたようだった。

傷口を手で押さえながら、美鈴は、ゆっくりと隆子の体を地面に横たえた。手当をするまでの間は、傷口が地面に接していたほうが、出血量を多少は押さえられるからだ。

「弾丸は貫通している。血さえ止まれば、大丈夫だ。しっかりしな！」

そう励ましながら、美鈴は携帯電話で里沙を呼び出した。

「里沙！ 隆子が出血している。今すぐ保健室へ行つて、包帯とガーゼを持って来てくれ！」

美鈴が、繋がったままの携帯電話を地面に置くと、隆子が口を開いた。

「ごめんな、美鈴。アタシ、何の役にも立たなくて……」

「何言ってるんだよ。そんなこと、気にするなよ」

「アタシ、ホント、ダメな女だよな……」

「そんなことないよ……」

「アタシ、何やつても、あともう一步というところで、全部パーになっちまう。柔道の時もそうだったし……。今回だって、せつかく、チャンスが巡ってきたのに……」

「チャンスなんて、またすぐに巡ってくるよ。いいから、今はムリにしゃべるな」

「アタシ……、結局、何一つ親孝行ができなかった……」

隆子の言葉が、すすり泣きに変わった。

「親孝行なんて、これからいくらでもすればいい」

「アタシは、ダメな娘だよ。母さんが一人で、苦労して育ててくれたっていうのに、アタシは母さんに、何もしてやれずに終わっちゃうなんて……」

「もうしゃべるな。傷口をしつかり押さえな！」

そう言いながら、美鈴は自分の両手を、隆子の両手の上に重ねて力を入れた。手だけで、圧迫止血を試みようと考えたのだ。

美鈴は、地面に置いたままの携帯電話に向かって、怒鳴った。

「里沙！ 早く包帯もつて来い！」

「美鈴……、頼みがある……」

か細い隆子の声は、途切れ途切れで、その上、震えていた。

「何？」

美鈴は、自分の耳を隆子の口元に近づけた。

「こんなこと……、頼めた義理じゃないけど……、アタシの取り分の七〇〇万円、アタシの母さんに、渡してくれないか……」

「ああ、分かったよ。だけど、渡すのは自分で渡しなよ。怪我が治ってからね」

「あ、ありがとう……、み、すす……、アンタに出会えて、ホント、良かったよ……」

「ああ。アタシもアンタと出会えて良かったよ。だから、このくらいの怪我なんかには、負けるんじゃないよ。第一、アンタは、都立高生最強の女なんだろ。だったら、このくらいの怪我、たいしたことないはずだよ。急所は外れてるし、出血さえ止まれば、すぐに良くなる。アタシは、包帯巻くの得意なんだ。アタシの母さんは、昔看護婦だったからね……」

隆子が、深く息を吐いた。彼女の口元が、一瞬、ほころんだような気がした。

そして、彼女の息が、止まった。

「隆子、おい、しっかりしなよ！ アンタ、都立高生最強の女なんだろ！ このくらいの怪我で死ぬなよ！ アタシ達、ダチだろ！ ダチなら、勝手に一人で先に死ぬんじゃないよ！」

そう叫びながら隆子の体を揺ると、彼女の両腕が、力なく、ダラリと両脇に垂れた。

慌てて美鈴は、隆子の左胸に、自分の耳を当てた。

心音は、聞こえなかった。

美鈴は、左の手のひらを彼女の心臓の上に当て、その上から、右の拳を叩きつけた。

二度、三度、四度、五度。

心臓が止まった時に行く救命処置だ。

再び、隆子の左胸に、耳を当てた。

だが、彼女の心音は、全く聞こえなかった。

「たかこー！」

大声で叫んだ。

「美鈴！」

背後で、悲痛な声で呼ぶのが聞こえた。

振り返ると、百合花が立っていた。包帯とガーゼを、両手に持っていた。

月明かりに照らされた百合花の表情は、大きく歪んでいた。無言のまま百合花を見つめた美鈴の顔も、大きく歪んでいた。深い悲しみの感情で。

「誰に……、ヤラれたの？」

百合花が、美鈴に尋ねた。

「たぶん、李秀英か、その仲間だよ。いずれにしろ、アタシは許さない。絶対に」

美鈴がそう答えると、百合花は小さくうなずいた。

「私も、許さないわ。仲間を殺されたんだからね……」

その百合花の言葉に、美鈴もうなずいた。

「そうだね。ダチをヤラれて、黙ってるわけにはいかない。絶対に、<sup>かたき</sup>仇を討たなきゃ」

「そうだね。仇討ちをしなくちゃね」

「隆子が、最後に言ってた。自分の取り分七〇〇万円を、母親に渡してくれて」

百合花は、うなずきながら答えた。

「仲間との約束は、守らなくちゃね」

その百合花の言葉に、美鈴も、黙ってうなずいた。

永遠の眠りについた隆子の両まぶたを、美鈴は、手のひらで優しく撫でるようにして、閉じた。

美鈴は、無言で立ち上がった。

百合花が尋ねた。

「隆子を……、このあと、どうするの？」

「残念だけど、このままここに置いておく。しばらくしたら、警備員が救急車を呼んで、病院に運んでくれるよ」

「そうだね……」

小声でそう答えた百合花の表情は、とても悲しそうだった。



## 第十章「一期一会で即席カップル!？」

第十章「一期一会で即席カップル!？」

美鈴と百合花は、東校舎の音楽室に戻った。里沙が、一足先に戻っていた。

暗い表情で、百合花が里沙に言った。

「隆子が……、亡くなった……わ……」

「そう」

里沙の答え方は、あまりにも素っ気なかった。

「何よ。その言い方」

百合花が、里沙に突っかった。

「この仕事に、犠牲はつきものよ」

その里沙の言葉に、百合花は美しい顔を怒りで歪め、さらに喰ってかかった。

「犠牲、って……、あなた、仲間の命を、なんだと思ってるの？」

「仲間ですって？」

今度は、里沙の表情が一変した。

「カネに釣られただけの女が、仲間ですって？ わたしは二年間も命がけで戦ってきたのよ。二年間も！ 何度も死ぬかと思っただとがあつた。だけどそれでも続けたのは、お金のためじゃない。正義のためよ！ それなのに、カネのために戦う女をわたしと一緒にして、仲間ですって？ わたしをそこら辺の守銭奴のゴロツキと一緒ににしないでよ！」

里沙の言葉は、終いには、叫ぶような言い方になっていた。

「な、なによ！ そんなふうには言わなくつてもいいでしょ……、ねえ」

里沙の剣幕に押された百合花は、美鈴に同意を求めた。

美鈴は、静かに口を開いた。

「里沙。隆子と約束した。隆子の取り分七〇〇万円を、彼女の母親に渡すって」

「何ですって!?!」

ヒステリックに里沙が叫んだ。

「何もしなかつたくせに、カネだけは払えっていうの?」

その里沙の言葉に、百合花が言い返した。

「あら、あなたは正義のために戦ってるんでしょ。それなら、隆子のママにお金を渡したっていいじゃない」

苦虫を噛み潰したような表情で、里沙は百合花をにらみつけたあと、話を逸らした。

「美鈴、あなたの戦利品、持ってきてあげたわよ」

そう言っただけで里沙は、机の上のビニール袋をあごで示した。

「ありがとう」

「ところで美鈴、このアタッシュケース、どうやって開ける?」

「どれ、見せてみな」

アタッシュケースの鍵は、ダイヤルロック式だった。

美鈴は、ダイヤルロックに右耳を近づけ、ダイヤルを端から順に一つずつ、ゆっくりと回し始めた。

「何か聞こえるの?」

不思議そうな顔で、百合花が、尋ねた。

「安物は、音がするんだ」

「開きそう?」

里沙のその質問に、美鈴が答えた。

「ダイヤルが、三つしかないからね」

三分もしないうちに、ダイヤルロックは外れ、アタッシュケースが開いた。

中にぎっしりと詰まっていたのは、白い粉の入ったビニールパックだった。

「何これ?」

百合花が、美鈴に尋ねた。

「バカね。ヤクに決まってるでしょ」

間髪を入れず、里沙が答えた。

「そんなのは分かってるわよ。どんな麻薬か聞いてんのよ」

美鈴は、二人の言い争いに終止符を打つかのように、大きな音を立ててアタツシユケースを閉めた。そして、ダイヤルを適当に回した。

「ちょっと、何やってるのよ。せっかく開けたのに……」

その里沙の文句を無視して、美鈴が口を開いた。

「ますます悪い予感がしてきたよ。このシャブは、五〇〇〇万円分はある。どんなマフィアだろうと、これだけのシャブをパクられて、黙ってるわけがないよ」

「確かに、そうね……」

里沙は眉間にしわを寄せ、腕を組んだ。

美鈴は、自分の携帯電話を取り出し、片手で操作し始めた。

「何やってるの？」

百合花の質問に、美鈴は、携帯電話の画面を見つめたまま、答えた。

「警視庁の懸賞金付き指名手配者データベースに、アクセスしてるんだよ」

そのまま、数分が過ぎた。

退屈したのか、百合花が、美鈴の携帯電話の画面を、のぞき込んだ。ちょうどその時、美鈴が叫んだ。

「あつた！」

里沙も、美鈴の携帯電話をのぞき込んだ。

「アタツシユケースを持っていた女は、ペク・スヨン、二十八歳。古久保周辺を根城とするコリアン・マフィアの女ボス、ペク・セウンの妹。ペク・セウンは三十三歳。一九九〇年代の末頃から、北朝鮮製覚醒剤の小売りを、女子高生相手に始めたらしい。つまり、女子高生ギャングのはしり、ってことだね」

「ペク・セウンなんて、聞いたことないわね」

里沙が、拍子抜けしたように言った。

「あの辺りは、多いからね。コリアン・マフィアが。だけど、グループの構成員は、推定で、五〇名以上だってよ」

美鈴が、データベースを見ながら、答えた。

「五〇名？ データベースにそうあるなら、その二倍くらいは、いるかもね。どうせ、不法入国者の分はカウントしてないんだから」  
里沙が、冷ややかに言った。

「そうだね……」

そう答えた時、手にしていた美鈴の携帯電話が、振動した。

表示された電話番号は、サトルのものだった。

電話に出た。

「サトル？ 実は、隆子が……」

「あゝら、違うわよ」

少しかすれた、女の声だった。

「アンタ誰だ？」

怒気を込めた口調で、美鈴が尋ねた。

里沙と百合花にも、緊張が走った。

「李秀英よ。アンタのかわいい彼氏の身柄は、アタシが預かってるわよ」

「サトルを、人質に取ったのか？」

その美鈴の言葉に、里沙と百合花の表情が、一気に険しくなった。二人は、美鈴に頬を寄せるようにして、会話に耳をそばだてた。

「アタシの五〇〇〇万円分の覚醒剤は、アタシのために、手に入れてくれた？」

ククツと、電話の向こうで、李秀英が笑った。

「ああ、今ここにあるよ」

美鈴の口調にこもった怒気が、さらに強くなった。

「それじゃあ、アンタの彼氏とアタシのシャブとを、交換しましよ」

「サトルを、電話に出しなよ」

「いいわよ。まだ殺してないから」

電話の向こうで話し声がしたあと、サトルが出た。

「ごめん、へましちゃって……」

「いいよ。それより、怪我はない？」

「今のところはね。ビルの屋上でさ、突然、大勢に囲まれちゃつてさ、それで、多勢に無勢で、捕まっちゃって、めんぼく面目ない……」

「別にいいよ。アンタのことは、必ず助ける」

「あ、ありがとう……、ボク、命が助かったら、君のために、何でもするよ」

「気にするなよ」

「美鈴、愛してる……」

そこで、サトルから李秀英が電話を奪った。

「明日の夜、交換よ。時間と場所は、明日になってから連絡するわ」

「待てよ。シャブは五〇〇〇万円と、サトルはあんたの妹と交換だよ」

「リーベシゲイズ日本鬼子！」

李秀英が、電話の向こうで罵った。

「アンタらはアタシをバカだと思ってるの？ 李美姫の遺体は、とつくに回収したわ。よくもアタシの可愛い妹の美しい顔を、メチヤクチャに潰してくれたわね！ アンタらは全員今すぐ皆殺しにしたいところだけど、ここはビジネスに徹して、取引を優先することにしたの。ただね、妹の復讐は、必ずするから、覚悟してなさい！」

「遺体がどこにあるか、よく分かったね」

「簡単なことよ。風紀委員が負傷者を入院させる場所といたら、都立病院しかない。だから行って調べてみたのよ。今日入院した都立高の女生徒は、一名しかいなかった。その女に会ってみたら、妹ではなく、張紫明だった。あの裏切り者の女は、すぐにペラペラと全部話してくれたわ。だから、苦しませずに、ひと思いに殺してあ

げた。だけど美鈴、アンタは、地獄の苦しみを味あわせながら、殺してあげる」

美鈴は、李秀英の激しい憎悪のこもった言葉を無視し、要求を突きつけた。

「サトルと五〇〇〇万円の両方を持つてきな。そうじゃなきゃ、シャブは渡さないよ」

一瞬の沈黙のあと、李秀英が、かすれた声に怒りを滲<sup>にじ</sup>ませて尋ねた。

「何言つてんだい？ アンタは」

「サトルに、五〇〇〇万円分の価値はない。だから、五〇〇〇万円の現金も用意しな」

「アンタの可愛い恋人なんだろ」

「現金がなけりゃ、他の仲間が納得しない」

「仲間はアンタが説得しな」

「ダメだ。できないし、するつもりもない」

「そんなこと言つてると、アンタの彼氏が死んじゃうよ」

ククツと、電話の向こうで、押し殺した笑い声が聞こえた。

「アタシ達は、アンタらとは違う。仲間同士で一度決めたことは、覆すことはできないんだよ」

今度は、歯ぎしりをする音が、電話の向こうから聞こえた。

「それじゃあ、特別に、男に一〇〇〇万円をつけてやるよ」

「ダメだ。五〇〇〇万円だ」

「そんなこと言つてると、マジでアンタの男を殺すよ！」

「やってみるよ。アンタはシャブを入手できなくなるよ」

「マジで殺すぞ！」

李秀英の口調が、激しさを増した。

「アタシは日本人だ。アンタ達と違って、仲間のために、自分を犠牲にするのには、慣れている。仲間との約束を守るためなら、自分の恋だの愛だの何て、いくらでも犠牲にできるよ」

再び、歯ぎしりをする音が、電話の向こうから聞こえた。

「分かった。五〇〇万円、用意してやるよ。明日、アタシからの電話を待つてな……」

すかさず美鈴は、李秀英の言葉を遮った。

「ダメだ。連絡はアタシがアンタにする。そのサトルのケータイにね」

そう言い終わるや否や、美鈴は電話を切った。

「やったわね。主導権を奪い返した」

里沙が、感心した顔で、美鈴に声をかけた。

美鈴は、携帯電話の電源を切った。李秀英が再びかけてこれないようじ。

「電源まで切っちゃうの？」

驚いた顔で、百合花が尋ねた。

「ああ。これで、完全にこっちのペースになる」

「でも、サトルってコ、美鈴の彼氏なんですよ……」

「違うよ。今日逢ったばかりだよ。だけどサトルは、李秀英にそう思わせないと、自分の命が危ないって、思ったんだろっね。だから、アタシの彼氏の振りをした」

「じゃあ、なんで美鈴は、サトルを取り返そうと、必死に交渉したの？」

その百合花の質問に、里沙がすかさず言葉を挟んだ。

「そうよ。あんな男、そのまま見捨てちゃえばよかったじゃない」

「それはできないよ。アタシ達の仲間なんだから」

「今日逢ったばかりよ」

里沙が、意地悪く言った。

「一期一会の縁、ってやつさ」

その美鈴の言葉に、百合花が眉間にしわを寄せて、尋ねた。

「イチゴ……のエン？」

「たった一瞬の出会いであっても、それを大切にするっていうことわ」

「一瞬の出会いなのに、大切に……」

「それが、日本の伝統だからね」

その美鈴の答えに、百合花は、意味を完全には理解できていないようだったが、尊敬のまなざしで、美鈴を見つめた。

里沙が不満げな顔で、口を開いた。

「で、どうするの、美鈴？ あの李秀英が、小細工なしに、おとなしく取引するとは思えないわ。こちらも何か作戦を立てておかないとね」

「そうだね」

「で、何か良いアイデアはある？」

美鈴は、里沙と百合花の顔を交互に眺めてから、肩をすくめた。

「とりあえず今夜は、もう寝よう」

「こんな時に寝るの？」

百合花が、驚きの声を上げた。

「ああ、そうだよ。徹夜じゃ、ろくなアイデアも浮かばないし、ガンファイトの時だって、体が思うように動かないからね」

美鈴のその言葉に、里沙が続けた。

「度胸のある人間は、どんな時でも寝れるし、ご飯も食べられる。で、そういう度胸のある人間だけが、生き残れる。この世界ではね」

「わ、わたしだって、寝る度胸くらいあるわよ」

百合花は、里沙をにらみつけながら答えた。

「じゃあ、保健室から、毛布を持って来ようか」

美鈴のその言葉で、三人は音楽室を出て、保健室へと向かった。

\* \* \*

保健室には、余っている毛布とシーツは、それぞれ二枚ずつしかなかった。

音楽室に戻ってきた三人は、とりあえず、椅子に腰掛けた。

百合花が、二人に尋ねた。

「二枚ずつしかないけど……、どうする？」

「二人で、一枚の毛布とシーツを使えばいい」

美鈴が、即答した。

既に、毛布とシーツを一枚ずつ手にしている里沙は、美鈴と百合花を冷ややかに眺めながら、口を開いた。

「三人で四枚あるわけよ」

「まだ四月だから。シーツだけのコは、風邪を引いちゃうかも知れない」

その美鈴の意見に、百合花が同意しつつ、尋ねた。

「そうね。少し肌寒くなってきたものね。だけど、じゃあ、どうする？」

「二人で、共用すればいい」

美鈴のその答えに、百合花は少し首をかしげながら、尋ねた。

「キョーヨー？」

「つまり、毛布とシーツをワンセットとして、それを二人で一緒に使うってことさ」

そう美鈴が答えたとなん、里沙が甲高い声で文句を言い始めた。

「イヤよ、そんなの！ 汚<sup>けが</sup>らしい！ 女同士で一つの毛布で寝るなんて！ 変態でもあるまいし！」

「そこまで言うほどのことじゃないだろ」

不愉快そうな顔で、美鈴が抗議した。

それに、百合花が加勢に加わった。

「そうよ。一緒に寝たって、変態なんかじゃないわよ。海浜学校の時、わたしも、親友と一つの毛布で寝たことあるけど、わたしも彼女もレズなんかじゃないわよ」

「だったら、あなた達二人で、乳繰り合って寝なさいよ！ 私の毛布は貸さないわよ！」

里沙はそう言いながら、毛布を丸めて、胸に抱え込んだ。

「じゃあ、それでいいよ。百合花はどう？」

「ええ。それでいいわよ、美鈴」

その二人の会話を目にした里沙は、視線を逸らし、明後日の方角

を見ながら、小声で吐き捨てた。

「変態女達め」

そそくさと里沙は、椅子を四つほど並べ、その上にシーツを敷いてから、美鈴達に背を向けて、毛布にくるまった。

美鈴は、壁際に机をいくつか並べた。その机の上に、百合花がシーツを敷こうとしたが、美鈴がそれを、いったん押しとどめた。

「シーツは二つ折りにしたほうがいいよ。一枚じゃ体が痛くなるからね」

二つ折りにしたシーツを敷いた上に、美鈴は横になった。

「壁側のほうが、少し暖かいよ」

そう言つて美鈴は、壁側を百合花に譲つた。

百合花は、おとなしく美鈴に従つた。

二人は、お互いに逆方向を向き、背中をくつつけて横向きに寝た。両膝を抱えてから、毛布を上には掛けた。

「こういう寝方が、あるんだ」

百合花が少しばかり感心したふうに言うと、それに美鈴が答えた。

「もつと寒くなつたら、今度は背中じゃなくて、胸やおなかをく

つつけて、抱き合つて寝るんだよ。人間の体は、意外と温かいからね」

「そうなんだ……」

里沙が、声をかけてきた。

「ちよつと！ 電気くらい消しなさいよ。そっちのほうが、スイツチに近いんだから」

「アタシは明るくても寝れるよ」

美鈴がそう答えると、里沙は舌打ちしながら立ち上がった。そして、音楽室の電灯を消した。

室内が、暗闇に、包まれた。

静寂が、数分ほど続いた。

小声で百合花が、ささやいてきた。

「美鈴、まだ起きてる？」

「うん」

美鈴も、小声で答えた。

「私ね、こうやってお友達と一緒に寝るの、小学五年の海浜学校以来なの」

「そうなんだ」

「美鈴は？」

「アタシは……、前の学校でもあったよ。冬は寒いからね」

「いいなあ。美鈴は、たくさん友達がいて」

「そんなことないよ。百合花だって、友達はたくさんいるでしょ」

「わたし……。百合花にはね、小五の時以来、親友って、いないの」

百合花は、まるで幼い子供のような、甘えた口調になっていた。

「そうなんだ」

「実はね。小五の時の親友にはね、小六になった時に、嫌われちゃったの。百合花は、何も悪いことしてなかったんだけど、クラス中のみんなから、嫌われて、無視されちゃったの」

「それは……、辛かったね」

「そうなのよ！」

百合花の声が、少しだけ大きくなった。それに、寝返りを打つ気配を感じた。

「その親友のこの名前は、ヒトミっていうんだけど、百合花のパパがね、ヒトミのパパの会社を乗っ取っちゃったの」

「乗っ取る？」

「そうなの。敵対的買収ってやつよ。ビジネスの世界はヤルかヤラレルかだから、百合花のパパだって、ちょっと油断しちゃったらヤラレちゃうかも知れないのよ。だからパパのやったことは、本当は悪くはないんだけど、その敵対的買収のせいで、ヒトミのパパは、会社社長をクビになっちゃったの。そしたらさ、ヒトミのパパ、自殺しちゃったの」

美鈴は、思わず絶句した。暫しの沈黙が流れたあと、ようやく口

を開いた。

「大変だったね」

「そうなのよ！ クラス中のみんなが、私の陰口をたたくの。百合花のパパが、ヒトミのパパを殺したって。それ以来、ヒトミは私と口をきいてくれなくなっちゃったの。それに、クラス中の大部分の「も」

「で、百合花は、どうしたの？」

「百合花は……、仲直りしたかったんだけど、がんばったのに、結局、できなくて……。だから、転校したの」

「そうなんだ」

「だけどね、転校した別の私立校でも、同じことが起きちゃった。百合花のパパが、クラスメイトの会社に、敵対的買収を仕掛けちゃったの。その時は、そのコの父親は自殺はしなかったんだけど……。また、クラス中から嫌われちゃって……。それで中学の時にも、また転校したの」

いつの間にか百合花は、美鈴の背中に顔を押しつけ、すすり泣いていた。

「公立高校なら、社長の子供なんていないだろうし、だから、今度は嫌われること何てないだろうと思っただけで、だけど、前の都立高校も、今の高校も、みんな、百合花のことを嫌ってて、とっても冷たいの。百合花はモデルの世界を少し経験したから、モデルの世界では、ちょっとでも油断すると、足を引っ張られて潰されちゃうから、そういう世界で少し経験を積んだから、今は弱みを見せずに強気で生きてるけど……」

「けど……？」

美鈴は、百合花の次の言葉を促した。

「百合花、ホントはね……、友達が欲しいの」

「アタシ達、もう友達だよ」

美鈴は、体の向きを変えた。上を向き、真っ暗な闇を眺めながら、左手で百合花の頭を撫でた。

「わたし達、今日出会ったばかりだけどさ、一期一会ってやつでさ、親友になれる？」

「ああ。なれるよ」

「百合花ね、ちよっと寒くなっちゃった。もっと、くつつかない？」

「そうだね」

美鈴は、百合花の方を向いた。百合花は、額を、美鈴の胸にくつつけてきた。美鈴は百合花の背中に手を回した。百合花の体は、思っていた以上に、細かった。

「小五の時も、こうやってくつついて、親友と一緒に寝たんだ。

あの時は、寒くはなかったけど……。あの時は、幸せだった……」

「これからだって、幸せはくるよ」

「そうよね……。自分を信じて、努力してれば、幸せは必ず来るよね」

「そうだよ」

「百合花の夢はね、三田塾大学に入学して、カリスマ女子大生モデルになって、グラビア・アイドルになって、それから、みんなから好かれて、そして、みんなに元気や幸せを分けられるような、そんなカリスマ芸能人になるのが、夢なの。小六の時、百合花、毎日がホントに辛くて、もうこれ以上生きられない、って思った時にね、テレビで見たの。笑顔の素敵なアイドル歌手のお姉さんが、こう歌ってたの。負けないで。一人じゃないよ。わたしがいるから。きみのそばにいるから、って。その歌を聴くことができたから、百合花、負けずにすんだの。それ以来、百合花ね、大人になったらカリスマ芸能人になって、苦しんで、辛い思いしてる人達を、元気にしたいって、そう思い続けてきたの」

美鈴は、百合花の頭を優しく撫でながら、相槌を打った。

「きつとなれるよ」

百合花が、嬉しそうに微笑んだ。

「そうよね。信じて努力してれば、夢はきつとかなうわよね。百

合花はね、歌が下手だから、歌手はちょっときついかなって思うし、頭悪いから、トークで面白いことも話せないけど、モデルやグラビア・アイドルなら、充分いけると思うの。だから、プロポーズン作りのために、毎日ジムで汗流してるし……」

そこまで言ったところで、百合花は突然、話を美鈴に振った。

「ねえ、美鈴。あなたの夢は？」

美鈴は、答えに詰まった。しばらくの沈黙の後に、口を開いた。

「アタシの夢は……、自分の娘をキチンと育てて、幸せにするのとかな」

「ええっ？ 美鈴、もう娘がいるの？」

「違うよ、まだだよ。そのうち、って話さ」

「そっか、そうだよ。それでさ、美鈴は、大学とか、どこ志望なの？」

再び美鈴は、沈黙した。美鈴の母は、死の間際に、大学へ行けと言った。だが、どの大学とは、言わなかった。母の考えでは、初めて愛した男と結婚できずに未婚の母となったことも、その後の人生の転落も、不幸な末路も、全て、大学に行かなかったからだと、思っているようだった。大学さえ行っていれば、一生、幸せな人生を送ることができたはずだと、思っている節があつた。今の美鈴自身は、そうは思っていない。だが、母の遺言である以上、大学に進学し、卒業しようとは思っていた。しかし、どの大学に進学するかまでは、考えたことがなかった。

「分からない。大学には行きたいけど……」

「まだ、三年生になったばかりだものね。そういうコは多いわ。で、どんな分野を勉強したいの？」

美鈴は、しばらく考えてから、口を開いた。

「アタシの母さんは、看護婦だったんだ。だから、看護関係がいかな」

「どうせなら、医学部に行きなさいよ」

「えっ？」

「だってさ、美鈴って、頭いいじゃない。うちの高校への転校だって、通常の転入試験を受けて、受かったんでしょ。だから美鈴だったら、医学部も受かるわよ」

「そうかなあ。この高校は、今年、定員割れだったから、都立高校の中で、一番倍率が低かったんだ」

「そうだったんだ。去年、乱射事件があつて、たくさん死んだからね。そういえば、あれ以来、転校してうちから出て行く生徒も、結構いたわね。だけど、まだ一年あるし、美鈴なら、努力すれば受かるわよ。美鈴なら、医者の仕事に、向いてるわよ。絶対に」

百合花は、自信たっぷりに断言した。

「だけどさ、医学部って、ものすごく学費が高いつて聞いたことがあるよ」

「それでもないわよ。公立だったら、すごく安いわよ」

「どのくらい？」

「年間の授業料が、五〇万円のところもあるって。進路指導の先生が言ってたから、間違いないわ」

美鈴にとって、五〇万円は、大金だった。しかし、大学の授業料としては、格安だとも思った。

「それなら、いいね。だけどさ、そんなに安いとさ、倍率とかすごく高いでしょ」

「普通はそうだけど、一つだけ、定員割れのところがあるのよ」「そうなの？」

「そうなの。川崎市立大学の医学部。昨年の夏に校内で乱射事件が起きちゃってね。それで、今年は定員を二割も切っちゃったのよ。私の母方のほうの従姉妹がね、頭悪いのに、どうしても医学部に行きたくてね、こないだね、倍率が低いから、川崎市立大学を受けるって言って、両親が猛反対して、それで親子で大げんかしたんだって」

「そうなんだ」

「美鈴は強いから、乱射事件の一つや二つ、平気でしょ」

その時、里沙が怒鳴った。

「アンタ達うるさいわね！　いつまでコソコソくっちやべってるのよ！　これじゃあ寝られないじゃない！」

「分かったよ！　もう寝るよ」

美鈴が、答えた。

「じゃあ、百合花、もう寝ようね」

「うん。私達、もう親友よね」

百合花は、楽しそうな声で、尋ねた。

「うん。そうだよ」

美鈴は、暗闇の中で、微笑んだ。

百合花も、暗闇の中で微笑んだ。

二人は、抱き合って眠りに落ちた。

## 第十章・終

## 第十一章「暗闇でドッキリ!？」

### 第十一章「暗闇でドッキリ!？」

誰かが、背中を揺すっていた。美鈴は眠い目をこすりながら、振り返った。

里沙だった。

「美鈴、電話がかかってきたわよ」

「誰から？」

「分からない」

「何それ？」

「ペク・スヨンの携帯電話にかかってきたの」

美鈴は思わず飛び起き、立ち上がった。

「貸して！」

「もう切れてるわよ。だけど、こちらからかけ直してみる？ それとも、またかかってくるのを待つ？」

「ちよつと見せて」

美鈴は、里沙からペク・スヨンの携帯電話を受け取った。

電話をかけてきた相手は、カタカナで「又ナ」と表記されていた。

「又ナって誰かな？」

その美鈴の質問に、里沙は肩をすくめて答えた。

「私に分かるわけじゃないじゃない。そんな変な名前、男か、女かも分からないわよ」

「女？ あっ！ 思い出した」

美鈴の声が、少しばかり大きくなった。

「何よ？」

「又ナって、姉のことだよ、確か」

「美鈴って、ハングルを勉強したことあるの？」

「ないよ。だけど、昔、近くにいたからね。夕子の悪いチンピラ

がね」

里沙は暗闇の中で、腕を組んだ。

「ということは、ボスのペク・セウンからの電話ってことね。で、どうする?」

「一つアイディアがある。ペク・セウンと李秀英を戦わせる」

「なるほどね。どちらが勝っても、戦力が大幅にダウンするでしょうね。で、具体的には?」

美鈴は、右手をあごに当て、唸った。

「李秀英が、ペク・スヨン を殺したことにする。もともとペク・スヨンは、李秀英と取引するつもりだったのだからうしね。なら、ペク・スヨン殺しが李秀英だというのは、分かりやすい話だと思わない?」

「かもね。じゃあ、美鈴、かけてみてよ?」

「アタシが?」

「だって、風紀委員がマフィアに告げ口するのは、おかしいですよ。その点美鈴なら、たまたま高校で寝ていたら銃撃戦を目撃した、ってことにできるわよ」

美鈴は、再び唸った。

「早くかけたら」

「もうちよつと、考えさせてよ。細かいところまでね」

そう答えた直後、ペク・スヨンの携帯電話が、振動した。

里沙が、あごで美鈴を促した。

美鈴は深呼吸をしてから、電話に出た。

「もしもし」

その美鈴の言葉に、電話の向こうの人物が、息を飲むのが分かった。

「アンタ誰? 李秀英?」

その中年女の声には、強い怒気がこもっていた。

「いや、違うよ」

「じゃあ、誰よ」

「通りすがりの女子高生だよ」

「なんでアタシの妹のケータイに出てるのよ？」

「アンタの妹だったんだ……」

「早く妹を出しな」

「お気の毒だね……」

「まさか……」

電話の向こうで、ペク・セウンが絶句した。

「アンタの妹は、李秀英の待ち伏せにあつて、殺されたよ。仲間も全員ね」

再びペク・セウンが、電話の向こうで息を飲むのが分かった。

「それで、アンタは何者だい？」

「この高校の生徒で、少しばかり、李秀英に恨みを持っている。

アンタが李秀英に復讐する気なら、手を貸してもいいよ」

「復讐は、もちろんするに決まってる。あんなガキに、なめられ  
たままじゃ終わらないよ！」

「李秀英は、明日の夜、都立古宿高校にやって来るはずだよ。もしアンタがヤル気なら、アタシが事前に、校内へアンタ達を手引きしてもいい。そうすれば、今度はアンタ達が、李秀英を待ち伏せできるよ」

しばらくの間、沈黙が流れた。

「あんた、日本人かい？」

「そうだよ」

「名前は？」

「美鈴」

「分かった。アンタと手を組もう。美鈴、それでアンタが求める見返りは？」

「二つあるよ。一つは、李秀英の死体。風紀委員に渡せば、カネをもらえるからね。もう一つは、サトルっていう男の子。アタシが唾ついていたのに、李秀英が、カネとヤクでたらし込んだんだよ。その男の子は、殺さないでね。アタシのお気に入りの美少年なんだか

ら

またしばらく、沈黙が流れた。電話の向こうで、慎重に考えているのだろう。

六〇秒ほどすぎて、ペク・セウンが、ようやく口を開いた。

「分かった。それで、李秀英は何時に来る？」

「それはまだ、分からない。情報が入り次第、このケータイでア  
ンタに連絡するよ」

「分かった」

電話が、切れた。

「意外と、うまくいったわね」

里沙が、少しばかり感心した顔で、美鈴に声をかけた。

「まあね。だけど、ああいった連中は危険だからね。こちらも、  
充分用心しないとね」

「で、私達は、具体的にはどうする？」

美鈴は、腕時計を見た。午前三時を、少し過ぎていた。百合花と  
のおしゃべりが終わったのが、二時少し前だった。まだ一時間しか、  
寝てなかったことになる。

「朝まで寝よう」

「そうね。なかなか寝付けそうにないけど」

「百合花は、熟睡してるよ」

「意外と度胸があるのか、それとも単にバカだから、何も心配せ  
ずに寝れるのか……」

「度胸があるんだよ」

口の悪い里沙の言葉を途中で遮り、美鈴が断言した。

「バカなのよ」

里沙が、意地悪く言った。

美鈴は、暗闇の中で肩をすくめたあと、再び百合花の毛布の中に  
潜り込んだ。

\* \* \*

百合花が目覚めた時、既に、美鈴も里沙も起きていた。音楽室のカーテンは閉められたままだったが、電灯は全部、点けられていた。美鈴は、黒い回転式拳銃リボルバーを分解していた。里沙は、軽機関銃の手入れをしていた。

「おはよう」

百合花が声をかけると、美鈴が微笑みながら答えた。

「おはよう」

里沙が、イヤミたっぷりと言った。

「もう九時よ」

百合花は、慌てて飛び起きた。

「授業が始まってるわ」

「音楽の授業が、一時間目になくて良かったね……」

その美鈴の言葉を遮り、里沙が百合花に言った。

「どうせあなたは、校内の見回りと称して、授業には出てないでしょ」

「半分くらいは出てるわよ。ところで、サトルの奪還計画って、どうする？ いいアイデアとか、浮かんだ？」

「計画は、できたよ」

分解したりリボルバーの部品を布で磨きながら、美鈴が答えた。

「どんな計画？」

「ペク・セウンと連絡が取れた。彼女達と李秀英とを戦わせる。

まず、ペク・セウン達を校内に手引きして、呼び出した李秀英を待ち伏せする。どちらが勝っても、戦力は大幅に低下するよ」

百合花は、感心した顔で美鈴を見た。

美鈴は視線を里沙に向け、尋ねた。

「ところで里沙、風紀委員の特権で、高校の警備員に、二回目の見回りを中止させることって、できる？」

軽機関銃の弾倉に二十二口径の弾丸を込めながら、里沙が聞き返した。

「なんで？」

「李秀英を呼び出す時間を、十一時に設定したい。そうすれば、二回目の見回りが、一〇時半までかかると思いこんでいるはずだから、李秀英は、まさか、数十名のコリアン・マフィアが、待ち伏せしているとは思わないだろうからね」

「なるほどね。それじゃあ、警備員のほうは説得してみるわ。麻薬取引の現場を押さえたい、って言えば、たぶん大丈夫よ」

「じゃあ、頼んだよ。で、問題なのは、予定通りに計画が進まなかった時なんだけど……」

美鈴は、里沙と百合花を近くに呼んで、小声で話し始めた。

「分かったわ」

美鈴が話し終わると、里沙は大きくうなずいた。

「わたしも」

百合花も大きくうなずいた。

「ところで、使う武器は、どうする？ 昨日作った爆弾は使う？」

その里沙の質問に、美鈴が答えた。

「爆弾の使用は、やめとこう。今度のように、しゃへいぶつ遮蔽物のない場所で使うと、仲間が巻き添えになるかも知れないからね。で、里沙は、その軽機、使えそう？」

「まあね。初めてだけど。弾丸は通常の二十二口径でいいみたいだし、銃の本体には、強化プラスチックを多用していて、かなり軽くて、扱いやすそうよ。で、美鈴は？」

「これも使おうかと思う」

美鈴は、戦利品の、脇の下につけるタイプのホルスターを、左右両脇につけてみた。その二つのホルスターに、組み立て終えた二コナンブを一丁ずつ納めた。

「美鈴、すごいわ。二丁拳銃じゃなくて、四丁拳銃ね」

百合花が、笑顔で褒めた。

美鈴は既に、両腰にも一つずつホルスターをつけており、十連発の二十二口径リボルバーを納めていた。

「百合花、実はね、美鈴はスカートの下にも、ホルスターをつけてるのよ」

里沙のその言葉に、百合花は驚いた顔をした。

「ホント？」

美鈴は黙って椅子から立ち上がり、スカートの両裾を少しだけ持ち上げた。黒いホルスターの下部が、少しだけ見えた。

「一緒に寝てたのに、気づかなかったわ」

「アメリカ製でしょ？ コルト？ それともスミス・アンド・ウエッソン？」

里沙の質問に、美鈴はスカートを元に戻しながら、視線を逸らして答えた。

「スミスだよ。二十二口径のほうもね。ところで……」

美鈴は、話を逸らした。

「百合花は、この拳銃、使ってみる？」

そう言って、一丁の黒い自動式拳銃オートマチックを渡した。

「重いわね。一キロ以上ありそう」

受け取った百合花は、その拳銃の重さに驚いた。

「金属製だからね。九ミリ弾使用の軍用銃。たぶん、コリア製だね」

「重いから、遠慮しとくわ。わたしのベレッタ最新モデルのほう  
が、軽くて扱いやすいから」

百合花はそう言いながら、軍用オートマチックを美鈴に返した。

「分かった。それじゃあ、とりあえず解散ということで。放課後、  
またここに集合だよ」

三人は解散し、荷物をまとめて音楽室を出た。ちょうどその時、  
一時間目の終了チャイムが鳴った。

\* \* \*

月明かりの中で、美鈴は、腕時計を見た。時計の針は、ちょうど

午後九時を指していた。校庭は、月明かりだけで、充分に明るかった。空を見上げると、満月だった。

三人は、その日一日、それぞれの役割を果たした。里沙は、警備員と話をつけた。美鈴は、午前中は百合花の校内の見回りについて行き、校内の隅々まで頭に入れた。正午には、食堂ホールへ行き、三人で昼食を取った。午後になつてから、美鈴は李秀英に電話をかけ、午後十一時に、サトルと現金五〇〇万円を持って、校庭に来るように告げた。続いて、ペク・セウンにも連絡を入れた。その後、百合花が得意科目の英語の授業に出席している間、美鈴は保健室に行つて、香織と無駄話をして時間を潰した。昔の同人小説の話で、盛り上がった。二〇世紀と二十一世紀の女子高生の間にある根本的な相違は何か、それは麻薬の有無である、という点で、意見が一致した。放課後には、再び音楽室に集合し、今夜の打ち合わせを充分にした。

体育館から、里沙と百合花が出てきた。

「美鈴、準備はいいわよ」

里沙が、引き締まった表情で言った。

「分かった。じゃあ、持ち場について」

百合花が、不安げな顔で、尋ねた。

「美鈴、ホントに一人で大丈夫？ わたしも一緒に……」

その百合花の言葉を、美鈴は途中で遮った。

「百合花には、重要な役割があるでしょ」

「うん。分かつてる。それで……、もう一回、練習してみる？」

今度は、里沙が口を挟んだ。

「もう三回もやったでしょ。あとは、あなたに度胸さえあれば、

本番でもうまくいくわ」

「百合花は、度胸があるから、大丈夫だよ」

美鈴が、すぐさまフォローを入れた。

「それじゃあ、二人とも、持ち場について。アタシは今から、電話をかけるから」

そう言って美鈴は、ペク・スヨンの携帯電話を取り出した。二人は、急いで体育館の中に入った。

美鈴は、電話をかけた。すぐに、ペク・セウンがでた。

「もしもし、ペク・セウン？ 今どこにいる？」

「高校のすぐ近くだよ」

「車で来てるんでしょ？ 近くに何台も車が停まってるよ、待ち伏せがばれてしまう。だから、一キロほど離れたところに車を停めて、そこから徒歩で来てよ。九時半に、正門を開けるから」

「分かった」

美鈴は、電話を切った。

\* \* \*

九時半になった。本来なら、警備員の二回目の見回りが始まる時間だ。校内で寝泊まりするホームレスの生徒達は、この時間帯になると、部室に閉じこもって外には出てこない。

美鈴は、正門の横にある通用門を開けた。

ペク・セウンは、痩せた背の高い女だった。髪は、肩まである派手な茶髪。もう四月だというのに、黒いロングコートを着ていた。

通用門の内側の脇に立ち、美鈴は、ペク・セウンを招き入れた。彼女のあとから、続々と、腰にガンベルトを巻いた女達が、入ってきた。美鈴は、相手に悟られないようにしつつ、心の中で秘かに人数を数えた。全部で、ちょうど六〇名だった。ペク・セウンを除いて。

「随分多いね。組員総出？ これなら、李秀英のグループの、二倍から三倍くらいになるだろうね」

そう言った美鈴を、ペク・セウンは、ジロリとにらみつけた。

「待ち伏せする場所は、どこ？」

「体育館の中だよ。李秀英が校庭に来たら、体育館の南側のドアを全部開けて、一気に飛び出す。これだけの人数がいたら、確実に

勝てるよ」

「体育館はどこ?」

「今から案内する。ついてきて」

美鈴は、先頭に立って、歩き出した。

校庭を縦断し、あらかじめ開けておいた、体育館の南側のスライド式ドアから、美鈴は土足のまま中に入った。体育館の中は、電灯が点いておらず、暗闇に包まれていた。北側と南側の天井付近には金属格子がついた窓が並んでいる。その格子は、ボールの衝突防止用だ。その窓からは、月明かりが微かに射し込んでいる。だが、ステージがある東側や、西側には窓はない。暗闇の中、美鈴は体育館の中央へ進んだ。

中央付近まで来たところで、美鈴は、振り返った。ペク・セウンの部下は、既に全員、体育館の中に入っていた。彼女と美鈴との間には、五メートルほどの距離しかなかった。

ペク・セウンが、口を開いた。

「随分、暗いね」

「しばらくすれば、目が慣れるよ」

美鈴がそう答えると、ペク・セウンは、南側のドアを閉めるように部下に命じた。

館内が、さらに暗くなった。

数十秒が、過ぎた。美鈴の目が、暗闇に慣れてきた。

ペク・セウンも目が慣れてきたらしく、口を開いた。

「ところで、アンタの待ち伏せ計画は、イマイチだね」

「そう?」

「だから、計画を変更することにした」

そう言うと同時に、ペク・セウンが、コリア語で号令をかけた。部下達が一斉に、拳銃を抜いた。

その六〇の銃口は、全て、美鈴に向けられた。

美鈴は、平静さを装い、尋ねた。

「で、アンタの新しい計画ってというのは、どんなものなの?」

ニタリと笑って、ペク・セウンが答えた。

「とつても良い計画さ。アンタと李秀英を、戦わせる」

「アタシは、たった一人だよ。それでどうして、二〇人以上も部下のいる李秀英と戦えるの？」

「だけどアンタは、凄腕の拳銃使いだそうじゃないか」

美鈴の表情が、険しくなった。

「誰から、そんなことを聞いたの？」

再び、ペク・セウンはニタリと笑った。暗闇の中で見るその笑みは、薄気味悪い代物しろものだった。

「李秀英さ」

美鈴は、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「あの女と、いつたい、いつ話したの？」

「アンタとの最初の電話のすぐあとさ。李秀英から電話がかかってきた。取引現場に、風紀委員とその仲間達が突入してきて、アタシの部下を全滅させて、アタシのヤクを奪った、と言っていた。そして、その薄汚いチョッパリ連中の中に、凄腕の拳銃使いが一人いた。その女が、アタシの妹を殺した。その女の名は、美鈴。つまり、アンタのことだ」

美鈴は、もう一度唾を飲み込んだ。それから、ゆっくりと口を開いた。

「李秀英なんかの言うことを、信じるの？」

「まさか。信じるわけないだろ。なぜなら、アタシは誰のことも信じない。アンタの話も、李秀英の話もな。アタシが信じるのは、カネだけさ。だが、李秀英は、言っていた。美鈴と風紀委員を殺して、アタシが自分のヤクを取り戻したら、もう一度、取引をやり直すつ、って。それで今夜、李秀英は現金五〇〇〇万円を持って来るそうさ。だから、アンタがおとなしくヤクを返して、アンタが李秀英と戦い、もしアンタが勝つたなら、アンタの命は助けてやってもいい」

ペク・セウンが話し終えるのを待って、美鈴が口を開いた。

「悪いけど、アタシもアンタらの口約束なんて、信じないよ。アタシが信じるのは、拳銃だけ。最初の予定通り、アンタが李秀英と戦いな。でないと、この場でアンタを殺すよ」

美鈴は、上体をわずかに前傾させながら、ペク・セウンをにらみつけた。

ペク・セウンは、みたび、気味の悪い笑みを浮かべた。

「拳銃を信じるって？ アタシの拳銃は六〇丁もある。けどアンタが身につけてる拳銃は、たったの四丁。しかも、まだホルスターから抜いてもいない。こっちは既に、全ての銃口をアンタに向けている」

「それが、どうしたっていうの？ この距離なら、絶対に外さないよ。アンタの心臓と眉間に、鉛弾をぶち込める。確実にね」

その美鈴の言葉を、ペク・セウンは鼻でせせら笑った。

「そんな強がったハツタリ、するだけ無駄だよ。アンタが拳銃を抜く前に、アンタは蜂の巣になる。アタシの部下の放った弾丸でね」

美鈴はペク・セウンを見据えながら、微かに首を左右に振った。  
「口で言っただけ分らないバカは、殺すしかないね。この拳銃は、抜かなくても撃てるんだよ」

その美鈴の言葉を耳にした途端、ペク・セウンの表情が、強張った。

美鈴が叫んだ。

「百合花！」

叫ぶと同時に、美鈴は垂直に腰を下へと沈ませながら、両手を、両腰の二十二口径一〇連発リボルバーの銃把にかけた。

その直後、強烈なスポットライトの光が、ペク・セウンの周辺を照らした。まぶしさのあまり、ペク・セウン達は一斉に、その光から顔を背けた。

美鈴は、リボルバーをホルスターから抜くことなく、引き金に人差し指をかけ、銃把を後方へ引きつつ下方に力を加えた。

ホルスターが、一三〇度ほど回転した。ホルスターに入ったまま

のリボルバーの銃口が、ペク・セウンに向けられた。美鈴は、そのまま二つの引き金を同時に絞った。

二十二口径の軽い銃声が、響いた。右のリボルバーの弾丸は、ペク・セウンの左胸に、左のリボルバーの弾丸は、顔面に、命中した。ペク・セウンの両脇にいた部下が、沈み込んだ美鈴に銃口を向け、発砲した。

だが既に、美鈴は、そこにはいなかった。

しゃがみ込んだ美鈴は、後方へ、床と水平に低く跳躍していた。跳びながら、美鈴はリボルバーをホルスターから抜き、発砲した。

正確な射撃で、その二名の頭部を撃ち抜き、射殺した。

美鈴の背中が、床に接地した。慣性の法則で、体が床を滑り始めた。そのまま滑りながら、美鈴は、引き金を引いた。続けざまに。

一度、二度、三度。

パリパリパリ、という軽機関銃の連射音が、聞こえた。南側の空中回廊から、里沙が銃撃を加え始めたのだ。里沙の位置は、ペク・セウンの部下達から見て、後方の頭上に位置する。

ペク・セウンの部下達が、恐慌に陥った。数十名の女達が、意味不明の言葉でわめきながら、四方八方に向けて、拳銃を乱射し始めた。

床の上を滑っていた美鈴の体が、止まった。美鈴はそのままの姿勢で、両手の拳銃の引き金を一度だけ引いたあと、背筋の力を使い、床に頭をつけて後転した。両足が接地すると、しゃがみ込んだ姿勢のまま、左右の拳銃の引き金を一度引き、再び、後方へ、床と水平に低く跳んだ。

跳びながら、また、引き金を引いた。背中が床に接地すると、滑りながら、引き金を引き続けた。

体育館の北側の空中回廊からも、銃撃音が聞こえ始めた。百合花だ。彼女はスポットライトを点けると同時に、敵の銃撃を避けるため、空中回廊を西方へと、十五メートル以上移動することになっていった。

美鈴の体が、止まった。弾切れとなった二十二口径一〇連発リボルバーを床に投げ捨て、後転した。足が接地した瞬間に、両脇のホルスターからニューナンプを抜いた。

軽機関銃の銃撃音が止まった。弾切れだ。

コリアン・マフィアの三分の二は、既に、床に倒れて血を流していた。まだ立ち続けている女達も、戦意など、もはや一欠片ひとかけらも残っていないかった。

ドア付近にいた女達が、南側のドアを開け始めた。

三十八口径のニューナンプが、火を噴いた。美鈴は立ち上がりながら、二丁の拳銃の引き金を、続けざまに引いた。ドアから逃げ出そうとした女達から順に、射殺した。

再び、軽機関銃の銃撃音が始まった。里沙が、予備弾倉に換えたのだ。

それから数秒の後、立ち続けているコリアンは、皆無となった。

美鈴が、怒鳴った。

「撃ち方かた、やめー！」

軽機関銃と百合花のベレッタの銃撃音が、止まった。

暗闇のあちらこちらから、死に損そこなつた女達の、もがき苦しむ声が聞こえた。

里沙が怒鳴った。

「生きてる奴が、まだたくさんいるわ！」

すぐさま美鈴が、怒鳴り返した。

「外に逃げたのが、三人いる！ 今からアタシが追いかける。アタシが体育館から出るまでは、発砲するな！」

美鈴は小走りで、死体や重傷者の間を駆け抜け、開け放たれた南側のドアから外に出た。

外に出るやいなや、体育館の中から、軽機関銃の銃撃音が、聞こえ始めた。

校庭は、月明かりで明るかった。全速力で走って逃げ出した三人の女達は、既に校庭の中ほどまでたどり着いていた。

戦闘の時、常に美鈴は、残弾数を計算しながら銃撃することにしてきた。五連発のニューナンプの残弾数は、左右共に一発ずつ。

左右の拳銃の、撃鉄を起こした。両方同時に、発砲した。

二人の女が、倒れた。だがすぐに、左側の女が、立ち上がった。

左手で撃つた標的だ。その女は、肩を負傷していた。ふらつく足取りで、よろめきながらも、再び走り始めた。

弾切れとなった二丁の拳銃を、美鈴は、地面に投げ捨てた。右膝を、胸に引きつけるようにして、蹴り上げた。銀色のリボルバーが、飛び出した。右手で銃把をつかむと同時に、発砲した。

肩を負傷していた女が、地面に倒れた。

最後の一人は、全速力で走り続けていた。校庭の中ほどを過ぎ、美鈴との距離は、六〇メートルはあった。

リボルバーの、撃鉄を起こした。右足を一步前に出し、右腕を真っ直ぐに伸ばした。慎重に、狙いをつけた。

引き金を、絞った。

三十八口径の銃声が、轟いた。

弾丸が、背後からその女の心臓を貫いた。

最後の一人は、地面に倒れたあと、もはや、ピクリとも動くことは、なかった。

気がつくと、体育館内でも、既に銃撃音は、やんでいた。

美鈴は、銀色のリボルバーを、いったんブーツに戻した。地面に投げ捨てた二丁のニューナンプを拾うと、回転弾倉を開け、中の空薬莖を、全部地面に捨てた。

死体以外は誰もいない校庭で、美鈴は、地面にあぐらをかいて座り込んだ。おもむろに、自分のスカートを、大きくまくり上げた。

太もものガンベルトが、露わになった。そのガンベルトの、ホルスターが装着されている部分以外には、三十八口径の弾丸が、ぎつしりと装着されていた。その弾丸ベルトから、弾丸を抜き取り、二丁のニューナンプに弾丸を込め始めた。それが終わると、その二丁を両脇のホルスターに納め、今度は、銀色のリボルバーを右のブーツ

から取り出した。回転弾倉を開け、使用済みの薬莢二つを取り出した。弾丸ベルトから、二発だけ弾丸を抜き取り、回転弾倉に装填した。

回転弾倉をもとに戻しながら、美鈴は、立ち上がった。そして、拳銃をブーツの中に戻した。

体育館の中から、里沙が、大声で呼びかけてきた。

「美鈴！ 全部仕留めた？」

美鈴も、大声で答えた。

「仕留めたよ！ 死体を、体育館に運ぶから、手伝ってよ！」

一、二分してから、里沙と百合花が外に出てきた。三人で、三つの死体を体育館内に運んだ。次の決戦の下準備のために。

その作業を終えると、百合花が尋ねてきた。

「このあと、どうするの？」

美鈴が答えた。

「部室に行く。卓球部のね」

## 第十一章・終

## 第十二章 「真夜中の決闘!？」

第十二章 「真夜中の決闘!？」

満月が、地上を明るく照らしていた。

赤いセーラー服の背の低い少女が、正門脇の通用門を開けた。  
赤セーラーの大女が、現れた。

李大栄だ。

ジロリと、背の低い少女を、にらみつけた。

「他の奴らは？」

背の低い少女は、表情を強張らせながら、答えた。まるで、オオカミににらまれたウサギのようだった。

「た、体育館にいる、日本鬼子どもを、監視してます」  
リーベンゲイス

「四人ともか？」

その少女のウサギのように出っ張った前歯が、カチカチと鳴った。  
恐怖のせいだった。

ウサギ顔少女は、ゴクリと唾を飲み込んで無理矢理震えを止めてから、答えた。

「た、体育館は広いですから……、日本鬼子どもが裏口から逃げ出しても、困りますので……」

通用門から、赤セーラーの女達が、次々に入ってきた。その数は、全部で六人いた。

ターチエ  
「大姐、時間がありません。もう、一〇時四〇分です」

声をかけてきたその少女を、李大栄は横目でジロリと見たあと、再び、ウサギ顔少女に視線を戻し、尋ねた。

「コリアンは、結局、来なかったのか？」

「は、はい。電話でも話しましたとおり……」

李大栄は、ウサギ顔少女の言葉を、途中で遮った。

「ペク・セウンは、腰抜けだな。おおかた、妹が殺られて、ビビ

「うちまつたんだな。なあ！」

大きな声で、李大栄は同意を求めた。七人の少女は、愛想笑いを浮かべながら、賛意を示した。

赤セーラーの一人が、ウサギ顔少女に声をかけた。

「なに震えてる？ 今夜は、そんなに寒くねえだろ」

「え、ええ。ちょっと風邪気味なもんで……」

そこまで答えたところで、ウサギ顔少女は、李大栄が南校舎に入ろうとするのに気づき、慌てて声をかけた。

「大姐！ どちらに行かれるんで？ 日本鬼子は、体育館に潜んでる……」

その言葉を遮り、赤セーラーの一人が、代わりに答えた。

「決まってるだろ。この校舎をチエックしとかねえと、万が一、敵が隠れてたら、大変だ。アタシらが体育館に向かった途端に、背後から攻撃されて、挟み撃ちになっちゃう」

その時だった。李大栄の名を呼ぶ女の声が、聞こえたのは。

その場にいた全員が足を止め、声がした方角に視線を向けた。

南校舎の西の陰から、人影が一つ、現れた。

背が、高かった。

長い黒髪が、背後から吹く強い風に舞った。

「誰だ！」

李大栄が、怒鳴った。

その人影が、答えた。

「アタシだよ。李大栄、アンタの妹を、殺した女さ」

「美鈴か……」

美鈴は、両手を背後に隠していた。あごを引き、上体をわずかに前傾させていた。

李大栄が、大声で怒鳴った。

「いい度胸だな！ たった一人でアタシの前に現れるとは。ひよっとして、アタシとタイマン勝負でも、するつもりか？」

「アンタに、その気があるならね」

李大栄は、気味の悪い音を口から漏らした。押し殺した笑い声だった。

「日本人って、ホントにバカだな。アタシがそんなくだらしないこと、するわけねえだろ。八人全員で撃ちまくって、てめえを蜂の巣にしてやるぜ！」

美鈴は、李大栄をにらみつけたまま、口を開いた。

「それはムリだね。なぜなら、アタシとアンタらの距離は、三〇メートルもある」

李大栄の顔から、歪んだ笑みが消えた。

「それが、どうした？」

「分からないの？ アンタの部下の持つてる拳銃、二十二口径の日本製オートマチックばかりだろ？」

「それが悪いか？」

「確かに日本製オートマチックは、中国製と違って、弾詰まりなどの故障がほとんどない。その上、銃身がプラスチック製だから、軽くて扱いやすい。命中精度も、室内の射撃場なら、悪くない。だけどそれは、護身用なんだよ。だから、有効射程距離は、たったの二〇メートル。その上、発砲時の反動は、銃本体が軽いためほとんど吸収されない。腕力の弱い女子高生の場合、どうしても銃口がぶれてしまう。だから、三〇メートルも先にいるアタシには、当たり前じゃない。特に、アンタらの腕ではね」

李大栄は、ギシギシと大きな音を立て、歯ぎしりをした。強い憎悪のこもった目で、美鈴をにらみつけた。

「日本鬼子は、やつぱ、悪賢いな」

「悪賢い？ 李大栄、アンタが腰にぶら下げてる拳銃は、三十八口径だろ？ だったら、アタシと条件は同じはずだよ」

再び、李大栄は、気味の悪い音を口から漏らした。

「条件？ 条件なら、アタシは、アンタ以上だよ」

李大栄は、右の手のひらを上に向け、右腕を横に伸ばした。部下に、小声で命じた。部下の一人が、ナップザックから、大型拳銃を

取り出した。

満月の月明かりに照らされたその拳銃のシルエットは、四四マグナムのものであった。

それを見た瞬間、美鈴の表情が、険しくなった。

「隆子を殺したのは、やっぱりアンタだったのか……。その拳銃は、アタシのだ。アンタにあげるつもりは、ないよ」

みたび、李大栄は、薄気味悪く笑った。

「小日本のは、大中華のもの。大中華のものは、大中華のもの。だから、アンタのものは、アタシのものさ」

今度は、ゲラゲラと大声で笑った。周りの赤セーラー少女達も、一緒になって笑った。

李大栄が、四四マグナムを両手で構えた。

強い風が、吹いた。

美鈴が、地面に頭から飛び込んだ。両腕を、前に真っ直ぐに伸ばして。その両手には、二丁の銀色のリボルバーが、握られていた。

凄まじい轟音が、轟いた。

美鈴の頭上を、四四マグナム弾の衝撃波が走った。その衝撃波は、風に舞う長い黒髪の手を切り裂いた。

胸と腹が接地した瞬間、美鈴は背筋の力で胸をそらし、両手の拳銃の引き金を、同時に引き絞った。

三十八口径の銃声が、轟いた。

ゆっくりと、李大栄の巨体が、後方へ倒れた。まるで、切り倒された巨木のように。

李大栄は、心臓と眉間を撃ち抜かれ、即死した。

赤セーラー服の女達が、悲鳴を上げた。恐慌に陥った彼女達は、次々にホルスターから二十二口径の拳銃を抜き、めくらめっぽうに撃ち始めた。

美鈴は、横へ二回、素速く回転して回避行動を取ってから、両手の拳銃の引き金を、続けざまに引いた。

一回、二回、三回。

わずか一秒間ほどの間に、左右の引き金を、三回ずつ引いた。

六人の赤セーラー少女は、頭部を撃ち抜かれて、即死した。

美鈴が、立ち上がった。

ゆっくりと、李大栄の死体まで、足を運んだ。

右手のリボルバーをブーツに戻してから、脇に落ちていた四四マ

グナムを、拾いあげた。

「返してもらおうよ」

そう一言だけ、つぶやいた。

美鈴は、視線を転じた。

地面にしゃがみ込んでいたウサギ顔の少女が、ガタガタと震え始めた。

「助けてくれる、約束だよ……」

その少女は、脅えた様子で、言葉を絞り出した。

「アタシは日本人だよ。アンタらと違って、約束は守る」

ウサギ顔少女は、他の中国系女子高生ギャング四人と共に、卓球部の部室に寝泊まりしていた。李大栄や李秀英らが、深夜、古宿高校を訪れる際に、通用門を内側から開ける係だった。今夜、一〇時少し過ぎに、突然、美鈴達の襲撃を受けた。とっさに拳銃を抜いた四人は、その場で射殺された。ウサギ顔少女は、恐怖で拳銃を抜くことができなかったため、射殺されずにすんだ。その少女は美鈴達と取引をし、自分の命を助けてもらう条件で、李秀英を裏切ることになった。そして、美鈴の命令に従い、李大栄に電話をし、嘘の情報を流したのだった。

「だけどそれには、アンタにも、きつちりと約束を守ってもらわなくちゃね」

地面にしゃがみ込んだままの少女を、冷たい目で見下ろしながら、美鈴は、冷ややかに言った。

「ほら。今度は、李秀英に電話しな」

\* \* \*

美鈴は、一人で、校庭に立っていた。体育館の南側ドアから出て、五メートルほどの位置だ。そこは、校庭の最も北に位置する場所でもある。

満月を、見上げていた。しばらく見上げ続けたのち、両腕を空高く上げ、大きく深呼吸をした。美鈴の両脇のホルスターには、三八口径五連発のニューナンブが、両腰のホルスターには、二十二口径十連発のリボルバーが、納められていた。四つのホルスターの留め金は、全て、きちんと留められていた。

視線を、足下に転じた。地面に置いてあった四四マグナムを、手に取った。回転弾倉を開き、もう一度、弾丸を確認した。装填数は、四発。

腕時計を、見た。十一時五分前だった。

もうそろそろだな、と思った瞬間に、美鈴の携帯電話が振動した。左腰のホルスターの後ろに装着してある小型ポシェットから、携帯電話を取り出した。

メールだった。ウサギ顔少女からの連絡だ。李秀英達が、正門の前に到着したらしい。これから通用門を開ける、とのことだった。すぐさま美鈴は、里沙と百合花の携帯電話に、メールを送った。

四四マグナムを持った右手を、背後に隠した。

美鈴は、校庭を挟んで体育館の真向かいにある南校舎の、北側の壁に目を凝らした。古宿高校の校庭は、狭かった。南校舎の壁から体育館の壁までの距離は、一〇〇メートルもない。だから体育の授業では、一〇〇メートル走のコースは、校庭を斜めに使って設定している。

正門から入った生徒が校庭に出る場合、最短距離のルートは、二つある。一つは、南校舎と東校舎の二階部分をつなぐ、連絡通路の下を抜ける、東側ルートである。

もう一つは、南校舎と、その北斜め西側にある食堂ホールとの間を抜ける、西側ルートである。南校舎の一階と食堂ホールは、屋根

付きの通路で結ばれているが、その通路には壁はない。だから、自由  
にその通路を横切ることができる。

突然、一発の銃声が、響いた。

小さな、軽い銃声だった。おそらく、二十二口径だろう。方角は、  
正門付近だ。

美鈴は、二つのルートを、交互に見た。やがて、南校舎と食堂ホ  
ールとの間から、つまり、西側ルートから、赤いセーラー服の少女  
達が、バラバラと現れた。

赤セーラー達は、校庭の北側にいる美鈴に気づくと、南校舎の中  
央付近の壁際に、横三列で並び始めた。

素速く、その数を数えた。全部で、二十二名の人影があった。

その第二列目の真ん中付近に、紺色のセーラー服で、背の高い人  
影があった。どうやら、サトルのようだ。

第一列目の中央に、ひときわ背の高い女がいた。その女は、右手  
にアタツシケースを持っていた。

李秀英だろうか。

美鈴は、左手に持ったままの携帯電話を、左手だけで操作し、李  
秀英の携帯電話にかけた。

アタツシケースの女が、携帯電話を耳に当てるのが見えた。

「アンタが、李秀英だね」

美鈴が、尋ねた。

だが、その女は、答えなかった。

「なんとか言ったらどう？」

美鈴が、促した。

しかし、それでもその女は、答えなかった。

「違うんだ……。だったら、本物に代わりなよ」

その影武者の女は、しばらくの間、躊躇ちゆうじゆした。それから、左後方  
を振り返った。

すると、二列目の中央よりやや左側にいた中肉中背の女が、携帯  
電話を受け取った。

「アンタが、美鈴ね」

低く、少しかすれた声だった。李秀英の声だ。

「そうだよ」

「アタシの可愛い妹、美姫を殺した女」

「そうだよ」

美鈴は、平然と答えた。

「大栄も、アンタが殺したの？」

「どうして殺したことが分かった？」

「裏切り者が、死ぬ前に吐いたよ。それに、正門の内側辺りから校舎の中のほうへ、大量の血痕が続いていた。いくつもの死体を引きずったことは、火を見るよりも明らかよ。その血痕をたどって中に入ったら、大栄達の死体があつたわ」

「なかなか頭が切れるね」

「この校庭にも、死体を三つ引きずったあとがあるわ。引きずつた先は……、体育館の中ね」

「スゴイ観察力だね。校庭の血痕は、足で砂をかけて消したつもりだったんだけどね」

「その三人は、いったい誰？」

「卓球部の部員だよ」

その美鈴の答えのあと、しばらく、沈黙が流れた。

李秀英は、美鈴の回答を疑い、真の答えを、慎重に考えているのだ。

再び、李秀英が、口を開いた。

「校庭を間に挟むなんて、アンタ、凄腕の拳銃使いのくせに、ずいぶん慎重ね。一〇〇メートルもの距離があれば、お互いに、拳銃の弾丸は届かない。よく考えたもんね。それとも、アンタの仲間が、代わりに考えてくれたの？ 風紀委員の姿が見えないけど、どこに隠れてるの？」

「体育館の中さ。アンタに渡す五〇〇万円分のヤクの入ったアタシシユケースを持ってね。まずは、サトルを解放しな。そうした

ら、ヤク入りアタツシユケースをここへ持って来させる。それから、現金とヤクとを交換だよ」

「分かったわ」

李秀英はそう言うと、電話を切らずに、中国語で、何かを部下に命じた。

サトルは、両脇にいた女達に促され、隊列の外に出た。

ゆっくりと、美鈴のほうに向かって、歩き始めた。

李秀英が中国語で、部下に何かを命じるささやき声が、携帯電話を通じて、美鈴の耳に入った。

サトルは、歩き続けた。一〇メートルほど歩いたところで、少しばかり、歩調が速くなった。

背の高い影武者女が、腰のホルスターから、拳銃を抜いた。

その次の瞬間、その女が、発砲した。

サトルの両膝が、ガクリと落ちた。地面に、両膝をついた。そのまま、前のめりに倒れた。

携帯電話から、李秀英の笑い声が響いた。

「美鈴、ざまあみる！ アタシの妹を二人も殺した罰よ！ どう？ 自分の愛おしい彼氏が死ぬのを、間近で見るのは？ ざまあみる！ リーベングイスー！」

瞬間的に、美鈴の頭に血が上がった。左手の携帯電話を、地面に投げ捨てた。背後に隠していた右手を、前に出した。

四四マグナムを、両手で構えた。あごを引き、両腕を真っ直ぐに伸ばし、両足をしっかりと踏ん張った。

地面に転がった携帯電話から、李秀英が、さらに大声で笑うのが聞こえた。

「無駄だよ！ この距離じゃ、届かない！」

携帯電話の向こうの李秀英が、あざ笑った。

美鈴は、狙いを慎重につけながら、つぶやいた。

「この拳銃は、届くんだよ。世界最強だからね」

美鈴は、引き金を絞った。

凄まじい衝撃が両肩を襲い、美鈴の全身を震わせた。

四四マグナムの轟音は、あたかも、大地を揺るがす雷鳴のようだった。

李秀英の前に立っていた女が、三メートルも後方に吹き飛ばされ、死体となって、李秀英の足下に転がった。

あまりに衝撃的な光景を目の当たりにして、複数の赤セーラー女達が、一斉に悲鳴を上げた。

李秀英が、逃げだそうと、背中を向けた。

今や、美鈴と李秀英とを妨げるのは、九〇メートルほどの距離と、夜の闇だけしか、なかった。

次の瞬間、美鈴は、もう一度引き金を絞った。

再び、凄まじい衝撃が、美鈴の体を震わせた。

四四マグナム弾は闇夜を切り裂き、背中を向けた李秀英の細い体を、吹き飛ばした。

女達の悲鳴が、絶叫に変わった。

三たび、美鈴は、引き金を絞った。

凄まじい轟音と共に、影武者女が、くの字になって後方に吹き飛んだ。

幹部とおぼしき大柄な女が、赤セーラー達に、大声で何かを命じた。赤セーラー達は泣き喚きながら拳銃を抜き、やみくもに乱射を始めた。

四たび、引き金を絞った。

幹部女の頭部の左上部分が、吹き飛んだ。脳髓を辺り一面に撒き散らしながら、硬直した女の体が、痙攣しながら後方に倒れた。

女達が、恐慌に陥った。半数は、泣き喚きながら乱射を続けたが、残りの半数は、逃げ出し始めた。

弾切れとなった四四マグナムを放り出し、美鈴は、右膝を真上に向かって蹴り上げた。ブーツから飛び出したりボルバーを、右手でつかんだ。右足を着地させると同時に、今度は左膝を蹴り上げた。飛び出したりボルバーを、左手でつかむやいなや、美鈴は、全速力

で、走り出した。

数名の赤セーラーが、西側ルートを通って、逃げ出そうとしていた。

だが、屋根付き通路を横切った直後、パリパリパリと、軽機関銃の銃声が響いた。

食堂ホール西側の陰に隠れていた、里沙だ。

軽機関銃がばらまく無数の銃弾によって、西側ルートから逃走しようとした六名は、全員、撃ち殺された。

赤セーラーが三名、東側ルートから逃走した。連絡通路の下をくぐって姿が見えなくなった直後、銃撃音がした。

一回、二回、三回。

東校舎に潜んでいた、百合花のベレッタの銃声だ。

美鈴は、校庭を走った。五〇メートルの距離を七秒台で走り抜け、校庭の中央付近を過ぎたところで、左足で踏み込み、右斜め前方に低く跳躍した。右足を着地させると同時に、右肩を下にして地面に転がり、バレーボールの回転レシーブの要領で、腰を落としたまま、起き上がった。

起き上がった瞬間に、両腕を前方に伸ばし、左右のリボルバーの引き金を絞った。続けて二回ずつ撃つと、再び右肩を下にして地面に転がった。今度は三回素速く回転してから、起き上がると同時に、引き金を引いた。左右二回ずつ。

美鈴と赤セーラー達との距離は、三〇メートル以上あった。だが、美鈴は一発も外さなかった。美鈴の放った三十八口径の弾丸は、八人の赤セーラー女の頭部、胸部、腹部に命中し、一発で即死させた。李秀英とその一味は、全滅した。

美鈴は、両手にリボルバーを持ったまま、今度は、ゆっくりと歩を進めた。

倒れたサトルの脇に片膝をつき、リボルバーを地面に置いた。彼を仰向けにしてから、抱き起こした。

サトルは、まだ息があった。だが、軍用九ミリ弾で背中から撃た

れたため、もはや、虫の息だった。

サトルが、まぶたを開けた。

「みす、ず……」

「そうだよ。アタシだよ」

「ごめんね。ボクのへまのせいで、迷惑かけちゃって……」

美鈴の表情が、歪んだ。

「気にするなよ。そんなこと」

「ボク、嘘もついちゃった。ボクとキミが、恋人同士だ、って…

…

「ああ、知ってるよ」

「ボク達、まだ、キスもしてないのにね……」

それが、サトルの最後の言葉となった。

美鈴は、サトルの頸動脈に、指を当てた。脈が、止まっていた。

手のひらで、そっと、サトルの両まぶたを、閉じた。

サトルの上半身を抱き起こしたまま、美鈴は左手を、サトルの後頭部に回した。

静かに、くちびるを重ねた。

「これで、もう、嘘じゃないよ」

美鈴は、サトルの耳元にくちびるを寄せ、ささやいた。

「さよなら。アタシの恋人」

サトルの体を横たえ、美鈴は、立ち上がった。

両手には、銀色のリボルバーが、握りしめられていた。

二丁の拳銃は、満月の月明かりを反射し、輝いていた。

どこか幻想的で、そして、悲しい美しさだった。

### 第十三章 「女子高生に明日はない!？」

第十三章 「女子高生に明日はない!？」

美鈴は、食堂ホールにいた。ホールの一番奥のテーブルで、壁に背を向け、昼食を取っていた。

その隣には、百合花がいた。彼女の前には、食器はなかった。パック入りの牛乳だけだ。百合花は、モデル体型を維持するため、昼食は食べないことにしていたのだ。

「ホントに、食べなくていいの？」

美鈴が、尋ねた。

「ええ。モデルって、大変なのよ。ちよつとでも太ると、仕事が出来なくなるから」

「だけどさ、野菜スープなら、太らないんじゃない？」

「ええ。だからいつも、朝ご飯に食べてるわ」

「今日は、抜きだったでしょ」

昨夜も、百合花は音楽室に泊まった。美鈴と一緒に、一枚の毛布にくるまって。

「はい。あ〜ん」

美鈴は、スプーンでスープを一匙ひとすくすくうと、百合花の口元に近づけた。

百合花は、恥ずかしそうな、それでいて少し嬉しそうな表情を見せたあと、そのスープをすすった。楽しそうに微笑む美鈴から目をそらし、小声でつぶやいた。

「子供じゃないのに……」

「いいじゃん。親友なんだから」

その時、美鈴の視界の端に、里沙の姿が映った。途端に、美鈴の表情が曇った。肘で軽く百合花の腕をつつき、注意を促した。

百合花も、里沙の姿を見た途端、表情が陰った。

実は昨夜、李秀英のグループを全滅させたあと、里沙は怒り狂って、美鈴のことを何時間もなじり続けたのだ。

李秀英は、五〇〇〇万円を持って来なかった。影武者女が持っていたアタツシユケースの中に入っていたのは、古雑誌だけだった。だから美鈴達は、大金を入手し損なった。

それで、里沙は怒り狂ったのである。その怒りの矛先は、美鈴に向けられた。なぜ、現金を確認する前に、李秀英を殺してしまったのか。殺してしまったら、現金を入手することが、もはや不可能ではないか。そう言って、美鈴のことを激しくなじったのである。

里沙のその怒りは、音楽室に戻ってからも続いた。美鈴のことを激しくなじり続ける里沙を見て、百合花が美鈴をかばった。だがそれが、火に油を注ぐ結果となった。

里沙は烈火のごとく怒り、百合花に対して個人攻撃を始めた。百合花の頭の悪さや、モデルとして三流である点、さらには、百合花の父の経営手法の汚さなど、酷い侮辱を繰り返した。見かねた美鈴が止めようとしたが、里沙の口撃は、際限なく続いた。それで、ついには、百合花が涙を流して泣きじゃくる事態となってしまうた。

やむなく美鈴は、百合花を音楽室の外に連れ出した。慰めて気を静めさせてから、再び音楽室に戻って、一枚の毛布にくるまって眠った。二人が寝たのは、午前四時を随分過ぎてからだだった。

里沙は、美鈴達に気がつくつと、一直線に向かって来た。美鈴は、気づかない振りをして、無言で給食を食べ始めた。

テーブルのそばまで来ると、里沙は、美鈴と百合花のことを、じつと見た。だが二人は、視線を合わせなかった。

里沙が、口を開いた。

「あのさ……」

それでも、美鈴と百合花は、視線を里沙に向けなかった。

だが、里沙は言葉を続けた。

「わたし、謝るわ。昨夜のこと」

美鈴が、里沙に目を向けた。しかし、口は開かなかった。百合花

は、まだ視線を合わせなかった。

「わたしが悪かったわ。ついつい頭に血が上っちゃって。酷いこと言ってしまったって、ごめんなさいね」

美鈴が、口を開いた。

「誰でも、カツとなることはあるから……、アタシのほうは、別に、もういいよ」

そう言いながら、美鈴は百合花のほうを見た。

里沙は、百合花に視線を向けた。

「ごめんね、百合花。わたし口が悪いから、いろいろきついこと言っちゃったけど……。百合花ならきつと、将来、一流の芸能人になれると思うわ。だから、タベ言ったことは、もう忘れてちょうだい」

百合花は、視線を合わせずに、ぼそりと言った。

「わたしも、別にもういいわよ。気に何てしてないから」

すると、里沙がニッコリと微笑んだ。

「そう、よかったわ。それじゃあ、私達、仲直りね。私達の友情と勝利を祝って、今夜、祝勝会をやらさない？」

「祝勝会？」

美鈴が、思わず問い返した。

「そうよ。私達、あの李秀英グループを殲滅せんめつしたのよ。これって、素晴らしいことだわ。これもひとえに、私達の友情とチームワークのおかげよね。だから、祝勝会を開いて、パーツと、盛り上がりましょうよ」

「アタシはいいけど……」

そう言って、美鈴は、百合花のほうを見た。

「百合花、ネツ、いいでしょ」

里沙が、百合花を促した。

「う、うん。じゃあ、いいわ」

「じゃあ、決まりね。場所は、食堂ホールの二階にある、第二会議室ね。時間は夜の七時からよ」

「七時？ 随分遅いね。警備員の見回りはどうするの？」

美鈴が、思わず尋ねた。

「大丈夫。警備員とは、既に話をつけたわ。風紀委員の特権でね。今後の風紀取締活動について、秘密の会議を行う、って言ったら、すぐに了承してくれたわ。それじゃあ、今夜七時に集まってね。飲み物やつまみの仕入れは、わたしが放課後するから、心配しないでいいわよ」

「うん。分かった。すまないね」

美鈴のその言葉に、里沙は、ニツコリと微笑んだ。

「私達、友達だから」

そう言って里沙は、笑顔でその場を離れた。

\* \* \*

美鈴が第二会議室に到着したのは、午後七時の二、三分前だった。ドアを開けると、既に里沙と百合花が席に着いていた。室内は、とても狭かった。折り畳み式の長方形テーブルが二つ並べて置かれており、その周囲に、折り畳み式の椅子が四つ並んでいる。机の上には、ソフトドリンクのニリツトル入りペットボトルが何本かと、紙コップ、それに、数種類のスナック菓子などが並べられていた。

「美鈴は、何飲む？」

美鈴が奥の席に着くと、里沙が笑顔で尋ねた。

「うん、どれがいいかな。じゃあオレンジジュース」

里沙が、甲斐甲斐しく、紙コップに注いでくれた。

「それじゃあ、私達の勝利と友情を祝って」

そう言いながら、里沙が、紙コップを持ち上げた。

「それに……」

美鈴は、紙コップを持ち上げながら、言葉を継ぎ足した。

「先に逝った友、隆子とサトルの魂に」

それから、美鈴は百合花に視線を向けた。

「えつと……」

百合花は、少し口ごもったあと、口を開いた。

「私達の夢に」

「乾杯！」

三人は、互いの紙コップを軽く合わせてから、ソフトドリンクを飲み始めた。

「あれっ？ これって、なんか、普通の味と違うね」

美鈴は、一口飲んだだけで、すぐに気づいた。

百合花の紙コップをのぞくと、彼女は、注がれたウーロン茶を、既に全部飲み干していた。

里沙が、平然とした顔で答えた。

「あら、そう？ 安物は口に合わない？」

そう言いながら、里沙はウーロン茶を百合花の紙コップに注いだ。

「安物？ ペットボトルのオレンジジュースに、安いも高いもないでしょ」

「ジュースは普通だよ」

「じゃあ、安物って？」

「分かるでしょ」

里沙が、ニヤリと笑った。

「なんか入れたの？」

「ええ。大人の飲み物を、ちよつとね」

「大人の飲み物って、なに？」

百合花が口を挟みながら、空になった紙コップを里沙の前に差し出した。

里沙は再びウーロン茶を注ぎながら、答えた。

「アルコールよ」

「エー。アタシ達、まだ高校生だよ」

不満げな顔で、美鈴が抗議した。

「いいじゃない。もう高校生なんだから」

にやつきながら、里沙が反論した。

「じゃあ、アルコールの入ってないのをちょうだい」

美鈴がそう言うと、里沙は眉間にしわを寄せた。

「そんなこと言われると思ってなかったから、全部のペットボトルに入れちゃったわよ」

「エー。なんで……」

里沙が、美鈴の言葉を遮った。

「だって、校内に酒瓶を持ち込んで、もし見つかったりしたら、まずいでしょ。だから、校外でジュースに混ぜて、酒瓶は捨ててきたのよ」

美鈴は、面白くなさそうな顔で、押し黙った。

「もし美鈴が、アルコールにアレルギーとかあるなら、わたし、今からジュースを買い直してくるけど……」

「いや、そこまでする必要はないけどさ……」

「そう。よかった。じゃあ、楽しく飲みましょ。祝勝会なんだから」

里沙は笑顔でそう言うと、百合花の紙コップに、四杯目のウーロン茶を注いだ。既に百合花の顔は、真っ赤になっていた。

「百合花、大丈夫？」

美鈴が心配して尋ねると、百合花はトロンとした目で見つめ返した。

「なひか？」

既に百合花は、ろれつが回らなくなっていた。

「ちよつと貸して」

美鈴はそう言いながら、百合花の紙コップに口をつけ、一口飲んでみた。

「あゝ。これはちよつと強いね」

「そうかしら」

「薄いのではないの？」

「うん。どちらかというと、これは薄いほうかも。最後に混ぜたから、ウイスキーが少し足りなくなってたから」

そう答えて、里沙は、コーラのペットボトルを渡した。

美鈴は新しい紙コップにコーラを注ぎ、一口飲んでから、それを、百合花が手に持っている紙コップと交換した。百合花は一口飲んでから、嬉しそうな顔をした。

「あつ！ コーラだ！ 飲むの久しぶり」

「へえ、そうなんだ」

「あつ。 飲むと太っちゃうな」

百合花は、突然、悲しげな顔をした。

「今日一日くらいなら、平気よ」

里沙が笑顔で答えた。

「百合花、だいぶ早く酔いが回ったみたいだね」

美鈴が里沙にそう言うのと、彼女はコンビニ袋の中から、チーズを取り出した。

「空きっ腹だったんじゃない？」

里沙から受け取ったチーズを、美鈴は、包み紙を開けてから、百合花に食べさせた。

「へえ。二人は仲良いのね」

里沙は、何かイヤミでも言いたそうな顔つきだった。

それに対し、だいぶできあがった百合花が、笑顔で答えた。

「だって、わたしたひ、しんゆうだもんねー」

「だけど、あなた達、もういい年なんだから、男の子の恋人とかって、どうなの？」

にやつきながら、里沙が尋ねた。

「ゆりかはね、モデルだから、スキャンダルにならないように、気をつけてるんだよ」

「そうなんだ。じゃあ、隠れてつきあってる人とか、いるの？」

美鈴が、身を乗り出して尋ねた。

「そ、ゆる意味じゃないよ。それに、今は、勉強とか、生徒会活動とかで忙しいから。三田塾大学に入ったら……」

百合花の話の途中で、里沙が美鈴に話を振った。

「で、美鈴は？」

「えっ？ アタシ？」

「美鈴ってさ、もてそうじゃない」

「そうかな」

「今は彼氏いるの？」

「今は……、いないよ」

「じゃあさ、前の彼氏は、どんな男の子？」

「前は……」

美鈴の表情が、沈んできた。

「まさか、バージンってことはないでしょ？」

「それはないけどさ」

「じゃあさ、美鈴の初体験のこと、聞かせてよ」

「あゝ、ゆりかも聞きたいな」

「やめとくよ。話すと、みんな引くから」

「そう。じゃあ今は、拳銃が恋人、つてとこなわけね」

里沙は、何となくいやらしい目で、美鈴を見た。

「まあ、そんな感じだね」

「えゝ。ゆりか、みすずのこひのはなし聞きたいな」

「じゃあさ、美鈴の恋人、見せてよ」

「えっ？」

里沙が、ニヤリと笑った。

「美鈴の拳銃、わたし見たいな。スカートの下に隠してるやつ」

美鈴は、困ったような顔になり、押し黙った。

「じゃあ、先にわたしの恋人を見せてあげる」

にやつきながら、里沙は、ホルスターから拳銃を取り出した。

「いいよ。国産の、藤重工製二十二口径オートマチックでしょ。

その拳銃なら、よく知ってる」

「知ってる？ だけど、最新型よ。去年の秋に出たやつ」

里沙は、銃把を美鈴に向けて渡した。

少しばかり渋い顔をしつつも、美鈴は受け取った。

「軽いでしょ。前のタイプより」

「そういえば、そうだね。大きさは、前のタイプと変わってないように見えるけど」

「九十八グラムも軽くなっただって」

「へえ」

里沙が手を差し出したため、美鈴は、里沙のオートマチックを返した。里沙は、自分の拳銃をテーブルに置き、再び手を差し出した。「ねえ、いいじゃない。美鈴の恋人、見せてよ」

「ゆりかも、美鈴のこひびと、見たいよ」

美鈴は、渋々ながら、スカートの下に手を入れ、一丁の拳銃を取り出した。銀色のリボルバーを、銃把を里沙に向けて差し出した。

「綺麗な拳銃ね」

里沙がそう言うと、美鈴は、少し嬉しそうな顔になった。

「この拳銃、アメリカ製でしょ？ 何ていう名称？」

「通称、レディー・スミス」

美鈴は、少しばかり得意げに、答えた。

「金属製の割には、思ったより軽いわね。一キロをだいぶ切ってるでしょ」

「そうだね。レディー用だから」

里沙が、レディー・スミスの回転弾倉を開けた。

「あつ！ これって、五連発なんだ！」

驚いた里沙が、大きな声を出した。

「小型化するために、弾倉を六連発から五連発に変更したんだよ。

日本のニューナンブも、同じ設計思想だけだね」

美鈴は、得意げな顔で、蘊蓄うんちくを垂れた。

「ゆりかにも、見せて」

真っ赤な顔をした百合花が、レディー・スミスを見ようと、身を乗り出してきた。

「美鈴、もう一丁を見せてあげてよ」

そう言いながら、里沙はレディー・スミスを百合花から遠ざけた。

「ゆりかにも見せてよ〜」

「見せ合いつこしてるんだから、百合花も、ベレッタを美鈴に見せてあげなさいよ」

「見せ合いつこ?」

一瞬、キョトンとした顔をしたものの、百合花はホルスターから、ベレッタを取り出し、美鈴に渡した。

美鈴は、受け取った瞬間に、驚いた顔をした。

「えっ！ これって、銃身がプラスチック製じゃん！」

「そうよ。最新型よ」

「へえ〜。ベレッタが、二十二口径のプラスチック製を作ってるとは、知らなかった。ベレッタって、イタリアだよな」

「ジャパンモデルよ」

「へえ〜。そんなのあるんだ」

「確か、ジャパンモデルは、菱屋重工がライセンス生産してるんでしょ」

里沙が、口を挟んだ。レディー・スミス回転弾倉から、三十八口径の弾丸を抜き取り、テーブルの上に一つずつ並べながら。

しかし百合花は、その話を知らなかった上に、興味もなかったらしく、里沙には答えなかった。

「ねえ〜、美鈴のレディー・スミスも見せてよ〜」

百合花の甘ったれた声に、やむなく美鈴は、スカートの下から、もう一丁のリボルバーを取り出した。

「ホント、綺麗ねえ〜。わたしも、銀色の金属製にしようかな〜」

百合花は、感心した様子で、リボルバーを撫で始めた。

「ねえ美鈴、百合花のベレッタも見せてよ」

里沙が、美鈴に手を差し出した。

美鈴は、銃把を里沙に向けて、渡した。里沙は受け取ると、手のひらにのせて、重さを量る仕草をした。

「これも、軽いわね。何百グラム?」

里沙は、ベレッタの弾倉を抜きながら、百合花に尋ねた。

「さあ、知らない。里沙のも見せて」

里沙は、自分のオートマチックを左手に持って差し出しながら、右手を差し出し、百合花の手元にあるレディー・スミスを要求する仕草をした。

二人は、拳銃を交換した。

「あつ！ こっこのほうが軽いかも」

百合花は、陽気な顔でそう言いながら、重さを量ろうと、手のひらにのせた。

里沙は、百合花から受け取ったレディー・スミスの回転弾倉を開け、弾丸が込められていることを確認してから、弾倉を元に戻した。そして、撃鉄を起こした。

「里沙、撃鉄は起こすなよ」

美鈴が顔をしかめ、里沙に注意した。

里沙は、チラリと美鈴を見てから、銃口を百合花に向けた。

「里沙、なにやってんだよ！」

美鈴が、語気を強めた。

百合花も、自分に向けられた銃口に気づいた。

「やめてよ、里沙。友達に銃口を向けるなんて」

里沙は、銃口を百合花に向けたまま、口元だけで笑った。その笑みは、氷のように冷たく、冷ややかだった。

「友達ですって？ 今は二十一世紀よ。友情、愛情、信頼、絆。

そんなものは、二〇世紀の遺物にすぎないわ」

百合花は、里沙をにらみつけた。

「あなたって、ホント、性格悪いわね。いい加減、意地悪するのはやめてよね」

そう言うやいなや、百合花は素速く両手を動かした。左の手のひらにのせていたオートマチックを右手でつかんで銃口を里沙に向けつつ、左手で安全装置を外しながら、右手の親指で撃鉄を起こした。百合花はアルコールのせいで顔は真っ赤だったが、彼女の行動は、実に迅速だった。

「里沙、わたしはね、やられたらやり返す主義なの。口げんかではあなたに勝てなくても、拳銃の扱いなら、負けないわよ」

二人の少女は、お互いに銃口を向け合いながら、にらみ合った。

「二人とも、落ち着きなよ。喧嘩なんてやめて、銃を下ろしなよ」  
美鈴が、間に割って入ろうとした。

里沙は冷やかな笑みを浮かべながら、口を開いた。

「お馬鹿さんね。そのわたしの拳銃は、既に、弾丸を全部抜き取ってあるわ」

百合花の表情が、一瞬、怒りで歪んだ。何か言いたそうに、いったん口を開いたものの、すぐに閉じた。

百合花は、拳銃をテーブルの上に置いた。

「こんなのバカバカしいわ。タチの悪い冗談は、やめてちょうだい」

里沙は、眉間にしわを寄せた。

「百合花、これはね、冗談じゃないのよ」

次の瞬間、レディー・スミスの銃口が、火を噴いた。

百合花は、至近距離から、三十八口径の弾丸で心臓を撃ち抜かれ、椅子ごと後方へ倒れた。

百合花は、即死した。

「ゆりかー！」

美鈴は思わず椅子から立ち上がり、絶叫した。

激しい怒りに駆られた美鈴は、本能的に、里沙のレディー・スミスを奪い取るうと、テーブルを回り込みながら、左手を伸ばした。

里沙も椅子から立ち上がりつつ、後ろへ一歩下がって、美鈴の伸ばした手から逃れた。そして今度は、銃口を、美鈴に向けた。

瞬間的に、美鈴は、凍り付いたように動きを止めた。

「なぜ、こんなことするんだ！」

美鈴が怒鳴った。怒りの形相で。

「美鈴、あなたのせいよ。あなたが李秀英を勝手に殺してしまったて、五〇〇〇万円を手に入れ損ねたから、こうせざるを得なかった

のよ」

「なぜだ！」

「それはね、結局この世の中、お金のない人間は負け組だからよ」  
「何言ってるんだよ。アンタは風紀委員だろ。風紀委員は無試験で公立大学へ進学できるし、奨学金のおかげで学費は事実上の無料。その上、大学を卒業したら、たいていの場合、教育委員会に就職できる。それなのに、そのどろろが負け組なんだよ！」

里沙の顔が、苦惱で歪んだ。

「美鈴、それは違うの。わたしはもう、大学へは行けないの。二年間も、風紀委員として、命をかけて、がんばってきたというのに。わたしの両親はね、半年ほど前、交通事故で、死んじゃったの。保険会社の連中は、遺族が高校生のわたし一人だと知ると、ナメた態度を取ってね。車を運転していたわたしの父の過失を主張して、保険金の支払いを拒んだのよ。だから、自宅マンションの住宅ローンの残高三〇〇万円が、残ってしまった。だからといって、ローンの支払いが遅れると、マンションは銀行に差し押さえられて、わたしはホームレスになってしまう。だからわたしは、ローンと自分の生活のために、お金がいる。それなのに、泣きつ面に蜂とは、このことよね。先月、教育委員会から、通知が来たの。死んだ父の代わりに、新しい保証人を立てないと、あと三ヶ月で、つまり、六月いっぱい、風紀委員の地位を剥奪するって。けどわたしには、保証人になってくれるような親戚はいないのよ」

里沙の表情が、さらに歪んだ。怒りと憎悪の感情で。

「こんなふざけた話って、ある？ わたしが二年間も命がけで戦ったのは、いったい何だったの？」

美鈴の表情も、大きく歪んでいた。

「アンタの置かれた辛い立場はよく分かる。だけどさ、だからといって、なんで百合花を殺すんだよ！」

「お金のためよ。去年の夏、ある有名IT企業の経営者の息子がね、同じ高校の生徒に殺される事件があった。犯人は、そのあとど

ここに逃走したんだけど、そしたらね、父親が懸賞金をかけたの。一〇億円もね。だから、美鈴、あなたの拳銃を使って、百合花を殺した。これで、百合花殺しの犯人は、あなたよ。弾道検査の結果を見れば、誰も疑わない。で、その犯人のあなたを殺せば、百合花の父親が、億単位の謝礼金をくれるかも知れない」

「そんな計画、うまくいくとでも、思ってるの？」

「うまくいかないかもね。百合花の父親はケチだから。だけど、それでも別に、構わないわ。なぜなら、美鈴、あなたを殺せば、数千万円単位のお金が、確実に入るからね」

「それは、いったいどういうこと？」

美鈴の表情が、険しくなった。

その時、ドアの外から、女が呼びかける声が聞こえた。

「里沙、入るわよ」

甲高い、耳障りな声だった。

ドアが、開いた。現れたのは、銀色の細い眼鏡をかけた少女だった。

埼玉県の風紀委員、椎名政美だ。

美鈴の形相が、さらに険しくなった。憎々しげに、吐き捨てた。

「へえ」。埼玉県の教育委員会は、アタシなんかは何千万円も懸賞金をかけたんだ」

「いいえ。たった八〇〇万円よ」

政美が、憎々しげな笑みを浮かべながら、答えた。

「じゃあ、数千万円ってのは、何の話？」

「これよ」

そう言っつて里沙は、足下のアタッシュケースを、片足で軽く蹴飛ばした。

「この麻薬、政美が埼玉県で売ってくれると約束してくれたの。各高校の密売組織を使って、毎月五〇〇万円ずつね。わたしはその見返りに、美鈴、あなたを殺すことになった」

美鈴は、視線を政美から里沙へと戻した。

「だったら、なんで百合花まで殺したんだよ。アタシだけ殺せばいいだろ」

「それは難しいでしょ。百合花も誘って、アルコール・パーティーにしたから、あなたは油断して、拳銃を二丁とも手放してしまう失態を犯した。いくら凄腕のあなたでも、拳銃さえなければ、ただの女なのにな」

ククツと、里沙は、押し殺した笑い声を漏らした。意地悪そうな笑みを、浮かべながら。

「それに、あなただけ殺して百合花を生かしておいたら、百合花は絶対にわたしに復讐したわ。なにせ、百合花とあなたは、二晩も、一つの毛布にくるまって乳繰りあっていたレス仲間ですものね」  
すると政美が、耳障りな声で叫んだ。

「まあ！ 女同士で乳繰り合うなんて、あなたやっぱり変態だったのね！」

「そんなことしてねえよ。レスでも変態でもねえよ」

美鈴が、吐き捨てた。二人を、さらに強くにらみつけて。

「で、アンタら二人は、いつからグルだったの？」

「今朝よ」

里沙が、そっけなく答えた。

「今朝の一〇時頃、突然、政美から電話がかかってきたの」

今度は、政美が、説明を始めた。

「わたしね、テレビのニュースで見たのよ。都立古宿高校で、二日前、女子高生ギャングやコリアン・マフィアが、合計三〇人以上も殺された、って。その段階で怪しいと思ったんだけど、今朝のニュースを見て、確信したわ。なにせ昨夜は、同じ高校で、合計九〇人以上のギャングやマフィアが殺された、っていうんだから。これって、大宮の三十六人殺しの時と、同じパターンよね。今年の夏、西大宮高校で、風紀委員と組んで、日本人女子高生ギャング八名に、在日女子高生ギャング二〇名ほどと、その取引相手だったコリアン・マフィア一〇名ほどを、たった一晩で殺害した女拳銃使いがいた。

だからわたしは、古宿高校の風紀委員を調べて、電話をかけた……」  
続いて、里沙が言葉を継いだ。

「わたしは驚いたわ。だっていきなり、美鈴っていう拳銃使いがいるでしょ、って言われたんだから。八〇〇万円払うから殺して、って言われたんだけど、その段階では断ったわ。こっちは美鈴のせいで、五〇〇〇万円も損してるのよ、って思わず怒鳴っちゃった。そしたら、五〇〇〇万円の事情を聞かれたので、それを話したら、なんと政美が、五〇〇〇万円分の麻薬を、さばいてくれるって言うじゃない。それで、渡りに船とばかりに、手を組むことにしたのよ」  
美鈴は、大きく表情を歪めたまま、微かすかに首を左右に振った。

「アンタ達、風紀委員のくせに、人間のクズだよ。麻薬を売る奴は、みんなクズだ。アンタ達も含めて、全員な」

政美は、美鈴が吐き捨てた言葉を無視し、里沙を促した。

「さあ、この憎たらしい拳銃使いを、その拳銃で撃ち殺しなさい」  
里沙は、レディー・スミスの銃口を美鈴に向け続けながらも、横目でチラリと政美を見た。

「この拳銃は、ダメよ。美鈴の拳銃だから。札付きの拳銃使いが、自分の拳銃で自分を撃つなんて、不自然でしょ。だから、あなたの拳銃で殺しなさいよ。どうせあなたは恨みがあるんだし……」

政美が、里沙の言葉を途中で遮った。政美の顔からは、血の気が引き始めていた。

「その拳銃、美鈴の拳銃じゃないわ」

「いえ、そうよ」

「違うわ。美鈴のリボルバーは、もっと大型だった。銃身だって、その二倍は長かったわ」

「大きく見えたのは、気のせいよ」

「そんなことないわ。わたしは、目の前に突きつけられたんだから」

「これは美鈴のよ。スカートの下のホルスターから出すのを、この目でちゃんと見たんだから」

「スカートの下？」

政美の顔が、さらに青ざめた。

「美鈴は、拳銃をブーツの中に隠してるのよ」

「えっ？」

里沙は、思わず政美の顔を見た。

その瞬間、美鈴は左足で一步前へ踏み込み、左手で内側から外側へと、拳銃を握った里沙の手を払った。

その直後、右膝を真上に蹴り上げ、ブーツから飛び出した銀色のリボルバーを、右手でつかんだ。

次の瞬間には、美鈴のリボルバーの銃口は、里沙ののど元に突きつけられていた。

里沙の表情が、泣きそうなくらいに、歪んだ。

「待って、美鈴。わたし達、友達でしょ」

美鈴は、無表情で答えた。

「もう、違うよ」

銃声が、轟いた。

力を失った里沙の体が、床に崩れ落ちた。

美鈴は、視線を転じた。政美のほうへ。硝煙の立ち昇る銃口を向けながら。

「ま、待って。わたしは風紀委員よ。風紀委員を殺すのはまずいわよ」

「もう、二人も殺しちゃったよ」

「だ、だけど、他の二人は、正当防衛だったじゃない。だけどわたしは、ほら、拳銃には一切、手を触れていない。だからわたしを殺したら、正当防衛は成り立たないわよ」

政美は、自分の右手を、腰のホルスターから離し、両手を上に挙げた。

「なに寝ぼけたこと言ってるんだよ。前回アンタを殺さなかったのは、校舎の窓から見ている生徒が、たくさんいたからだ。だが、今度は違う。アタシとアンタの他には、もう誰もいない」

政美は、恐怖でガタガタと震え始めた。

「待つて。取引しましよ。わたし今、五〇〇万円を持つてるの。里沙との一回目の取引金よ。背中に背負つてる鞆の中に、入ってるわ。それに、ほら、その足下のアタッシュケース。五〇〇〇万円分の麻薬も、あなたにあげる」

「麻薬なんていらない。麻薬は、多くの人に不幸をもたらす。アタを殺したあと、全部、トイレに流すよ」

「わ、分かったわ。それでいいから……」

「いい加減、観念しな」

「ちよ、ちよつと待つて……」

美鈴は、政美の言葉が終わるまで、待たなかった。

「あばよ。悪党」

銃声が、轟いた。

政美は、心臓を撃ち抜かれ、即死した。

美鈴は、まだ銃身の熱い拳銃をブーツにしまうと、倒れた百合花の脇に、ひざまずいた。

それから、百合花の体を抱き起こし、テーブルの上に横たえた。指先でまぶたを閉じたあと、彼女の艶やかな亜麻色の髪に、少しだけ触れた。

彼女のために、何かしてやれることはないかと、思案した。だが、すぐに思い出した。死んだ者に、してやれることなど、何も無いことを。

美鈴は、百合花の耳元に、くちびるを寄せた。

「さよなら、百合花。アタシの、親友」

美鈴は、左の指先で、目頭を押さえた。だが、涙は、流さなかった。

なぜなら、学校生活に、友人の死は、つきものだから。

心の中で、美鈴は、思った。

「やつぱり、同じだね。学校と、大自然の荒野とは」

百合花の遺体を残して、美鈴は、その部屋をあとにした。



## 最終章「明日に向かって撃つ!？」

最終章「明日に向かって撃つ!？」

美鈴は、保健室のドアを開けた。スポーツバックを、背負っていた。香織のベットに行くと、その脇にしゃがみ込んだ。

暗闇の中で、香織が目を開けた。

「今日は、変な日ね。警備員の見回り時間中に、銃声が聞こえたわ」

「友達が、殺されたんだ」

ぼそりと、美鈴が言葉をこぼした。

「そう……。悲しいわね」

香織が、目を伏せ、答えた。

美鈴は、香織に全てを話した。今夜起こったこと、昨夜起こったこと、それに、埼玉県で起こったこと。自分が、埼玉でお尋ね者になって、東京へ来たこと。東京でも、風紀委員を殺してしまったため、お尋ね者になるのが、確実なこと。その上、百合花殺しの汚名を着せられたため、億単位の懸賞金がかかり、全国どこに逃げても拳銃使いの賞金稼ぎに、命を狙われるだろうということ。

美鈴は、堰<sup>せき</sup>を切ったように話し続け、全てを香織に話した。香織は、その間、黙って耳を傾け続けた。

美鈴が話し終わると、香織が尋ねた。

「それで、美鈴お姉さん、五〇〇〇万円分の麻薬は、どうしたの？」

「全部、トイレに流したよ」

香織は、満面の笑みを浮かべた。

「さすが、美鈴お姉さんだわ。お姉さんって、本当に素晴らしい人ね。五〇〇〇万円分の麻薬を全部捨てるなんて、普通の人じゃできないわ」

「麻薬は、多くの人に不幸をもたらすからね。この世から麻薬さえなくなれば、この世の不幸の全部とは言わないけど、半分くらいは減らすことができる。たぶんね」

「ええ。そうね。半分くらいは、減らすことができるでしょうね。麻薬さえなければ、アタシもホームレスにならなくてすんだしね」  
そのあと、数十秒の間、沈黙が流れた。

美鈴が、重い口を開いた。

「そういうわけで、アタシは、今夜、この学校を出る。二度とここには、戻れない。香織ともう会えなくなるのは寂しいけど……」

香織が、美鈴の言葉を途中で遮った。

「お姉さん、アタシに、良いアイディアがあるわ。お姉さんが、もう誰にも追われなくなる、良い方法」

「えっ？ そんな方法、あるの？」

「ええ。アタシを殺すの。そして、アタシの名前と戸籍を使うのよ」

美鈴は、驚愕した。

「そ、そんなこと、できないよ！」

「できるわよ。アタシの死体は、重油をかけて燃やして。体育館の暖房用ボイラー室に行けば、重油はあるわ。アタシの遺灰は、川に流して。お姉さんのお母さんのようにね。そうすれば、アタシとお姉さんが入れ替わった証拠は、どこにも残らないわ」

「そういう意味じゃないよ。香織は、まだまだ生きなきゃ。まだ若いんだから」

香織は、急に、悲しそうな顔になった。

「アタシ、もう、生きられないの」

「そんなこと言うなよ」

「事実なのよ。アタシの体、手足の先のほうから、壊疽えそを起こして、腐り始めてるの。このままだと、すぐに体中に毒が回って、死んじゃうの。本来なら、壊疽を起こした手足を切り落とす切断手術をするんだけど、ここは学校の保健室だから、手術は一切できない。

アタシも、手足が切り落とされるなんて、まっぴらだけどね」

美鈴は、香織の衝撃的な告白に絶句し、口を開けなかった。

「実はね。おとといのお昼休みに、保健委員の口達が言ってたの。ああ、この女、もうダメだな。何力所も、壊疽を起こしてる、って。それで、保健委員長がアタシの枕元に来てね、こう言ったの。どうする？ このまま放置して、苦しみながら時間をかけて死ぬか、それとも、安楽死するか、って。アタシ、聞いてみたの。安楽死って、どうやるの？ 彼は答えたわ。点滴のパックに、洗剤を入れる、って。それで、アタシ言ったの。少し考えさせて。すると彼は言ったわ。分かった。三日間待つよ。それ以上経つと、痛みで苦しむことになるよ、って。そう言われた次の日に、この保健室に、美鈴お姉さんが来た。そして、安楽死をするか否かを答える期限が、明日の昼休みなの」

美鈴の顔は、大きく歪んでいた。悲しみと、苦惱で。二つの瞳には、涙が、いっぱいにたまっていた。

香織には、生きるための選択肢がなかった。どの選択肢をとっても、死を数日延ばすことしかできない。

美鈴にも、選択肢はなかった。生き延びる唯一の方法は、香織と入れ替わり、香織の名前で生きていくことだった。

美鈴は、香織の申し出を、承諾した。

香織の希望によって、美鈴は、香織を校庭に連れ出した。校庭の中央に、シートでくるんだ香織の体を、横たえた。

「夜空を見上げるのは、久しぶりよ。春の夜風も、とても気分が良いものね。満月は、ちょっと欠けてるけど、だけどそのほうが、風情があるかもね」

香織は目を閉じ、静かにつぶやいた。

「願わくは 花のもとにて 春死なむ……」

そこで目を開け、美鈴を見た。

美鈴は、香織のそばにひざまずいていた。

「この先が、どうしても思い出せないの。この三日間、ずっと考

えてるのに。国語の授業をサボってばかりいた罰かしらね。美鈴お姉さん、知ってる？」

美鈴は頷き、静かに答えた。

「そのきさらぎの望月のころ」

香織の顔に、笑顔が溢れた。

「この歌の歌人は、この歌の通りに、亡くなったそうね」

「らしいね」

美鈴は、香織の前髪を、優しくかき上げた。

「そうされると、気持ちいいわ。昔、アタシがちっちゃかった頃、母さんは、よくそうしてくれていたわ」

「香織、もし最後に、何かしたいことがあったら、何でも言ってみよう。アタシにできることなら、何でもするから」

香織は静かに微笑みながら、答えた。

「したいことはもうないけど、お願いはあるわ」

「何？」

「もしいつか、美鈴お姉さんが、どこかでアタシの母さんに出会ったら、こう伝えて。香織を産んでくれて、ありがとう、って。以前は、母さんを憎んだことがあった。恨んだことがあった。呪ったこともあった。だけど今は、香織は、感謝してる。母さんが産んでくれたから、十六年の短い人生だったけど、生きることができた。短い人生だったけど、楽しいことも、少しはあった。嬉しいことも、ちょっとはあった。それに、ほんの少しだけど、友達もできた。そして、最後に、大切な人のために、役立つことができた。香織は、この世に生まれて来て、本当によかった。母さん、ありがとう」

美鈴の瞳から、涙が一粒、こぼれ落ちた。美鈴が涙を流したのは、母が死んだ時以来だった。

「香織、分かったよ。もし出会うことができたなら、絶対に伝える約束するよ」

「アタシ、美鈴お姉さんの役に立つことができ、嬉しいわ。美鈴お姉さんのような素晴らしいひとと、出会えて良かった」

「アタシも、香織のような素晴らしいコと出会えて、本当に良かったよ」

「じゃあ、お姉さん、ひと思いに心臓を撃ち抜いて。アタシ、首から下は、全身不随で何も感じないから。撃たれても、痛くないわ」  
「分かった」

美鈴は、静かにうなずいた。

銀色のリボルバーの銃口を、香織の心臓に当てた。

香織が、満面の笑みを浮かべた。あまりにも大きな悲しみを、覆い隠そうとでもするかのように。

「お姉さん、さようなら。香織の分も、長生きしてね」

香織が、静かにまぶたを閉じた。

美鈴は、顔を背けた。香織の顔を直視することは、できなかつた。両目を、強く閉じた。にもかかわらず、その両目からは、大量の涙が溢れた。

美鈴は、歯を食いしばった。引き金にかけた指先に、力を込めた。両目を、閉じたまま。

銃声が、轟いた。

三十八口径の銃声は、まるで、彼女の慟哭のような響きだつた。

美鈴は、声をあげて泣いた。泣きじゃくつた。大量の涙を流し、嗚咽した。そして、叫んだ。何度も、何度も。その叫びは、一言も、言葉にはならなかつたが。

しばらくの間、号泣し続けたあと、美鈴は、自分の涙を拭いた。

香織の顔を濡らしていた涙も、手のひらで優しく拭いた。

その涙は、美鈴のものなのか、それとも香織のものなのか。おそらく、両方だろう。

強い風が、吹いた。ひとひらの花びらが、香織の頬に、舞い落ちた。

桜の花びらだつた。

美鈴は、風が吹いてきた方角を見た。食堂ホールの脇に、数本の桜の木があつた。既にほとんどの花びらが落ちていたが、まだわず

かに、花が残っている枝もあった。

その枝の一つを、手折った。

美鈴は、桜の枝を、香織の胸の上に置き、手向けた。彼女の安らかな眠りを祈って。

香織の耳元に、くちびるを寄せた。

「さよなら、香織。アタシの大切な、妹」

美鈴は、立ち上がった。右手には、銀色のリボルバーが、握られていた。月明かりを反射し、輝いていた。深い悲しみを湛えたような、輝きだった。

## 最終章・終

**最終章「明日に向かって撃つ!？」(後書き)**

これで完結です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
感想のほど、よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1968g/>

---

スクール・ギャング×シューティング・ガール

2010年10月9日01時40分発行